

## 第7章 旧万寿寺跡第10次調査

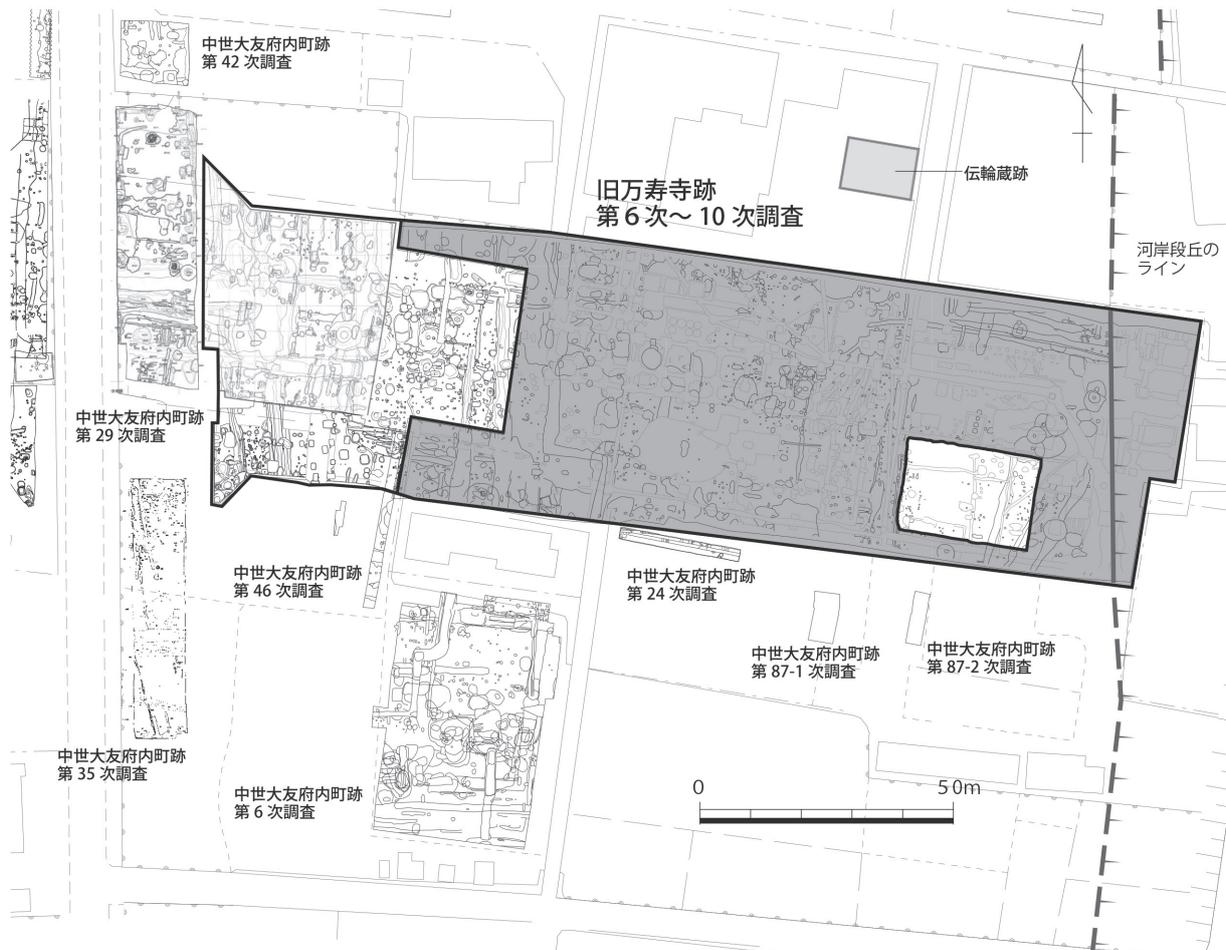
### 第1節 調査の概要

調査期間  
平成27年  
5月18日～  
平成28年  
3月2日

調査面積  
6,604.5㎡

本章で報告する旧万寿寺跡第10次調査は、都市計画道路庄の原佐野線（元町工区）建設に伴い大分県土木建築部大分土木事務所からの委託を受けて実施したもので、平成27年（2015年）5月18日から平成28年（2016年）3月2日の間、発掘調査を実施した。平成27年度の発掘調査では、これまで未調査だった地点に加え、前年度に調査を実施した旧万寿寺跡第9次調査区（面積492.9㎡）を含めた範囲を調査対象とした。そのため、発掘調査区は南北約50m、東西約135mを測り、調査対象となった総面積は7,097.4㎡である。従って、第10次調査区の面積は、前記した総面積から第9次調査区の面積を減じた広さ、すなわち6,604.5㎡となる（第7-2図）。調査対象面積が広範囲に及ぶため、最盛期には調査班4パーティ以上を投入し、発掘作業員100人前後が稼働することになった。

本調査区は大分県大分市大字大分に所在し、東側は平成26年度に発掘調査を行った旧万寿寺跡第8次調査区に隣接する。また、用地買収の関係で未調査となっていた第8次調査区の北側と南東側についても合わせて発掘調査を行ったので、第10次調査区の北西隅は第6次調査区（平成23年度調査）に、南西隅は第7次調査区（平成25年度調査）にも接することとなった。各調査区の位置関係は、第7-1図および第7-2図を参照されたい。

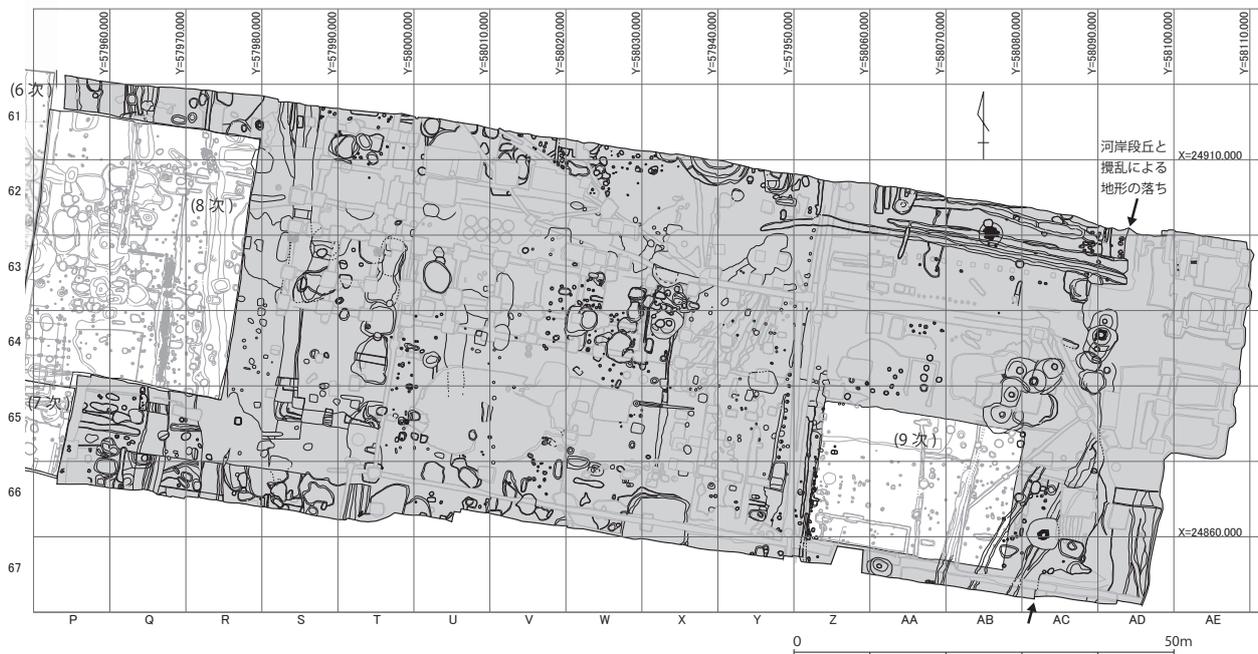


第7-1図 旧万寿寺跡第10次調査の位置 (1/15,000)

第7章 旧万寿寺跡第10次調査

調査対象地区の大部分は、昭和32年（1957年）に開設された帆秋病院の敷地として利用されていたため、攪乱や削平を受けた部分が多い。また、調査区の東側（AD63～AC67区）には河岸段丘による地形の落ちが存在している（第7-2図）。地形的な条件から、これより東側は遺構が少ない地域と想定されていたが、それに加えて病院関連の建物が存在したこともあり、当該地点以東については、中世段階の明瞭な遺構が検出できなかった。

平成27年5月より発掘調査を開始し、先ず用地買収が終了していた第8次調査区南東側の地点（P66～Q67区付近）から表土剥ぎに着手した。当該地点を発掘調査しながら、東側に隣接する病院建物の解体・撤去を待ち、その作業完了後の同年8月から、発掘調査対象地点を一気に拡大した。予測されていたとはいえ、病院の敷地部分には攪乱や削平が著しく、本来は複数存在したと考えられる遺構面は地山直上の1面に留り、期待されていた万寿寺関連の建物、もしくは建物の痕跡は確認することができなかった。しかしながら、深く掘られていた溝や井戸、土坑、柱穴などは数多く検出され、瓦溜めや廃棄土坑、土師質土器片が集中した土器溜めなども存在した。また、万寿寺の区画に関わると推定される屈曲部をもつ溝や柱穴列などは、寺院の伽藍配置や境内施設を検討する上で重要な遺構と推定される。出土遺物についても、多くの瓦に加え、「万寿寺」の刻書をもつ大型の瓦質土器香炉など、貴重な資料が出土している。さらに、徳治元年（1306年）の万寿寺創建時期よりも遡る12～13世紀代の墓や土坑、井戸などの遺構が確認されたことも、注目に値する。その一方、攪乱や遺構の切り合いが著しい地点があることに加え、遺構の埋土と周辺土壌の判別が難しい地点も存在したため、遺構検出を適切に行わないまま掘り下げを進めてしまったり、土層観察用ベルトを適切な場所に設けられなかった場合があるなど、調査の手順・進行方法についての反省点も多い。



第7-2図 旧万寿寺跡第10次調査全体図 (1/1,000)



第7-3図 旧万寿寺跡第10次調査遺構配置図① (1/300)



第7-4図 旧万寿寺跡第10次調査遺構配置図② (1/300)



第7-5図 旧万寿寺跡第10次調査遺構配置図③ (1/300)



第7-6図 旧万寿寺跡第10次調査遺構配置図④ (1/300)

第5表 旧万寿寺跡第10次調査主要遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
10-SK002	S002	土坑(耕作痕跡)	P65～Q65区	Ⅶ期(16世紀末)以降		212
10-SK005	S005	土坑(耕作痕跡)	P65～Q65区	Ⅶ期(16世紀末)以降		213
10-SK006	S006	土坑(耕作痕跡)	Q65区	Ⅶ期(16世紀末)以降		213
10-SK007	S007	土坑(耕作痕跡)	Q65区	Ⅶ期(16世紀末)以降		213
10-S010a	S010	土坑	Q65区	Ⅶ期(16世紀末)以降		214
10-S010b	S010	土坑	Q65区	Ⅶ期(16世紀末)以降		214
10-SK014	S014	土坑(耕作痕跡)	Q66～R66区	Ⅶ期(16世紀末)以降		216
10-SD015	S015	溝	Q64～Q66区	Ⅵ期(16世紀後半)	08-SD139と同一遺構	176
10-SK017	S017	土坑(耕作痕跡)	Q65～Q66区	Ⅶ期(16世紀末)以降		216
10-SD020	S020	溝	Z66～Z67区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		200
10-SK024	S024	土坑	Q66区	不明		216
10-SD025	S020	溝	Z65～Z66区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		200
10-SK027	S027	土坑	U63区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		217
10-SK029	S029	土坑	AA62区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		218
10-SK030	S030	土坑	AC62区	Ⅵ期(16世紀後半)		220
10-SK031	S031	土坑	Z62～Z63区	Ⅰ期(14世紀前半)	遺物集中部(土器溜め)	222
10-SK034	S034	土坑	AC62区	Ⅰ期(14世紀前半)	遺物集中部(土器溜め)	227
10-SK036	S036	土坑	AC62区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		230
10-SK037	S037	土坑	T61～T62区	Ⅰ期(14世紀前半)		232
10-SK038	S038	土坑	W64区	Ⅵ～Ⅶ期(16世紀後半～末)	墨書のある京都土師器	236
10-SD040	S040	溝	AA62～AD62区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		202
10-SD045	S045	溝	AA62～AD63区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		209
10-SK048	S048	土坑	W64区	不明		236
10-SK049	S049	土坑	W64区	Ⅵ期(16世紀後半)		232
10-SK050	S050	土坑	S63～T63区	不明		237
10-SK051	S051	土坑	W63～W64区	Ⅵ期(16世紀後半)		237
10-SK052	S052	土坑	W63区	Ⅵ期(16世紀後半)		237
10-SD055	S055	溝	Q61区	Ⅰ期(14世紀前半)・Ⅵ期(16世紀後半)		195
10-SD060	S060	溝	S61～S62区	Ⅰ期(14世紀前半)		188
10-SK061	S061	土坑	AC63区	Ⅰ期(14世紀前半)		237
10-SK062	S062	土坑	AC63区	Ⅰ期(14世紀前半)		241
10-SK068	S068	土坑	S63区	不明	SK150遺構内の埋土	242
10-SK070	S070	土坑	S66区	不明		243
10-SK072	S072	土坑	X64区	不明		244
10-SK072	S078	土坑	X63区	不明		244
10-SK081	S081	土坑	X63区	不明	再加工した茶臼下臼	245
10-SK085	S085	土坑	R61区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)	土坑上面に丸瓦2枚を並べる	245
10-SD090	S090	溝	R65～R66区	Ⅰ期(14世紀前半)	08-SD100と同一遺構	185
10-SK091	S091	土坑	R61区	不明		245
10-SK093	S093	土坑	P61区	不明	「万寿寺」刻書瓦質土器香炉	245
10-SP094	S094	柱穴	V63区	不明		373
10-SK095	S095	土坑	T66区	不明		249
10-SP097	S097	柱穴	V63区	不明		373
10-SP098	S098	柱穴	V63区	不明		373
10-SP099	S099	柱穴	W63区	不明		375
10-S100	S100	溝	R65～R66区	Ⅰ期(14世紀前半)	08-SD100と同一遺構	185
10-SP101	S101	柱穴	X65区	15世紀代?		375
10-SP118	S118	柱穴	W66区	不明		375
10-SK121	S121	土坑	W66区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		251
10-SK130	S130	土坑	V66区	15世紀以降		253
10-SD140	S140	溝	S61～R65・T65～T66区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		185
10-SK145	S145	土坑	U65区	Ⅰ～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		254
10-SP147	S147	柱穴	T65区	不明		370
10-SP148	S148	柱穴	T65区	不明	柱穴内に大型礎石・SP188と関連?	370
10-SK150	S150	土坑	S63～T63区	Ⅰ期(14世紀前半)		254

第7章 旧万寿寺跡第10次調査

第6表 旧万寿寺跡第10次調査主要遺構一覧表②

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
10-SK152	S152	土坑	U65区	I期(14世紀前半)	SK145と一連の遺構	264
10-ST155	S155	墓?	W64区	12世紀後半		369
10-SK156	S156	土坑	T63区	不明		264
10-SK160	S160	土坑	W64区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)	瓦溜め	265
10-SK165	S165	土坑	T63区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		286
10-SK166	S166	土坑	T64区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		287
10-SK169	S169	土坑	Y66区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		288
10-SK170	S170	土坑	S66～T66区	不明		289
10-SK172	S172	土坑	T65区	不明		291
10-SK174	S174	土坑	T65区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		292
10-SK176	S176	土坑	T63～T64区	I期(14世紀前半)		293
10-SK177a	S177a	土坑	T63区	I期(14世紀前半)		293
10-SK177b	S177b	土坑	T63区	I期(14世紀前半)		293
10-SD180	S180	溝	AA62～AC62区	Ⅳ期(14世紀末～15世紀中頃～後半)		207
10-SP181	S181	柱穴	V63区	不明		373
10-SP183	S183	柱穴	V63区	不明		373
10-SD185	S185	溝	X64～X66区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		199
10-SP188	S188	柱穴	T65区	不明	柱穴内に大型礎石・SP147と関連?	370
10-SK190	S190	土坑	X66区	Ⅵ期(16世紀後半)		295
10-SK195	S195	土坑	T61区	Ⅶ期(16世紀末)以降	唐津焼出土	298
10-SK196	S196	土坑	R61区	不明		298
10-SK201	S201	土坑	Q61区	Ⅶ期(16世紀末)		299
10-SK204	S204	土坑	S66区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)?		299
10-SK205	S205	土坑	T61区	15世紀以降		300
10-SK206	S206	土坑	R66区	不明		301
10-SK207	S207	土坑	U66区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		301
10-SX210	S210	遺物集中部	T67区	I期(14世紀前半)		188
10-SK213	S213	土坑	V66区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		303
10-SK215	S215	土坑	U66区	不明		303
10-SK216	S216	土坑	Q61区	不明		306
10-SK217	S217	土坑	U66区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)以前?		309
10-SD218	S218	溝	AA62区	不明		209
10-SD219	S219	溝	AA62区	不明		209
10-SK222	S222	土坑	AB62区	15世紀以降		311
10-SD223	S223	溝	Y62～AD63区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		209
10-SK224	S224	土坑	P66～Q66区	不明		311
10-SE225	S225	井戸	AC66～AC67区	Ⅵ期(16世紀後半)	六角井戸	339
10-SK226	S226	土坑	P66区	不明		311
10-S227	S227	溝	Y62～AD63区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)	SD223の東側延長部?	209
10-SK232	S232	土坑	X63区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		312
10-SE233	S233	井戸	X64区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		359
10-SK236	S236	土坑	AC66区	Ⅴ期(16世紀前半)		313
10-SK239	S239	土坑	R61区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		313
10-SE250	S250	井戸	X62～Y62区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		362
10-SK253	S253	土坑	R66区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		314
10-SK254	S254	土坑	R66～S66区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		315
10-SK255	S255	土坑	V61～V62区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		316
10-SP257	S257	柱穴	U67区	不明		375
10-SK260	S260	土坑	AC65区	Ⅵ期(16世紀後半)		318
10-SP261	S261	柱穴	W63区	不明		375
10-SK262	S262	土坑	T66区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		320
10-SK263	S263	土坑	T61区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		321
10-SK265	S265	土坑	U61区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		321
10-SK268	S268	土坑	U61～V61区	不明		323
10-SD270	S270	溝	AB67～AC65区	Ⅱ期(14世紀後半)		201

第7表 旧万寿寺跡第10次調査主要遺構一覧表③

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
10-SE271	S271	井戸	X63区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		363
10-SK274	S274	土坑	R61区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		324
10-SK276	S276	土坑	Y62区	Ⅵ期(16世紀後半)		325
10-SE278	S278	井戸	Y62区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)	「羅」刻書土器	366
10-SK279	S279	土坑	Y62区	不明		325
10-SE280	S280	井戸	AB64～AC65区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		350
10-SK281	S281	土坑	Y62区	12世紀後半		325
10-SK284	S284	土坑	X61～X62区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		329
10-SP285	S285	柱穴	V63区	不明	柱穴内礎石	373
10-SK289	S289	土坑	V61～W61区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		329
10-SP295	S295	柱穴	V63区	不明	柱穴内礎石	373
10-SD298	S298	溝	S61区	I期(14世紀前半)		188
10-SK307	S307	土坑	T66～U66区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		331
10-SK308	S308	土坑	V61～W61区	I期(14世紀前半)		331
10-SK318	S318	土坑	X63区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		333
10-SK319	S319	土坑	AC67区	V～Ⅵ期(16世紀前半～後半)		333
10-SP320	S320	柱穴	S61区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		375
10-SK323	S323	土坑	AC64～AD65区	Ⅵ期(16世紀後半)		334
10-SE325	S325	井戸	AB64～AC65区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		350
10-SP326	S326	柱穴	S61区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		375
10-SK329	S327	柱穴	AC67区	不明		375
10-SD330	S330	溝	AA67～AB67区	9世紀中頃	09-SD001と同一遺構	200
10-SK333	S333	土坑	AC67区	Ⅵ期(16世紀後半)		336
10-SE335	S335	井戸	AB64～AC65区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		350
10-SD338	S338	溝	AB67～AC66区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		201
10-SK339	S339	土坑	X66区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		337
10-SE340	S340	井戸	AB64～AC65区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		356
10-SK345	S345	土坑	AC62区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		337
10-SK348	S348	土坑	Y66区	V期(16世紀前半)		337
10-SE350	S350	井戸	AC64～AD64区	Ⅵ期(16世紀後半)	六角井戸	346
10-SD360	S360	溝	X64～X66区	Ⅵ期(16世紀後半)		199
10-SK363	S363	土坑	AC64区	Ⅵ期(16世紀後半)		338
10-SP382	S382	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP383	S383	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP384	S384	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP386	S386	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP387	S387	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP388	S388	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP389	S389	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP390	S390	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP391	S391	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SP392	S392	柱穴	V63区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)	柱穴列を形成	373
10-SE394	S394	井戸	X67～AA67区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		357
10-SE395	S395	井戸	AD64区	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		346
10-SE400	S400	井戸	Q65～Q66区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		361
10-SK405	S405	土坑	Q66～R66区	不明		339
10-SP409	S409	柱穴	W64区	不明		375
10-SE410	S410	井戸	AB64～AC65区	Ⅱ期(14世紀中頃～後半)		356
10-SP423	S423	柱穴	V61区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		375
10-SE440	S440	井戸	X63区	12～13世紀		369
10-SP447	S447	柱穴	W61区	I～Ⅱ期(14世紀前半～後半)		375
10-SE454	S454	井戸	AC64～AD64区	不明		346
10-SD457	S457	溝	Y64区	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)		199
10-SE459	S459	井戸	AC63～AB64区	I期(14世紀前半)		358
10-SX500	-	その他(礎石廃棄遺構)	R61区	不明	報告書作成時に遺構番号を命名	375

本調査区で確認された遺構は、その大多数が12世紀代から16世紀代に比定される。内訳は溝が約20条、土坑（瓦溜め・土器溜めを含む）・柱穴（柱穴列を含む）が多数、井戸が17基、墓と推定される遺構1基、その他の遺構（礎石廃棄遺構）1基などである。

上記の遺構の掘り下げが完了に近づいた平成27年（2014年）12月25日と翌年1月21日に、遺跡全体の空中写真撮影を実施した。その後、遺構の一部に残っていた土層観察用ベルトの撤去や実測作業などを行った後、平成28年（2015年）3月2日に都市計画道路庄の原佐野線（元町工区）建設に伴う現地での発掘調査をすべて終了することができた。

なお、本遺跡は国指定史跡「大友氏遺跡」に隣接する地点であるため、文化庁の指導のもと、大分県土木建築部と協議を行い、可能な限りの遺跡の保存に努めた。その結果、道路建設工事に伴い一部の地点が破壊されたものの、重要な遺構と判断された地点については道路下にて保全される運びとなった。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 溝

#### 10-SD015（第7-10図・第7-11図）

Q65～Q66区に位置する溝である。第10次調査区で検出したのは、上面幅2.8m、長さ16.0m、深さ1.30～1.38mを測る。溝の延長部は北側に続き、第8次調査のQ63区では溝の終息部を確認している。現状で確認された溝の総延長は32mである。遺構の保全のため、調査区南壁付近（Q66区）とQ65区の2箇所土層観察のためのトレンチを設けて完掘したが、他の地点は掘り下げを行っていない。

主軸を同じくする2本の溝が重複

上層溝  
08-SD168  
(16世紀後半)

下層溝  
08-SD360  
(時期不明)

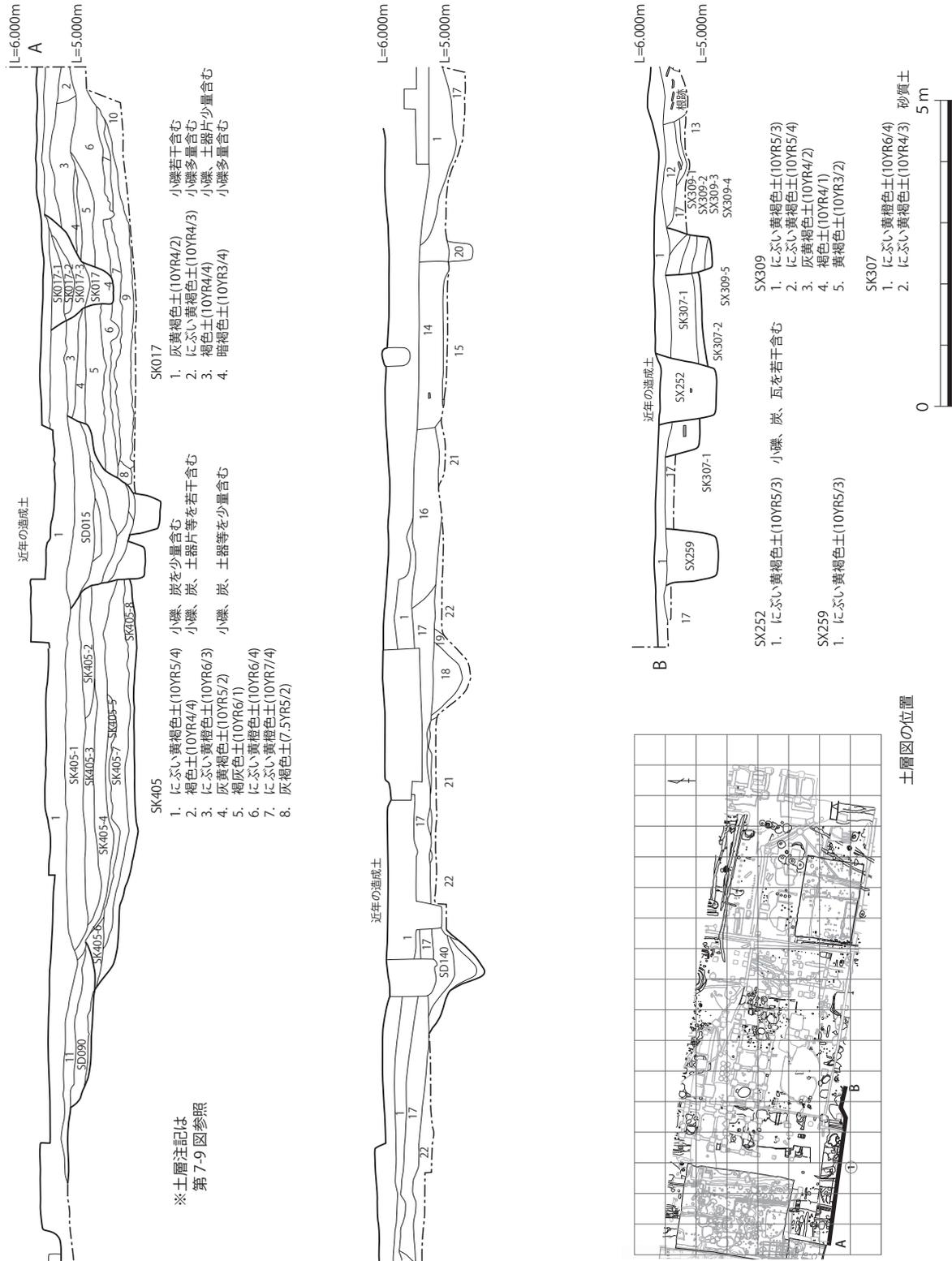
溝の平面形態と土層を観察すると、当該地点では断面が略台形で深さ0.95mの上層溝と断面が箱状で深さ1.38mの下層溝という、主軸をほぼ同じくする2本の溝が重複することが判明した。その位置関係から判断して、10-SD015上層溝は08-SD168、10-SD015下層溝は08-SD360と同一遺構と考えられる。第8次調査区では上層溝の埋土中に多量の礫が廃棄された状況が観察できたが、第10次調査区ではそのような状況は一切認められず、対照的な様相を呈する。また、10-SD015下層溝（08-SD360）は第8次調査のQ64区で終息部を確認しているため、当該溝の総延長は10.55mとなる。

埋土中からは、16世紀後半（Ⅵ期）と15世紀後半の遺物が混在しているが、前者が上層溝の時期を示唆するものと思われる。15世紀後半の遺物は、周辺の遺構からの混入品であろう。下層溝の構築時期は、出土遺物が少ないため不明である。

#### 10-SD015出土遺物（第7-12図・第7-13図）

1は中国景德鎮系青花碗で、小野分類E群に分類される16世紀後半の製品である。胴部外面に魚藻文、口縁部内面には圈線が描かれている。2は中国龍泉窯系青磁盤（大皿）で、見込みに印花による草花文、胴部内面に鎬文が認められる。残存部の外面は無文となる。15世紀代に比定される製品であろう。3は備前焼大甕の肩部片で、外面に刻字が認められる。また、刻字に切られている櫛描き文は、意図的な文様なのか、器面調整の痕跡であるのかは判断がつかない。4は備前焼播鉢で、胴部内面に放射状播目と斜め播目が施されている。5は備前焼壺の口縁部である。備前焼の製品は3・4が16世紀後半に比定され、5は詳細な製作時期を特定できない。

6は土師質土器で、器壁が薄く、周防産の製品と思われるもの。内外面の一部にススの付着が認められる。15世紀後半の製品である。7は吉備系土師器碗の底部で、14世紀初頭から前半に比定される。6・7は混入品と思われる。8は在地で生産された京都系土師器の皿で、器壁がやや厚いことから、16世紀後半の製品である。9・10は土師質土器小皿で、底部には糸切り痕が認められ



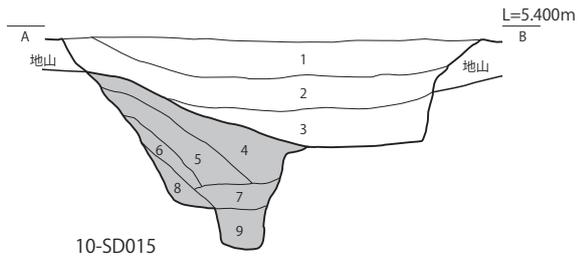
第7-7図 旧万寿寺跡第10次調査土層図① (1/100)





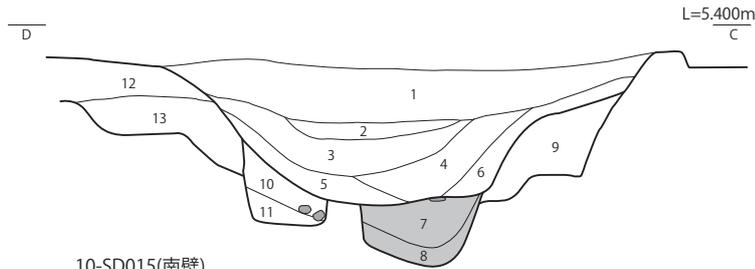


第7-10図 10-SD015・10-SD055・10-SD060・10-SD090・10-SD100・10-SD140・10-SD298実測図(1/300)



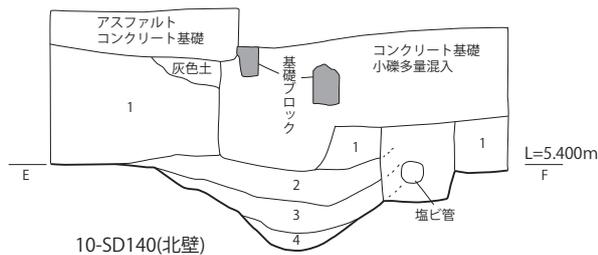
1. 灰黄色土(2.5Y6/2) 焼土、砂りを少量含む
2. 明黄褐色土(2.5Y6/6) 焼土を微量含む
3. 明黄褐色土(2.5Y8/6) 粘質土
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 粘質土 焼土をわずかに含む
5. 黄褐色土(2.5Y5/3) 粘質土 焼土をごくわずかに含む
6. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘質土層で小礫を少量含む
7. 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質土
8. 明黄褐色土(2.5Y7/6) 砂質土
9. 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘質土

10-SD015



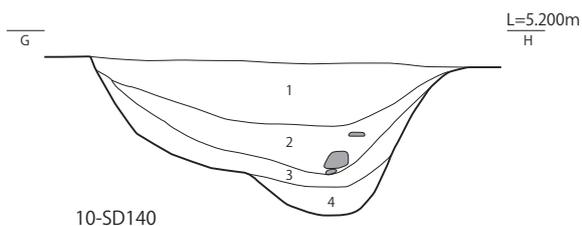
1. 暗褐色土(10YR3/4) 礫、瓦等をやや多く含む
2. 褐色土(10YR4/6) 地山混じり
3. 褐色土(10YR4/4) 炭化物と小礫を若干含む
4. 暗褐色土(10YR3/3) 地山混じり
5. 褐色土(10YR4/6) 土器片と炭化物を若干含む
6. 褐色土(10YR4/6) 地山土、礫、瓦、土器片等を若干含む
7. 暗褐色土(10YR3/4) 遺物、小礫を若干含む
8. 褐色土(10YR4/6) 地山土をやや多く含む
9. 暗褐色土(10YR3/3) 整地層 土器片、炭化物を含む
10. 暗褐色土(10YR3/4) 礫、瓦等を含む
11. 暗褐色土(10YR3/3) 地山混じり、炭化物、土器片を若干含む
12. 黄褐色土(10YR5/6) 遺構検出層 遺物、炭化物をほとんど含まない
13. 暗褐色土(10YR3/3) 10層と同様

10-SD015(南壁)



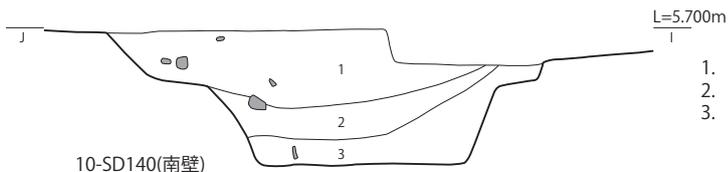
1. 褐灰色土(10YR5/1) 小礫、瓦を少量含む
2. 褐灰色土(10YR4/1) 小礫、土器片を含む
3. 黒褐色土(10YR3/2) 小礫をわずかに含む
4. 黒褐色土(10YR3/1) 砂質土

10-SD140(北壁)



1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 土器片、瓦、礫を少量含む
2. 褐色土(10YR4/4) 大型の礫、瓦を多く含む
3. 褐色土(10YR4/6) 土器片、小礫を含む
4. 暗褐色土(10YR3/3) 土器片、小礫を含む

10-SD140

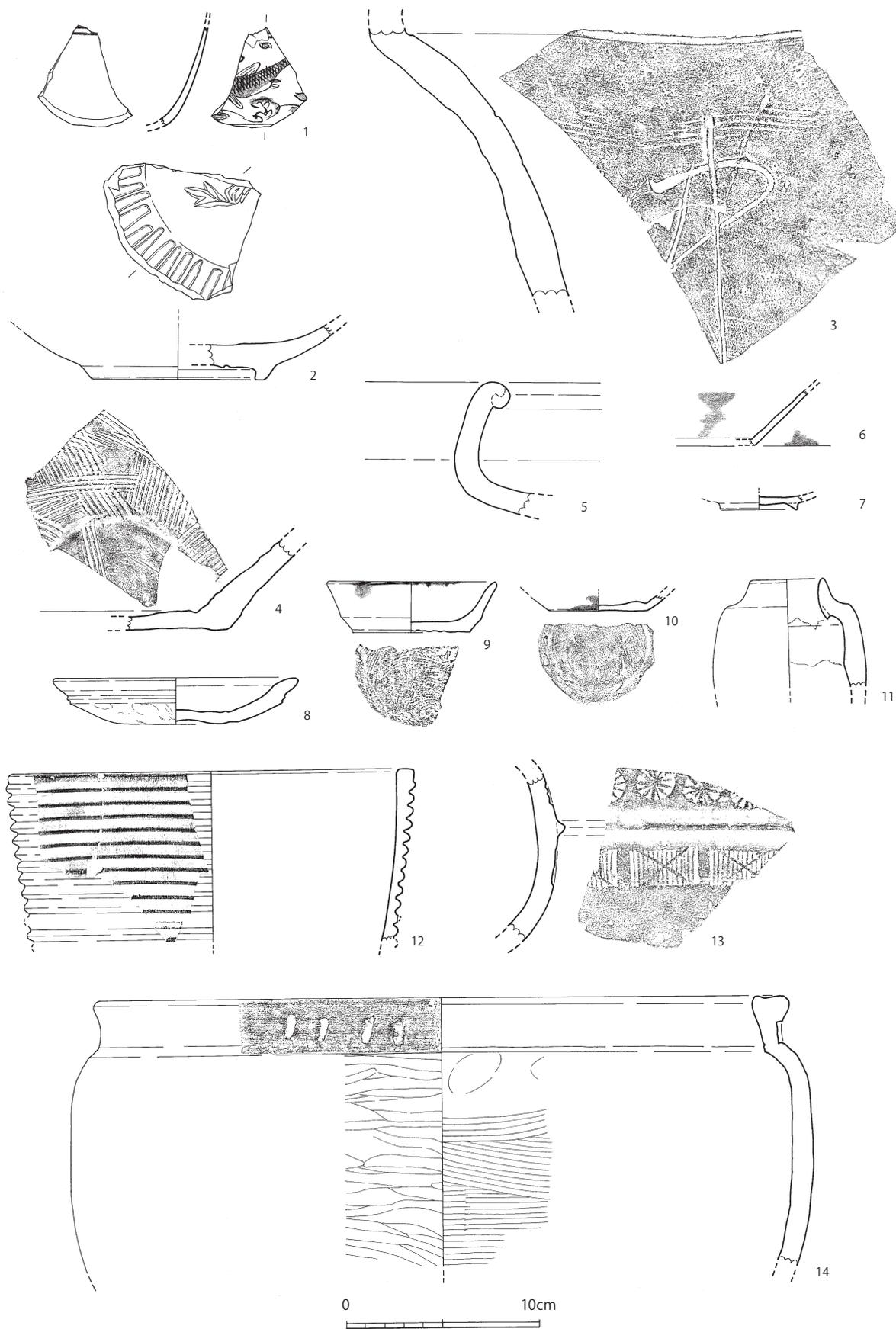


1. 暗褐色土(10YR3/3) 土器片、礫、瓦、炭化物の小片を含む
2. 暗褐色土(10YR3/4) 土器片、炭化物の小片を含む
3. 褐色土(10YR4/6) やや大型の瓦、礫を含む砂質土

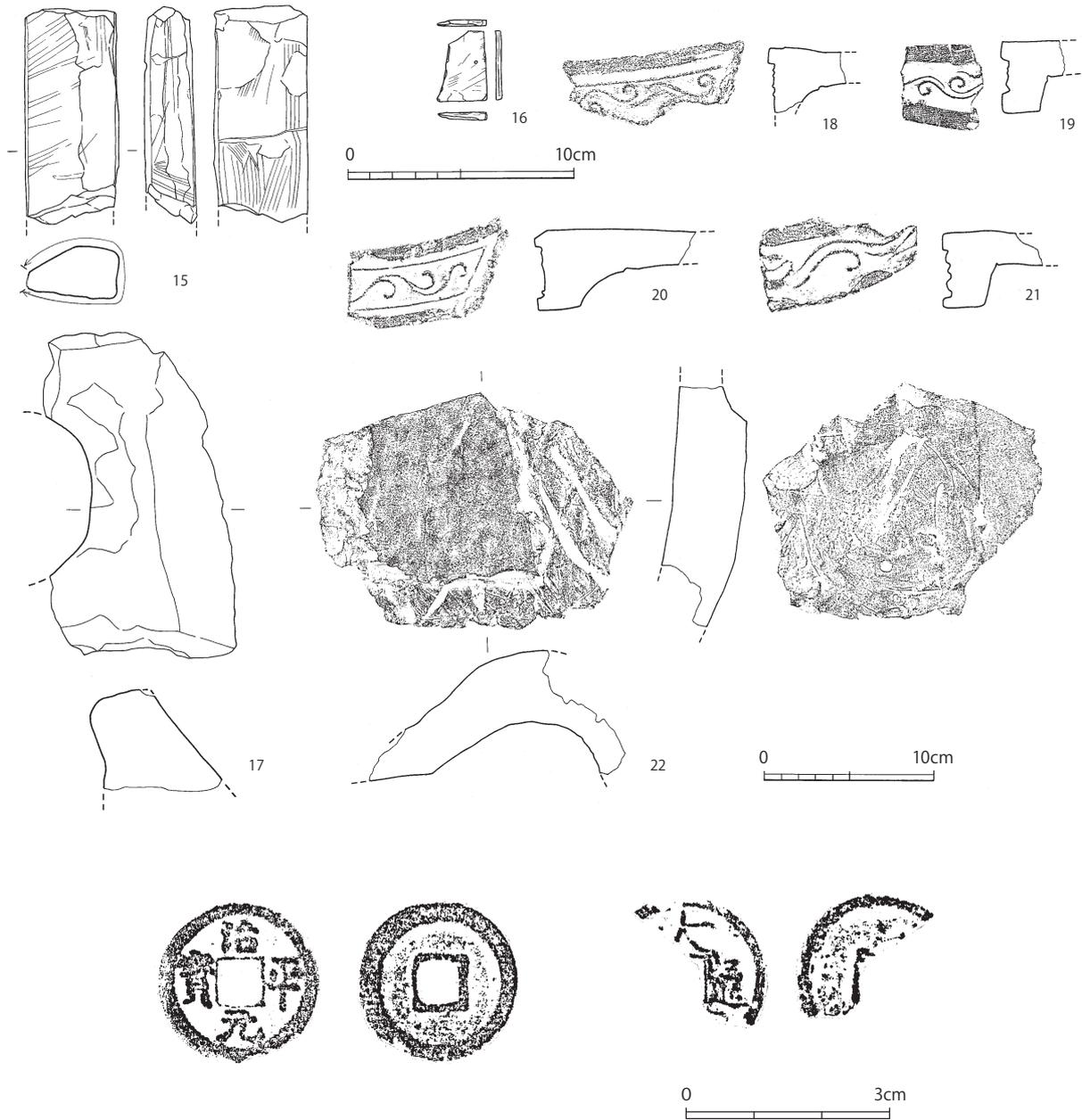
10-SD140(南壁)



第7-11図 10-SD015・10-SD140土層図 (1/60)



第7-12図 10-SD015出土遺物実測図① (1/3)



第7-13図 10-SD015出土遺物実測図② (1/3、1/4、1/1)

る。いずれもススの付着が認められる。15世紀代の製品である。11は焼塩壺で、胴部下半と底部を欠損する。16世紀後半に比定される。12～14は瓦質土器の火鉢あるいは風炉で、12・14は16世紀後半、13は15世紀代の製品である。

15～17は石製品で、15・16は砂岩を素材とする砥石、17は凝灰岩製の石塔火輪の破片である。18～22は瓦埴類で、18～21は軒平瓦、22は雁振瓦の破片である。23・24は銅銭で、23は初鑄造年1064年の北宋銭「治平元寶」、24は初鑄造年1107年の北宋銭「大觀通寶」である。



第7-14図 10-SD090・10-SD100出土遺物(1/3、1/1、1/4)

## 10-SD090・10-SD100 (第7-10図・第7-11図)

R65～R66区に位置する溝である。第10次調査区で検出したのは、上面幅2.3m、長さ13.6m、深さ0.30～0.45mを測る。溝の延長部は北側に続き、第8次調査区の08-SD100となる。第8次調査のR62区では溝の終息部を確認しており、現状で検出された溝の総延長は44mである。調査区南壁付近(R66区)を完掘したが、遺構の保全のため、他の地点は掘り下げを行っていない。R65区付近を08-SD100、完掘したR66区付近を08-SD090として、遺物を取り上げた。出土遺物の様相から、遺構の年代はI期(14世紀前半)と推定される。

## 10-SD090・10-SD100出土遺物 (第7-14図)

1～4は10-SD090、5～8は10-SD100として取り上げた遺物である。

1は丸瓦で、凸面に縄目叩きが残る。2は中国同安窯系青磁皿で、13世紀代の製品。3・4は銅銭の破片である。3は「治」の字が残存しているため、初铸造年1064年の北宋銭「治平通寶」であろうか。4は銭種不明である。

5は土師質土器坏で、全体に磨滅が著しい。外面に擦過痕が認められる。6は砥石である。7・8は軒丸瓦と軒平瓦で、万寿寺の創建時に使用されたものである。

## 10-SD140 (第7-10図・第7-11図)

S61～S65区およびT65～T66区に位置する溝である。SD140はS65区とS66区でL字状に屈曲する。その規模は上面幅2.5～3.2m、長さはS61～S65区で約42m、S65～T65区で約14m、T65～T66区で約14m、深さは約0.8mである。遺構の保全のため、溝の一部や屈曲部付近に土層観察用の断ち割りを入れたほか、道路の地下施設によって破壊されるS61区とT66区を掘り下げたのみに留まる。14世紀前半の溝10-SD060と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は10-SD060→10-SD140である。埋土は3～4層に分層され、地点によっては瓦片や礫がまとまって出土する部位もあった。また、T66区においては、遺構の重複が激しかったため、当該溝の屈曲部を明瞭に確認できなかったが、T67区の状況から溝は南方向に屈曲すると結論した。出土遺物から、溝の年代はⅢ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀)と推定される。

なお、T67区において、14世紀代の土師質土器が長さ1.3m、幅0.4mの範囲に集中する地点を検出し、これらの遺物を10-SX210として取り上げた。発掘調査時にはこれらは溝10-SD140の埋土中に廃棄された遺物と考えていたが、発掘調査後の整理作業において、SX210の出土遺物とSD140の出土遺物の年代が合致しないことが判明した。従って、SX210はSD140とは完全に別々の遺構であり、SX210については明瞭に遺構のプランを検出することができておらず、これについては発掘現場での判断ミスと考えざるを得ない。

## 10-SD140出土遺物 (第7-15図・第7-16図)

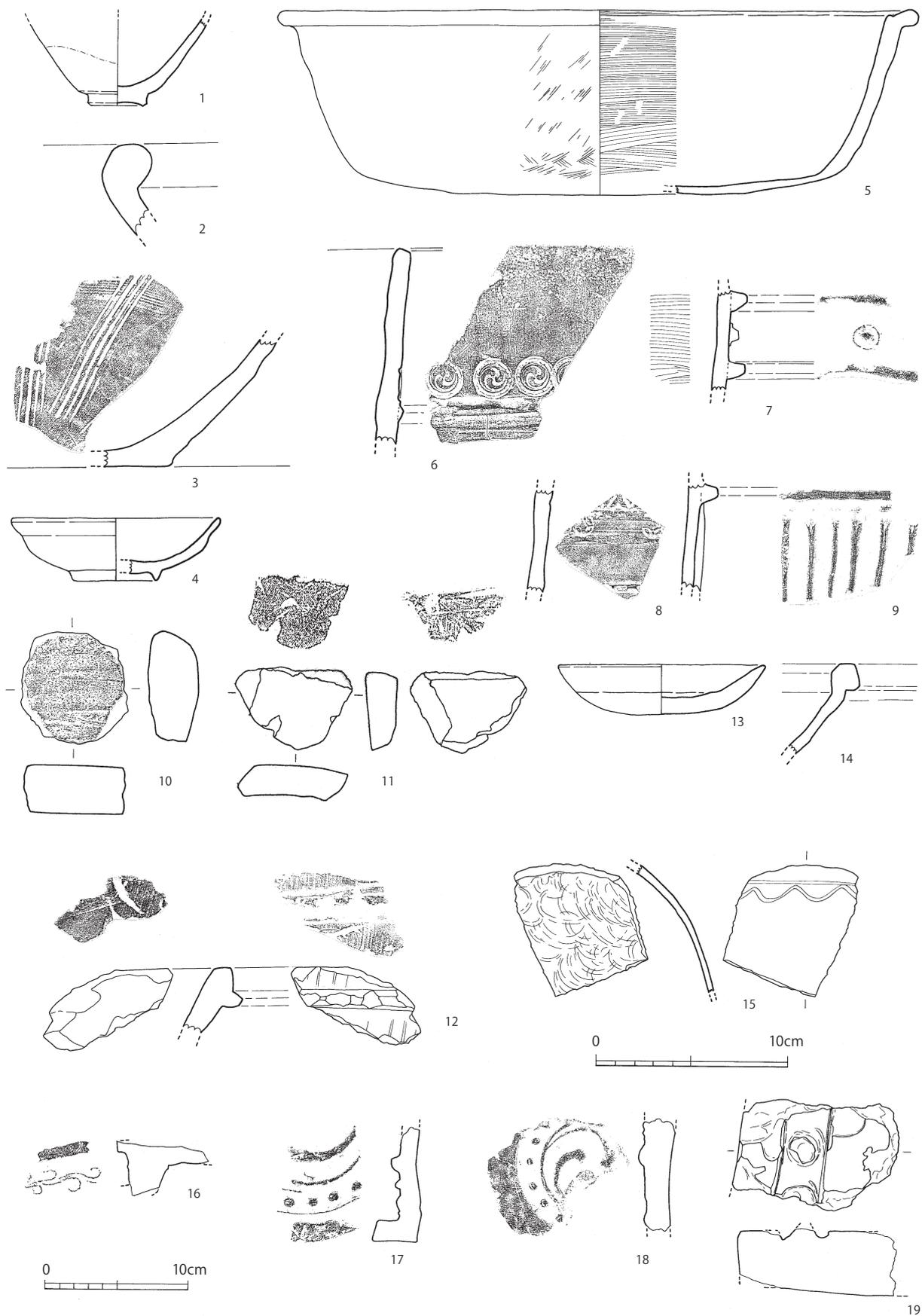
1は中国産の天目碗で、口縁部を欠損する。2は備前焼壺の口縁部破片、3は備前焼播鉢の底部である。4は吉備系土師器碗で、14世紀初頭から前葉の製品となる。5～9は瓦質土器で、5は土鍋、6～9は火鉢または風炉である。10は瓦片を円形に再加工した製品、11・12は滑石製石鍋の破片である。13は器壁が厚い京都系土師器の皿、14は中国南部産焼締陶器鉢の口縁部、15は朝鮮王朝産陶器の肩部破片である。15は壺または瓶と思われ、外面にヘラ描きの直線文と波状文、内面に同心円当具痕が認められる。なお、13～15は16世紀後半に比定される製品であるため、混入品であろう。

16～21は瓦磚類で、16は軒平瓦、17・18は軒丸瓦、19は鬼瓦、20は平瓦、21は丸瓦である。21には凹面に糸切り痕、凸面の端縁側に側縁と平行方向のカキ目状の調整が認められる。また、凹面に数本の吊り紐痕が残存している。22は用途不明の銅製品である。

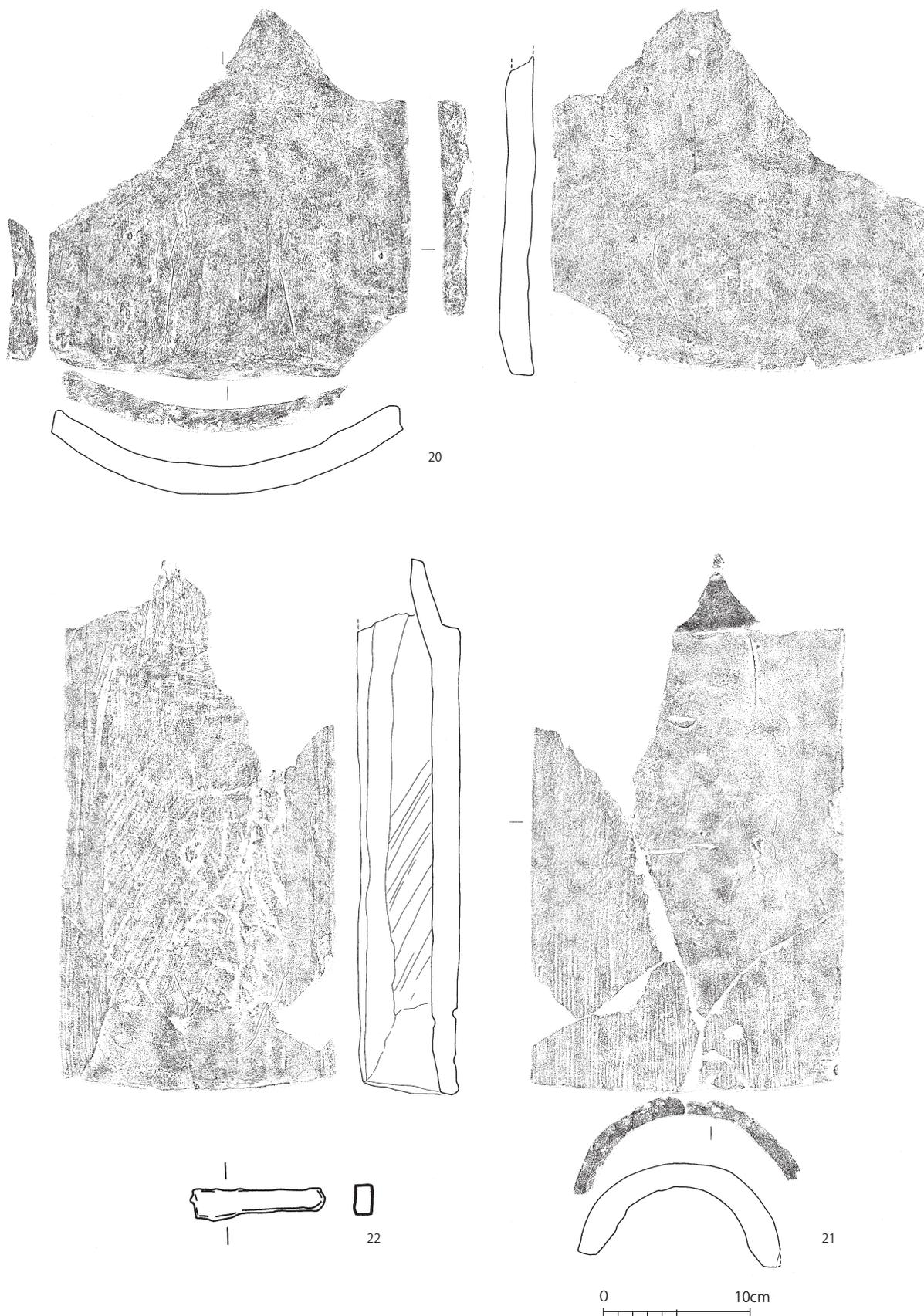
2箇所で  
L字状に  
屈曲

10-SX210

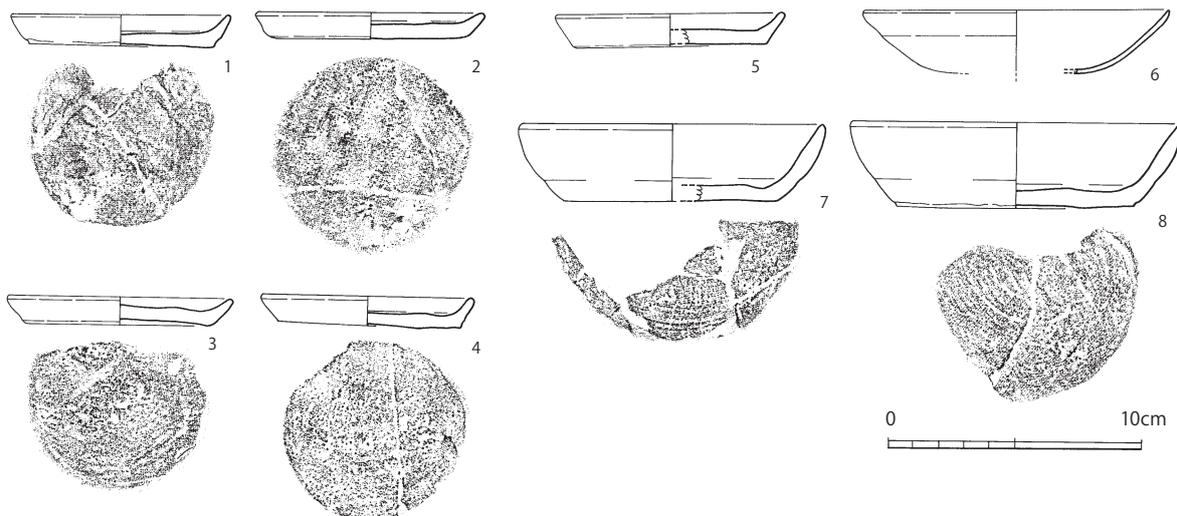
発掘現場で  
の判断ミス



第7-15図 10-SD140出土遺物実測図① (1/3、1/4)



第7-16図 10-SD140出土遺物実測図② (1/4)



第7-17図 10-SX210出土遺物 (1/3)

10-SX210出土遺物 (第7-17図)

京都産  
土師器  
皿S

1～5は土師質土器小皿で、底部は磨滅しているが、糸切り痕が認められる。6は京都産土師器の皿Sで、底部を欠損する。7・8は土師質土器坏で、これらも底部に糸切り痕が認められる。以上はまとめて出土していることから、14世紀代の良好な一括資料である。

10-SD060 (第7-10図・第7-18図)

将来の検  
証必要

S61～S62区に位置する溝である。その規模は上面幅1.0～1.5m、長さ約10m、深さ0.45mである。溝はS61区の南側でやや不自然に蛇行し、S62区で15世紀代の溝10-SD140に切られる。また、遺構の東側縁付近では、ほぼ同じ時期に構築された溝10-SD298と重複する。今回の調査では遺構の様相を以上のように考えたが、報告書作成の作業を行ってみると、溝の形態や切り合い関係等が不自然であり、今回の所見が当を得ているものなのかどうか、将来の調査で検証する必要がある。本調査では遺構の保全のため、道路の地下施設によって破壊されるS61区のみを完掘した。溝の埋土は3層に分層され、溝の中位以下から土師質土器がまとめて出土した。出土遺物には一括性が高く、在地系の土師質土器と京都産土師器皿S、および有溝丸形土錘がまとめて出土している。出土遺物から、遺構の年代はI期(14世紀前半)に比定される。

10-SD060出土遺物 (第7-19図～第7-22図)

京都産  
土師器  
皿S

1～24は土師質土器小皿で、底部には糸切り痕もしくは糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。また、24は欠損した口縁端部に加工を加え、口縁部を再生している。25～65は土師質土器坏で、これらも底部に糸切り痕もしくは糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。また、35の底部と胴部の境付近には貫通孔が設けられている。さらに、38の口縁端部内外面にはススの付着、65の底部内面には器種不明の鉄器(鉄釘か?)の付着が認められる。66・67は京都産土師器皿S、68は吉備系土師器碗底部の破片である。69は有溝丸形土錘である。この種の土錘が14世紀前半に比定される製品であることを示している。

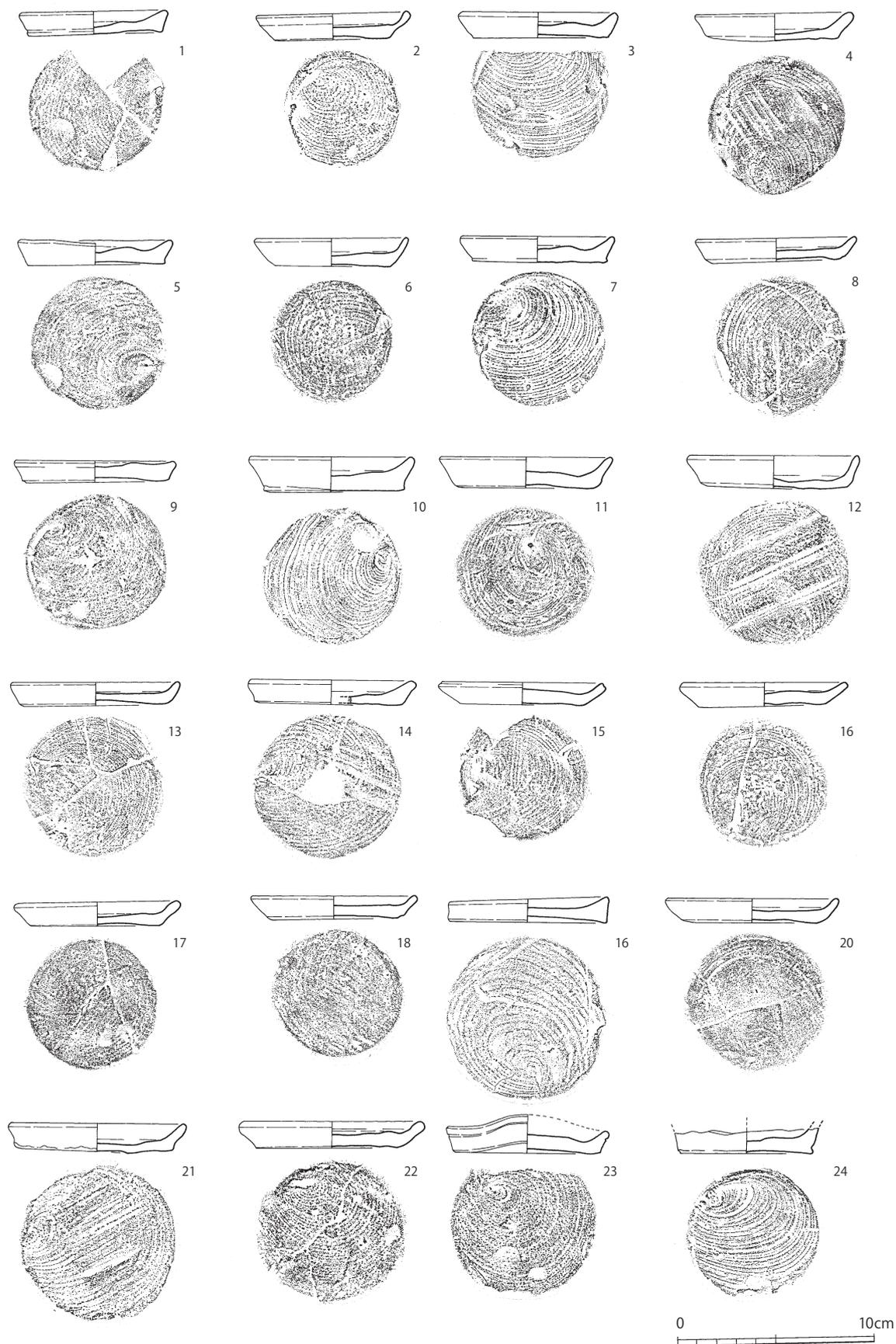
10-SD298 (第7-10図)

将来の検  
証必要

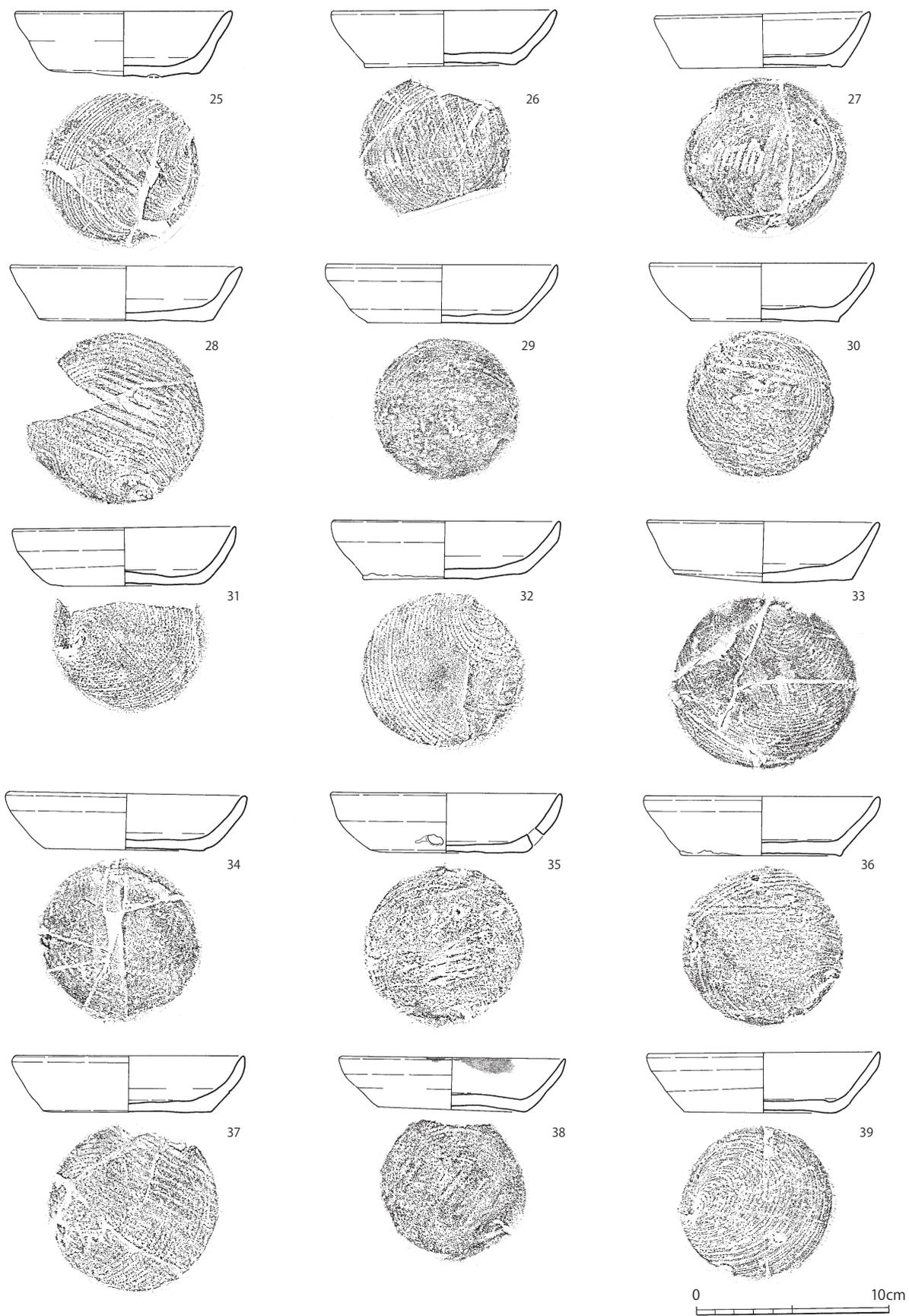
S61区に位置する溝である。その規模は上面幅0.5m、長さ3.8m、深さ30cmである。10-SD298は14世紀前半に比定される溝10-SD140の東側縁付近に重複して構築されているが、前述の通り、遺構相互の関係にやや不自然な点があり、将来の検証が必要となる遺構である。遺構の時期については出土遺物に14世紀代のものが多いことから、I期(14世紀前半)に比定しておきたい。



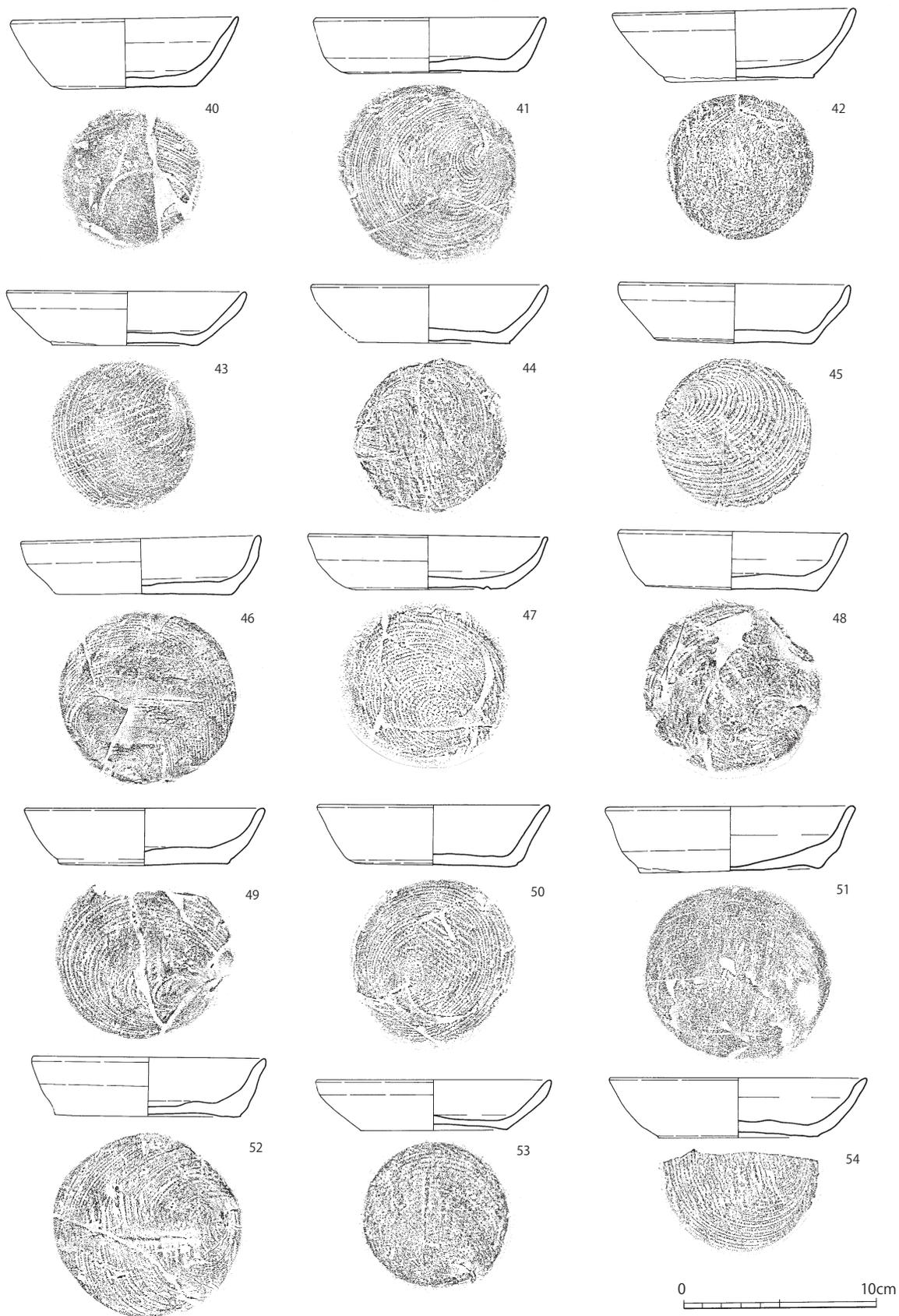
第7-18図 10-SD060実測図(1/40)



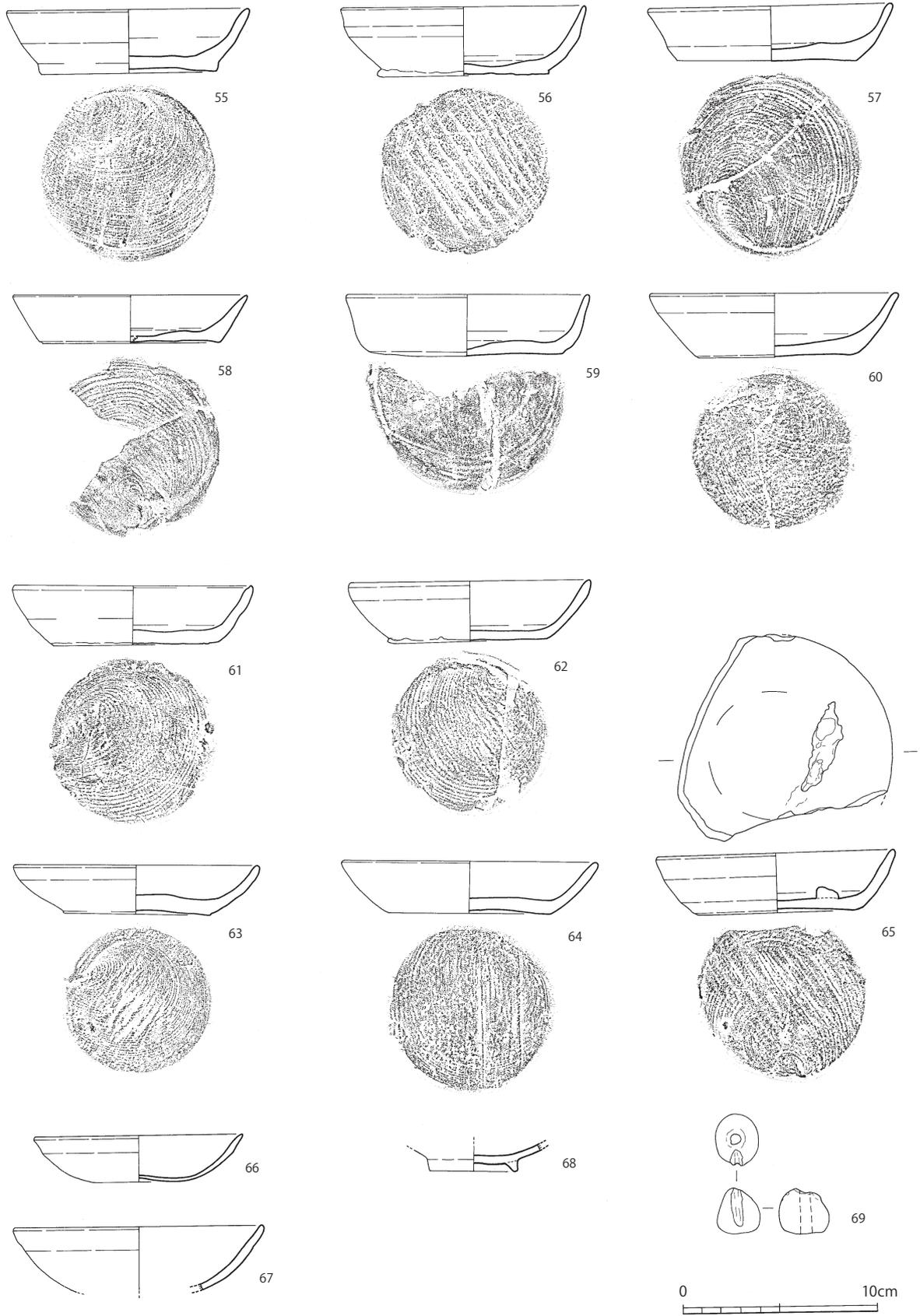
第7-19図 10-SD060出土遺物実測図① (1/3)



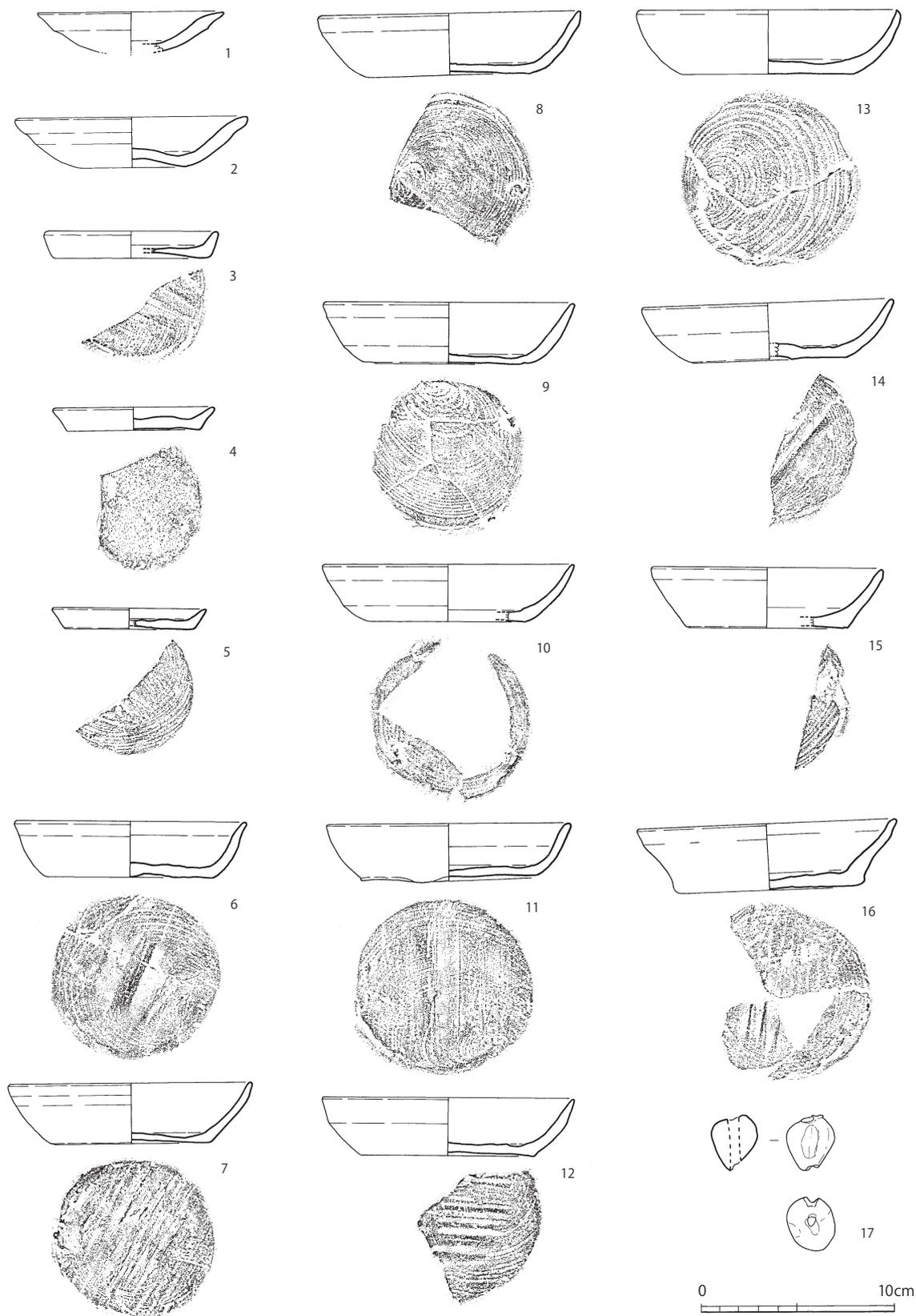
第7-20図 10-SD060出土遺物実測図② (1/3)



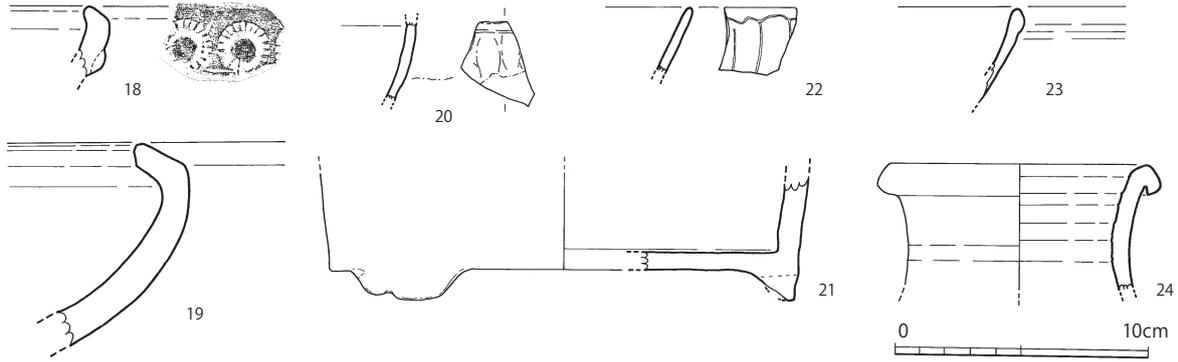
第7-21図 10-SD060出土遺物実測図③ (1/3)



第7-22図 10-SD060出土遺物実測図④ (1/3)



第7-23図 10-SD298出土遺物実測図① (1/3)



第7-24図 10-SD298出土遺物実測図② (1/3)

10-SD298出土遺物 (第7-23図・第7-24図)

1・2は京都系土師器の皿である。16世紀後半に比定されるものであるが、当該資料のみが他の土師質土器の年代と異なるため、混入品であろう。3～5は土師質土器小皿で、4の底部は磨滅しているが、3・5については糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。6～16は土師質土器坏で、13の底部には糸切り痕のみが認められるが、他の資料には糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。17は丸形有溝土錘である。この形態の土錘は14世紀代に比定される製品であることが、他の調査事例などからも判明している。18・19は瓦質土器である。18は瓦質土器火鉢類の口縁部破片で、外面に菊花文の刻印が認められる。19は口縁部が逆「く」の字状を呈し、端部が内側に屈曲する火鉢類の口縁部である。20は外面に蓮弁状の文様を有する陶器片であるが、産地・器種ともに不明である。混入品である可能性も考えられる。21は瓦質土器の底部付近の破片で、脚部を有し、外面は無文となる。22は中国龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部で、15～16世紀代の製品。23は中国産白磁碗の口縁部で、端部は小さな玉縁を呈する。24は中国産白磁四耳壺の口縁部である。

丸形有溝土錘は14世紀

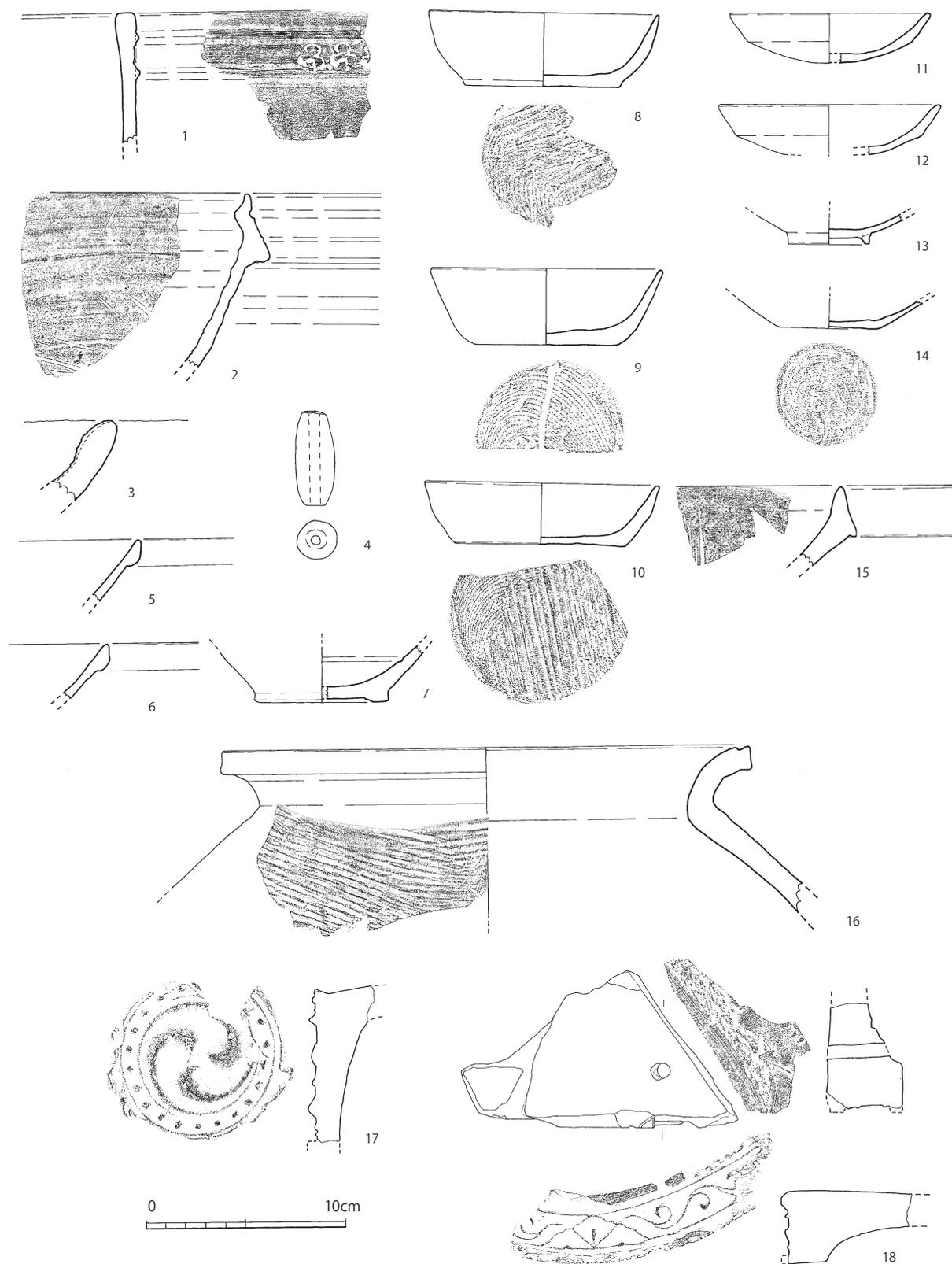
10-SD055

Q61区に位置する溝である。第8次調査区で検出した08-SD068と08-SD168の延長部に相当する遺構と推定されるが、完掘状況が明らかに不自然で、これらの溝の形態とは整合しない状況となっている。これについては、遺構検出当初の際の埋土の色調の僅かな違いに拘泥し、切り合い関係などを慎重に意識せずに、遺構の掘り下げを進めてしまった結果と思われる。率直に言って、発掘調査のミス認めざるを得ず、遺憾である。SD055として取り上げた遺物の中には、14世紀と16世紀後半、さらには15世紀代の遺物が混在しており、ふたつ以上の溝または遺構が重複していた状況を示している。遺物の中には礎石と思われる大型の礫もあり、このような礎石が溝中に廃棄されている様相は、第8次調査区における溝08-SD068の調査所見と一致する。遺構の時期については、第8次調査での所見を重視して、VI期(16世紀後半)とI期(14世紀前半)のふたつの時期としておきたい。

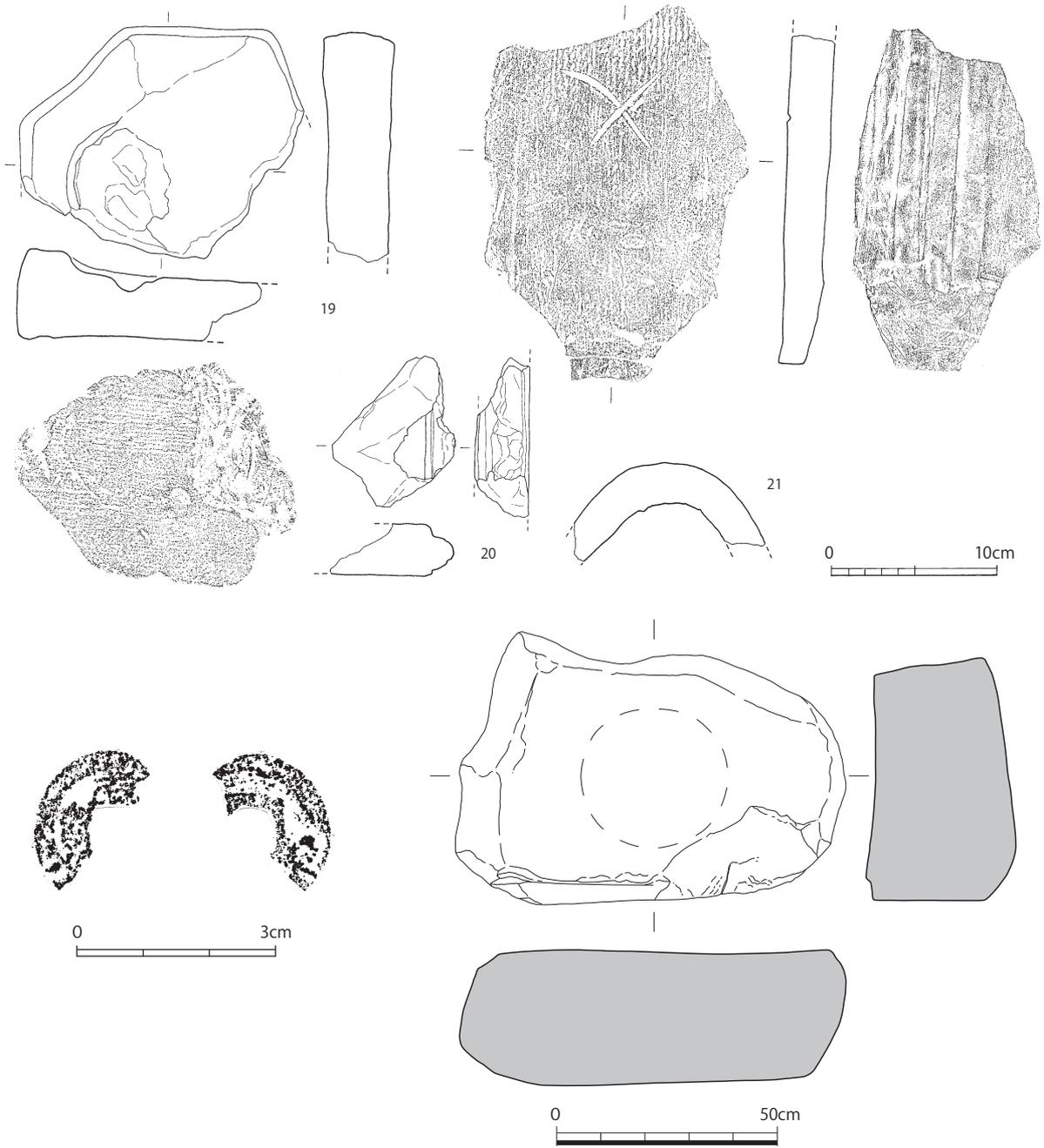
発掘調査のミス

10-SD055出土遺物 (第7-25図・第7-26図)

第7-25図1は瓦質土器火鉢の口縁部で、外面に断面三角形の小型の突帯を巡らし、突帯間には刻印による文様を施す。16世紀代の製品。2は備前焼播鉢で、胴部内面に斜め播目の一部が認められることから、16世紀後半に比定される。3は取瓶の口縁部で、内面に付着物が認められる。4は管状土錘である。5～7は中国産の白磁碗で、5・6は端部が玉縁状を呈する口縁部、7は底部である。8～10は土師質土器坏で、9の底部に糸切り痕のみが認められるほか、8・10には糸切り痕のほか板状圧痕が残存する。11～13は吉備系土師器碗で、いずれも13世紀後半から14世



第7-25図 10-SD055出土遺物実測図① (1/3、1/4)



第7-26図 10-SD055出土遺物実測図② (1/4、1/15)

紀前半代の製品である。14は土師質土器皿の皿で、器壁が薄いことが特徴であることから、周防産の製品であろう。15は備前焼播鉢で、口縁部の形態から中世3期(15世紀前半)の製品であろう。16は東播系須恵器の甕で、外面に横ないし斜め方向の平行叩きが認められる。17は巴文軒丸瓦で、周縁部を欠損している。18は側縁を斜めに切断する隅切りの軒平瓦で、瓦当文様は半截四菱唐草文である。側縁部には分割断面・分割破面が残されており、釘穴が設けられている。

第7-26図19・20は、鬼瓦の破片である。21は雁振瓦で、凸面に縄目叩きと「×」字状のヘラ記号が残る。22は銅銭の破片で、文字が判読できないため銭種は不明である。23は溝内に廃棄されていた礎石と思われる大型の礫で、意図的に作出された平坦面には円形柱の痕跡が残る。



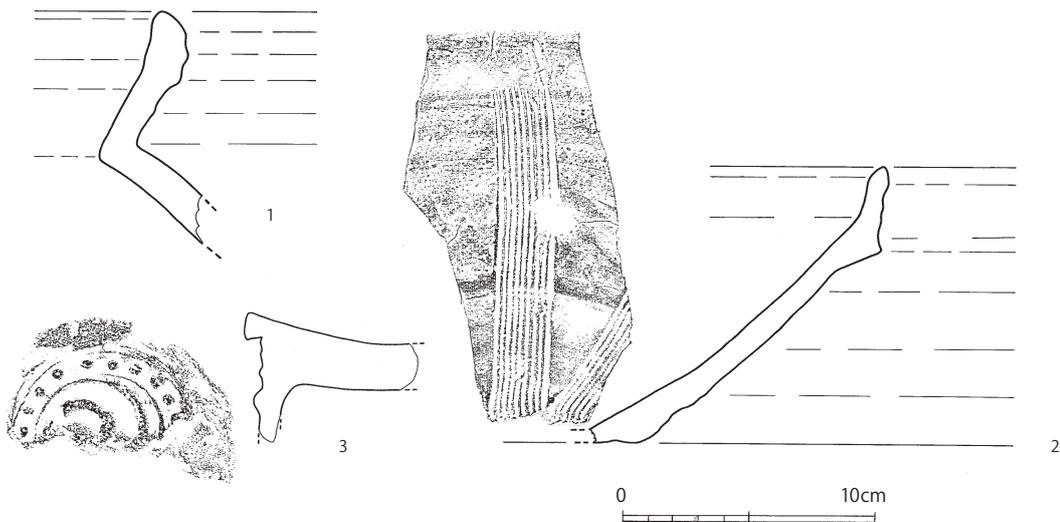
第7-27図 10-SD020・10-SD025・10-SD185・10-SD360・10-SD457実測図(1/300)

10-SD360 (第7-27図)

X64～X66区に位置する溝である。その規模は上面幅0.4～0.9m、長さで約16.5m、深さは約0.3mである。遺構の保全のため、X64およびX66区の一部のみを掘り下げた。X64区より北側では溝の延長部を確認できなかったが、当該地点は攪乱や削平が著しいことから、調査で確認された溝の規模が本来のものであるかどうか分からない。出土遺物から、溝の年代はⅥ期(16世紀後半)に比定される。

10-SD360出土遺物 (第7-28図)

1は備前焼大甕の口縁部で、外面に数条の凹線を有する形態から、近世1期(16世紀後半)に比定される。2は備前焼播鉢で、口縁部の形態と内面の播目が放射状のもののみであることから、中世6期(16世紀前半)に比定される。3は軒丸瓦である。

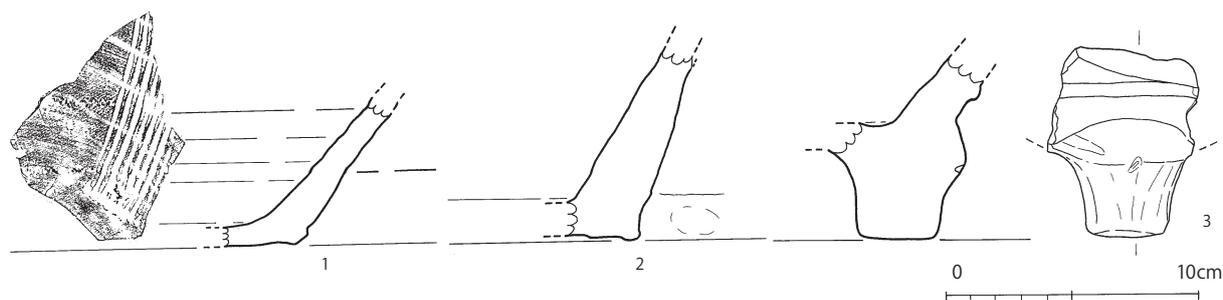


第7-28図 10-SD360出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SD185・10-SD457 (第7-27図)

10-SD185はZ62区に位置する溝で、その規模は上面幅約0.6m、長さ4.8m、深さ約20cmを測る。北側の延長部は調査区外に伸びる。10-SD457aはY64区に位置する溝で、その規模は上面幅約0.5m、長さ3.6mを測る。遺構の保全のため、掘り下げを行っておらず、深さは不明である。南端の終息部を確認しており、北側は近年の攪乱により破壊されている。10-SD457bはY65～Y66区に位置する溝で、その規模は上面幅約0.4m、長さ11.5mを測る。この遺構も保全のため、掘り下げを行っておらず、深さは不明である。北端部は途切れているが、これについては周辺の削平が著しいため、この部位が溝の終息部であるかどうかは断定できない。南側は16世紀後半の土坑10-SK169や近年の攪乱により破壊されている。また、この溝の東に隣接する位置にある柱穴列と切り合い関係を有し、柱穴列を構成する柱穴のひとつである10-SP388を切って構築されていることが確認できた。以上の3つの溝は、その位置関係から一連の遺構である可能性があり、溝の主軸は座標北に対し、東に約9°振れている。これらのことから、3つの溝は万寿寺境内における区画溝のひとつである可能性が高い。また、後述する溝10-SD025・10-SD020と遺構の規模や主軸が類似しており、これらの溝とも関連性を有する可能性が高い。10-SD185・10-SD457a・10-SD457bと10-SD025・10-SD020間の距離は4.5～5.1mである。出土遺物については、10-SD185の埋土中から陶磁器片・土器片が、10-SD457の検出上面から土器片が出土している。遺構の年代を示す材料は乏しいが、出土遺物や切り合い関係から、溝の年代はⅢ・Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定される。

溝の主軸は  
東に9°  
振れる



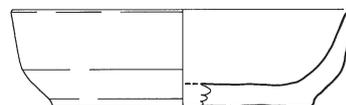
第7-29図 10-SD185出土遺物実測図(1/3)

10-SD185出土遺物(第7-29図)

1は備前焼播鉢の胴部破片で、内面に8条を一単位とする播目が認められる。胴部片であるため、当該資料の詳しい年代を判定できない。2は常滑焼大甕の底部付近の胴部破片と思われ、外面には自然釉が認められる。3は瓦質土器の火鉢もしくは風炉の脚部で、15世紀代の製品であろうか。

10-SD457出土遺物(第7-30図)

図示した遺物は土師質土器坏で、底部には糸切り痕と板状圧痕が認められる。15世紀代に比定される。



10-SD025・10-SD020(第7-27図)

10-SD025はZ65～Z66区に位置する溝で、その規模は上面幅0.4～1.0m、長さ15.5mを測る。この遺構も保全のため、掘り下げを行っておらず、深さは不明である。未発掘のため、発掘調査時には遺構番号を付していなかったが、報告書作成時に遺構番号を命名した。遺構の検出状況から、2つ以上の溝が重複している可能性がある。Z65区で溝が途切れているが、これについては周辺の削平が著しいため、この部位が溝の終息部であるかどうかは断定できない。



第7-30図 10-SD457出土遺物実測図(1/3)

10-SD020はZ66～Z67区に位置する溝で、その規模は上面幅約0.3m、長さ13m、深さ約0.2mを測る。この溝もZ66区で途切れるが、周辺の削平が著しいため、この部位が溝の終息部であるかどうかは断定できない。南側の延長部は調査区外となる。この遺構についても、保全のため、道路の地下施設によって破壊されるZ67区のみを完掘した。出土遺物は認められない。

前述したように、これらの遺構は4.5～5.1m東に位置する溝10-SD185・10-SD457a・10-SD457bと規模や主軸が類似している。遺構の時期を示す出土遺物はないが、周辺の状況などから、遺構の年代をⅢ・Ⅳ期(14世紀末～15世紀)に比定しておきたい。

10-SD330(第7-31図)

AA67～AB67区に位置する溝である。第10次調査区で確認した遺構の規模は幅2.0m、長さ5.0m、深さ約0.3mである。本調査区では特筆すべき事象は得られず、出土遺物についても、図示可能な資料は認められなかった。第9次調査では埋土中の出土遺物から、遺構の年代は9世紀中頃に比定されている。本調査区において、古代に遡る唯一の遺構である。

9世紀  
中頃の溝



第7-31図 10-S270・10-SD330・10-SD338実測図 (1/200)

10-SD270 (第7-31図)

AB67～AC65区に位置する溝である。その規模は上面幅0.8～1.4m、長さ19.0m、深さ約0.3mを測る。溝の主軸は座標北に対し東に約33°振れており、西約5mに位置する10-SD338の主軸とほぼ同じである。周辺の柱穴や土坑などと切り合い関係をもち、これらすべての遺構から切られている。埋土は3層に分層され、それぞれに少量の炭化物を含む。出土遺物には図示可能なものはない。遺構の年代については、後述する10-SD338の年代や切り合い関係などから、Ⅱ期(14世紀後半)に遡る可能性を考えておきたい。

10-SD338 (第7-31図)

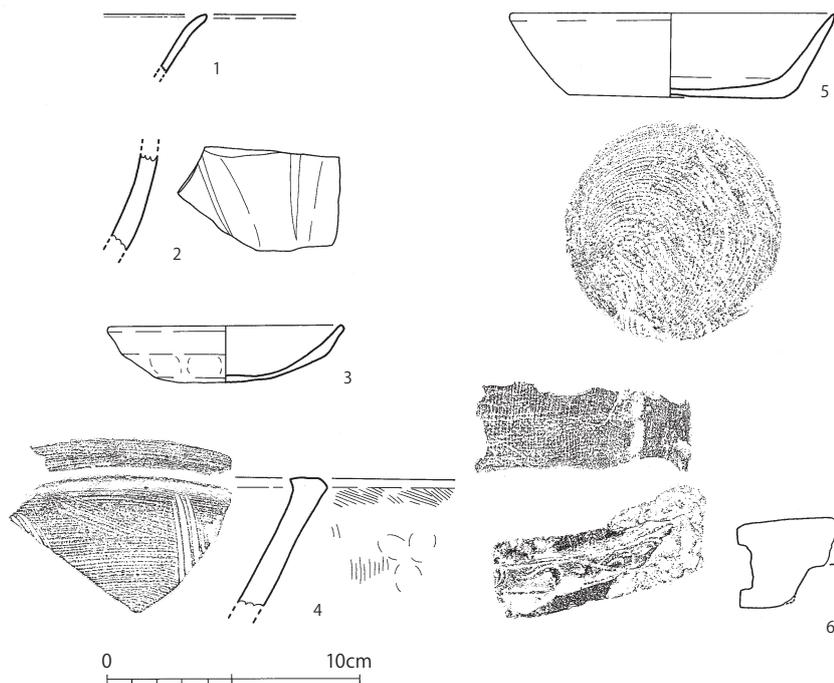
AB67～AC66区に位置する溝である。その規模は上面幅2.5～1.4m、長さ26.0m、深さ約0.3mを測る。北側は遺構の残存が比較的良好であるが、南側は大きく削平を受けている。16世紀後半の井戸10-SE225と切り合い関係を有し、当該井戸に切られている。溝の主軸は座標北に対し東に約33°振れており、東約5mに位置する10-SD270の主軸とほぼ同じである。10-SD270と10-SD338はほぼ平行しており、両者が一連の遺構である可能性も考えられる。埋土は2層に分層され、底面の一部に鉄分の付着が認められることから、流水が生じていたことがわかる。出土遺物の様相

主軸が  
平行する  
2本の溝

から、溝の構築年代がⅡ期（14世紀後半）に遡る可能性を考えておきたい。

10-SD338出土遺物（第7-32図）

1は中国産の白磁皿で、口縁端部が外反し、端部内面が口剥げとなる。13世紀後半から14世紀代の製品。2は中国龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗で、13



第7-32図 10-SD338出土遺物実測図（1/3、1/4）

世紀代に比定される。3は和泉型瓦器の皿で、12～13世紀代の資料である。4は瓦質土器挿鉢の口縁部で、内面にハケ目状の調整と3条を一単位とする播目、外面に指圧痕が認められる。14～15世紀代に比定される。5は土師質土器坏で、底部には糸切り痕と板状圧痕がある。14世紀代の製品。6は軒平瓦で、凹面に明瞭な布目痕が残る。14世紀後半には製作されている資料である。

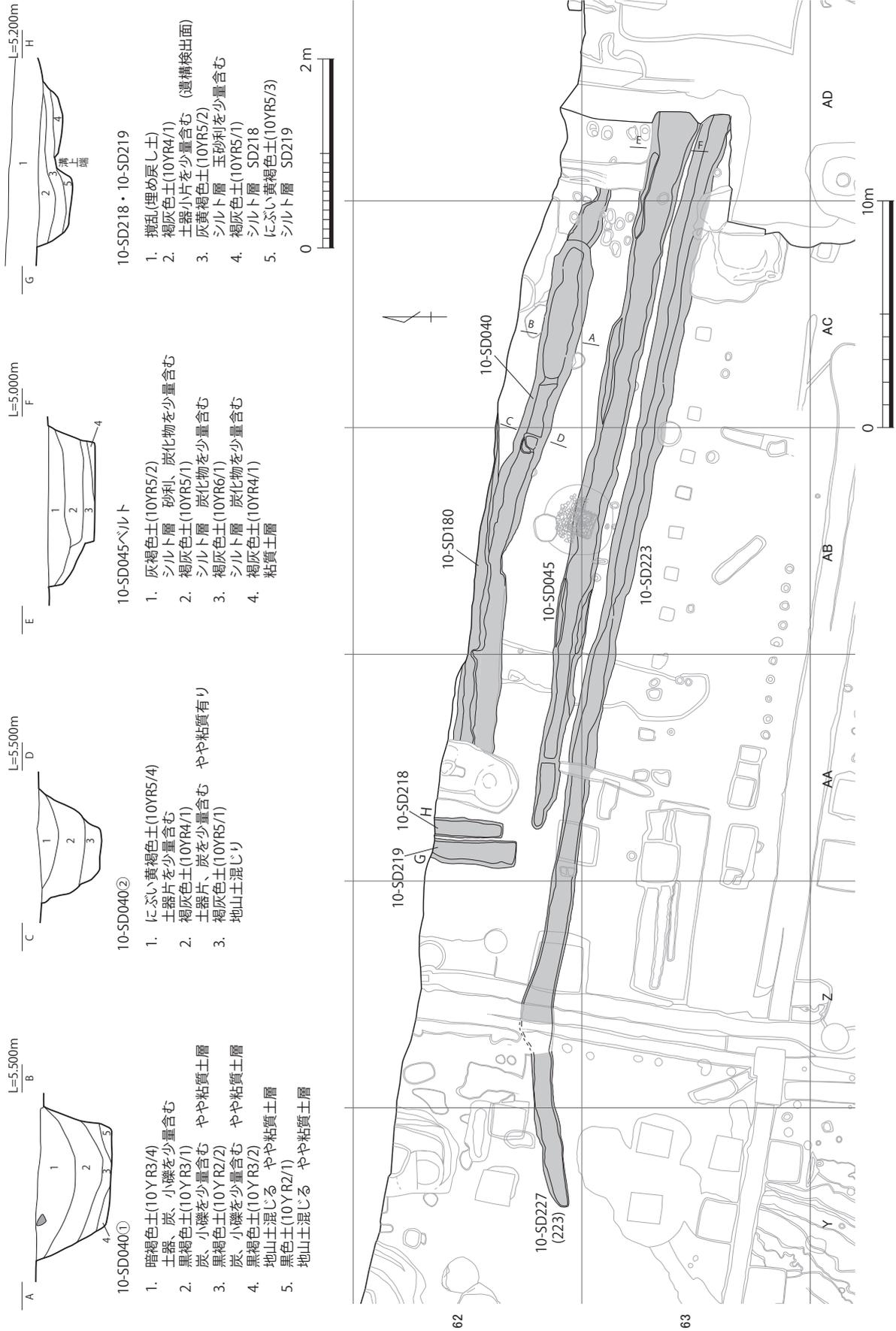
10-SD040（第7-33図）

AA62～AD62区に位置する溝である。その規模は上面幅1.5～1.7m、長さ22.8m、深さ0.65～0.75mである。南北方向の溝であるが、溝の平面形態はAB62区で僅かに南東方向に屈曲する。14～15世紀代の溝10-SD180、15世紀代の土坑10-SK029、14～15世紀代の土坑10-SK036などと切り合い関係を有し、遺構の構築順序は10-SK036→10-SD040→10-SD180→10-SK029となる。しかしながら、10-SD040については、検出された溝の形態が旧万寿寺跡で確認された他の溝遺構と比較して、やや不自然であることや遺構の切り合いなどをあまり意識せずに、検出当初の遺構ラインにこだわって無理に掘り下げを進めてしまった経緯があり、遺構の形態や切り合い関係が当を得ているものかどうか心許ない。また、調査時の記録によると、溝の東側の延長部が10-SK029より東側で確認できないため、10-SD040がAA62区付近で北側に屈曲する可能性が考えられている。これについても、今後の調査での検証が必要であろう。溝の断面形態は逆台形を呈し、埋土は3～4層に分層される。また、AB62区付近では、埋土中より銅銭が集中して出土した。出土遺物には土器や陶磁器、瓦片、銅銭などがあるが、上述した遺構の掘り下げの経緯から、遺物に混じりが生じている可能性がある。ただし、銅銭類についてはまとめて出土していることから、確実にこの溝の帰属遺物であり、一括性も高いと考えられる。10-SD040の時期については、出土遺物の年代観や周防産土師質土器皿、明銭である「宣徳通寶」（初铸造年1433年）の存在などから、Ⅳ期（15世紀中頃～後半）に比定しておきたい。

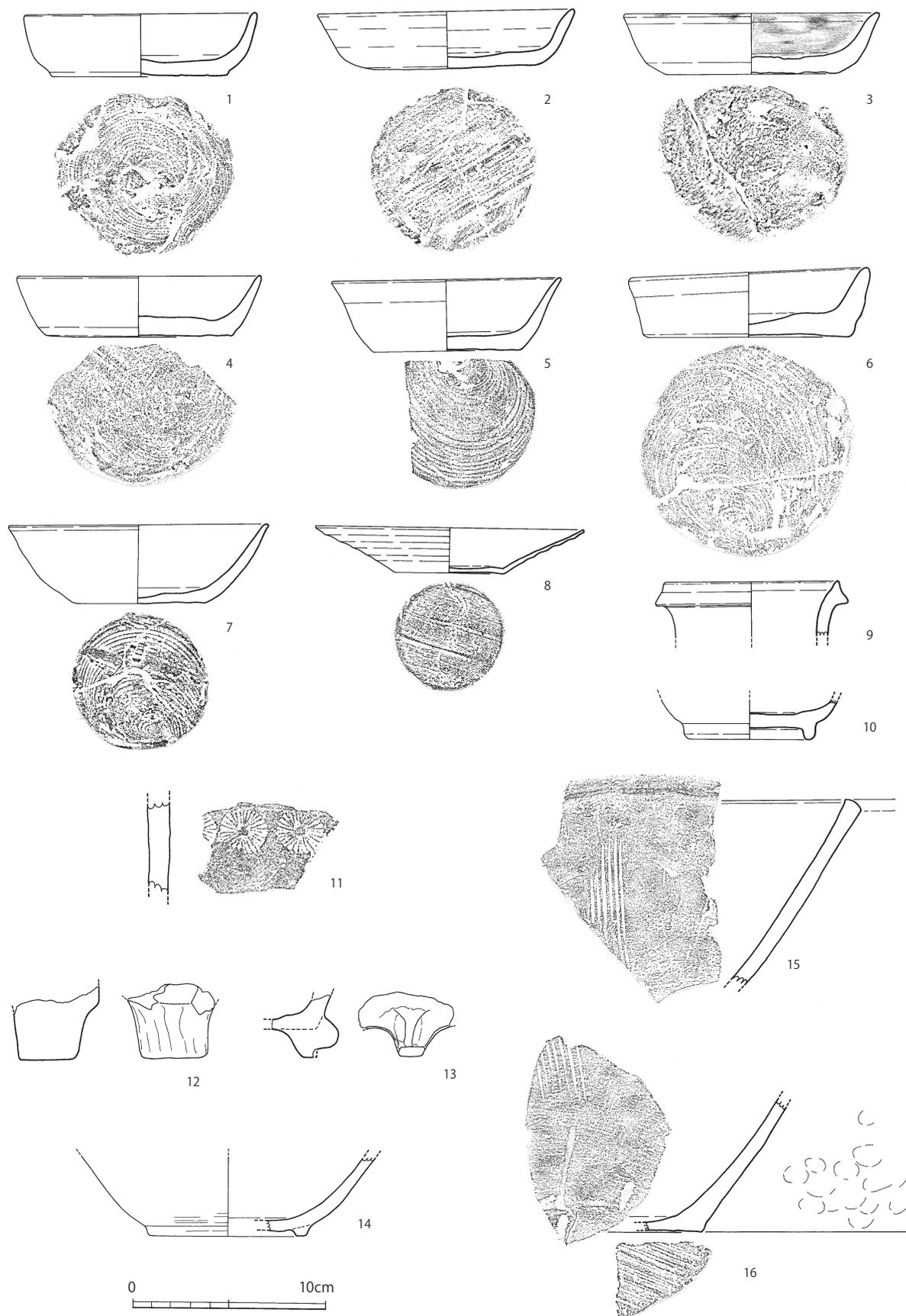
10-SD040出土遺物（第7-34図～第7-37図）

第7-34図1～7は在地系の土師質土器坏で、胎土は赤褐色を呈し、底部には糸切り痕もしくは

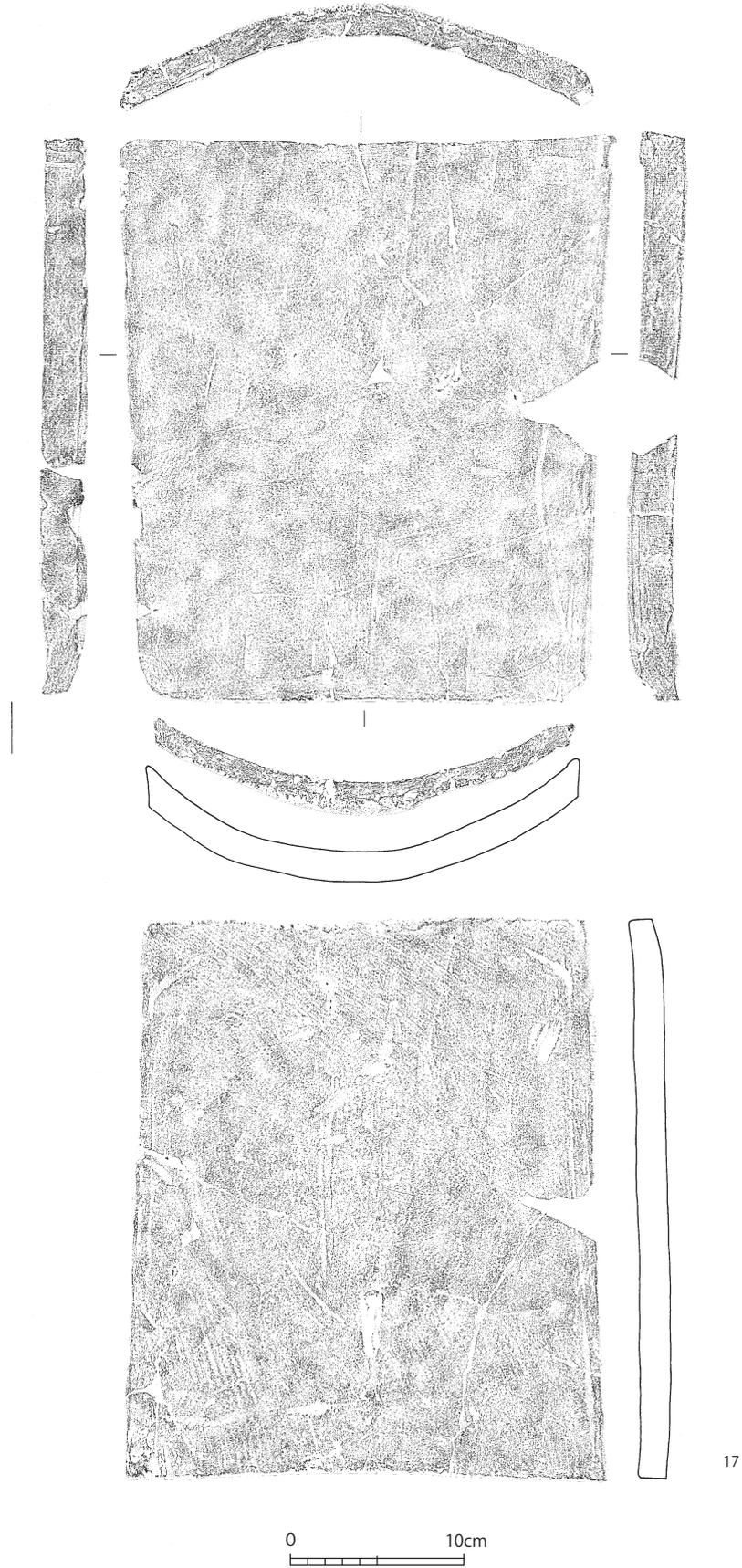
北に屈曲？  
銅銭の集中



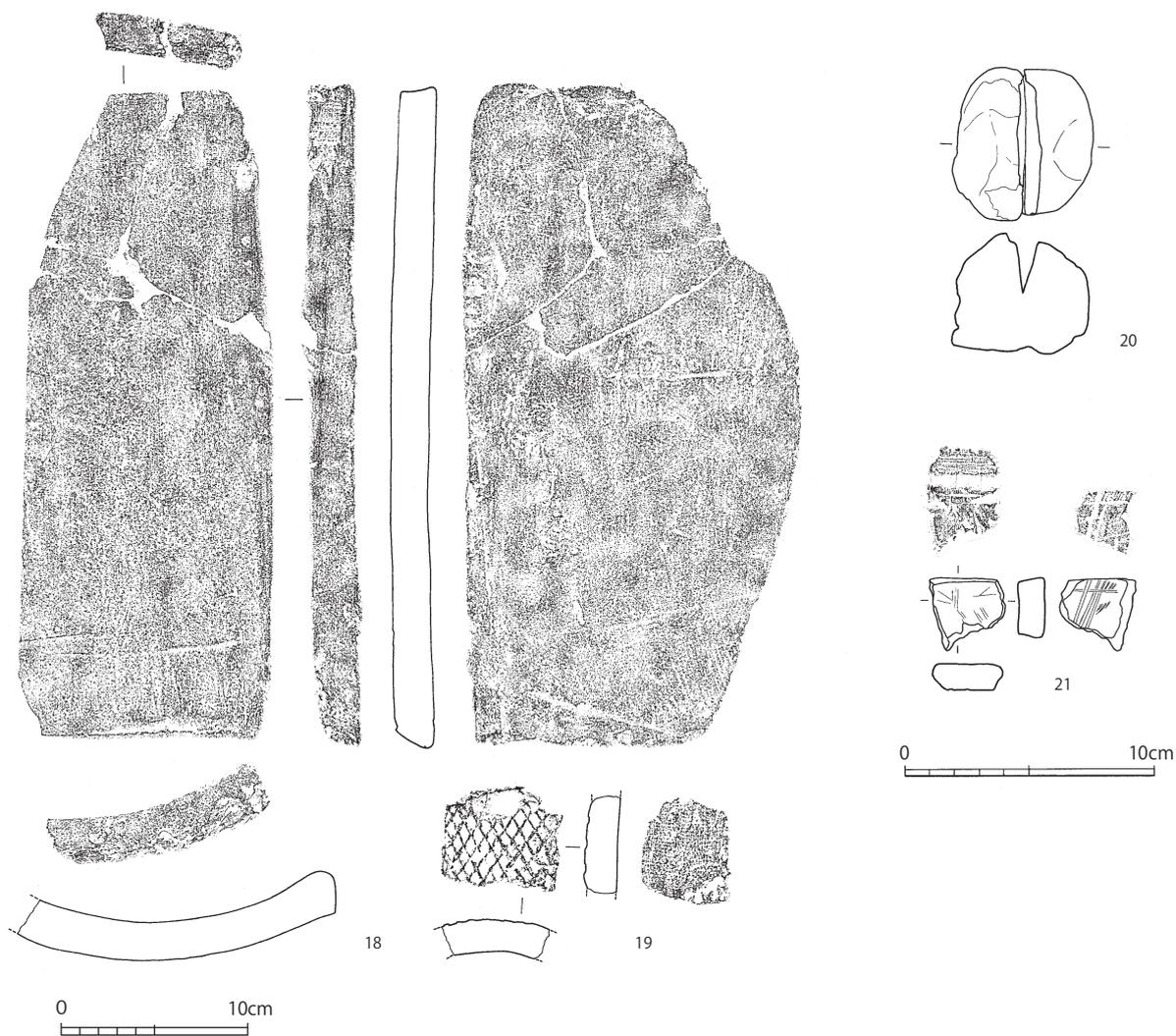
第7-33図 10-SD040・10-S0D45・10-SD180・10-SD219・10-SD223・10-SD227実測図(1/200、1/60)



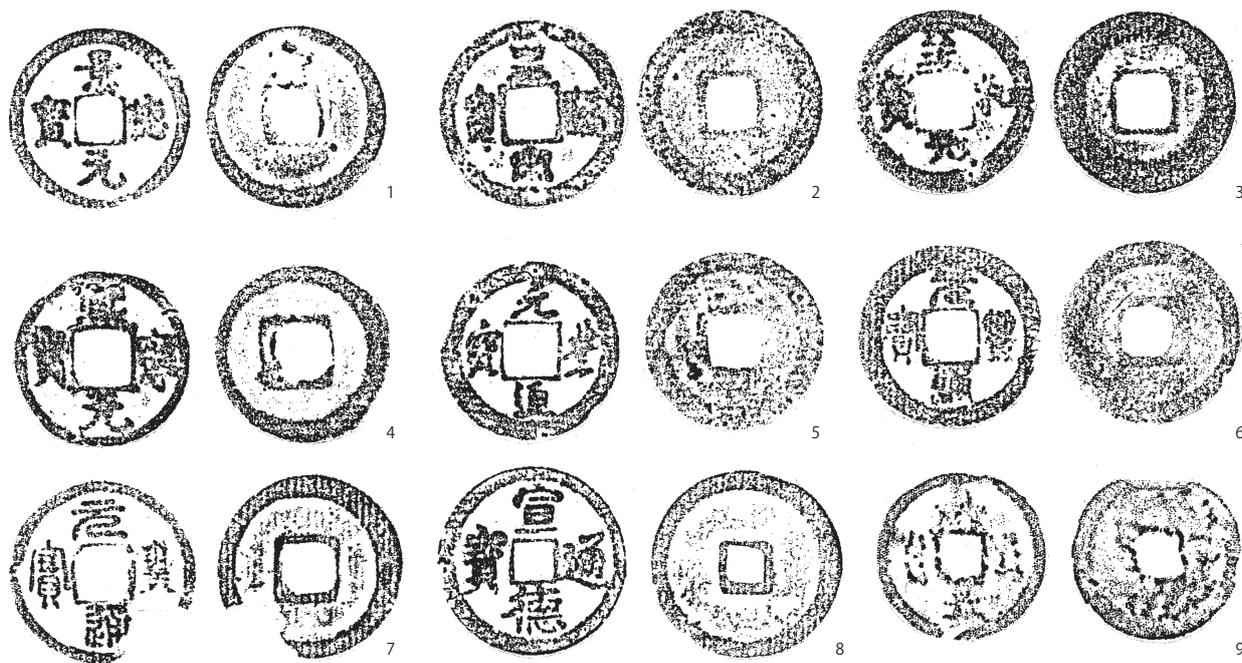
第7-34図 10-SD040出土遺物実測図① (1/3)



第7-35図 10-SD040出土遺物実測図② (1/4)



第7-36図 10-SD040出土遺物実測図③ (1/4、1/3)



第7-37図 10-SD040出土遺物実測図④ (1/1)

周防産  
(大内系)  
の土師質  
土器皿

宣徳通寶  
初鑄造年  
1433年

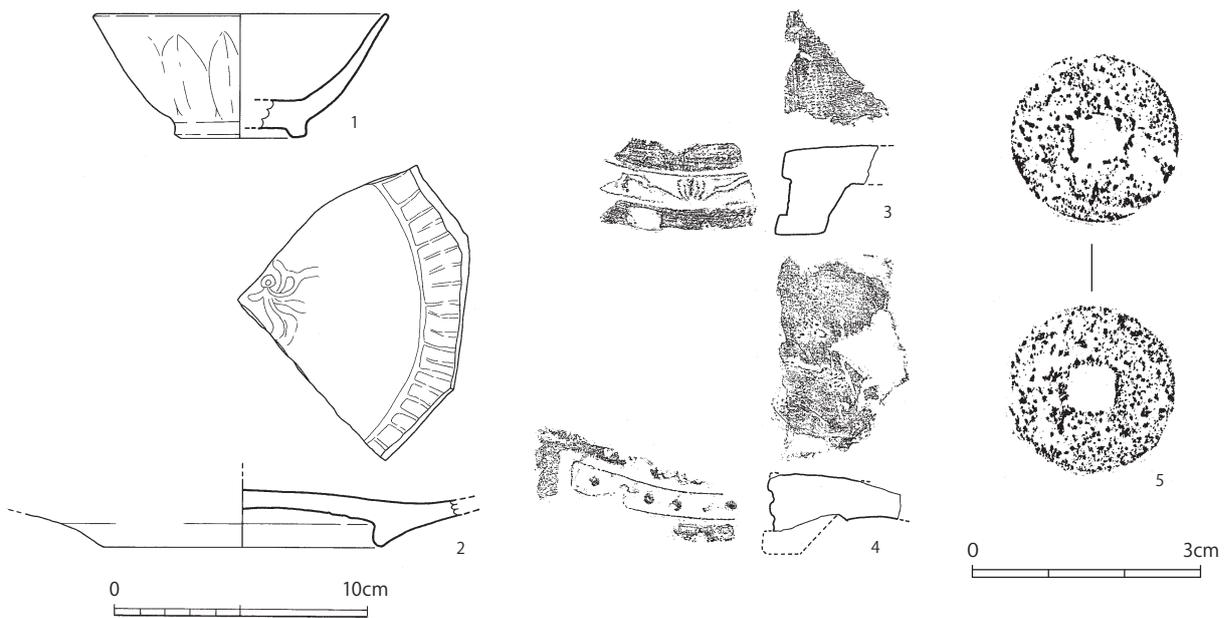
糸切り痕と板状圧痕が認められる。3には口縁端部と内面にススの付着がある。また、7には胎土に金雲母の混入があり、豊後の中でも府内以外の地域で製作された資料である。8は器壁が薄いことと胎土が淡白色を呈することが特徴的な土師質土器皿で、周防産（大内系）の製品である。15世紀中葉から後半に比定される。9・10は中国産の青磁である。9は瓶の口縁部で、口縁端部は露胎となる。10は瓶の底部と推定される。11～16は瓦質土器である。11は火鉢類もしくは風炉の胴部で、外面に菊花文の刻印がある。12は風炉などの脚部、13は香炉の脚部であろう。14は器種不明であるが、碗であろうか。外面にヘラミガキが認められる。15・16は播鉢で、15については胴部内面に7条を一単位とする播目、外面に指頭圧痕、底部外面に板状圧痕もしくはハケ目状の調整が認められる。第7-35図17・第7-36図18は平瓦で、いずれの資料も凸面にハケ目状工具による斜め方向の調整痕が認められ、17には特にそれが顕著である。19は外面に格子目叩き、内面に布目痕が残る。8～9世紀代に比定される資料で、混入品であろう。20は石製の土錘で、中央部に断面がV字形の溝が設けられている。21は滑石製石鍋の破片である。第7-37図は銅銭で、ほとんどが北宋銭の資料であるが、8は明銭の「宣徳通寶」（初鑄造年1433年）である。遺構の年代を示唆する資料として、注目しておきたい。

10-SD180 (第7-33図)

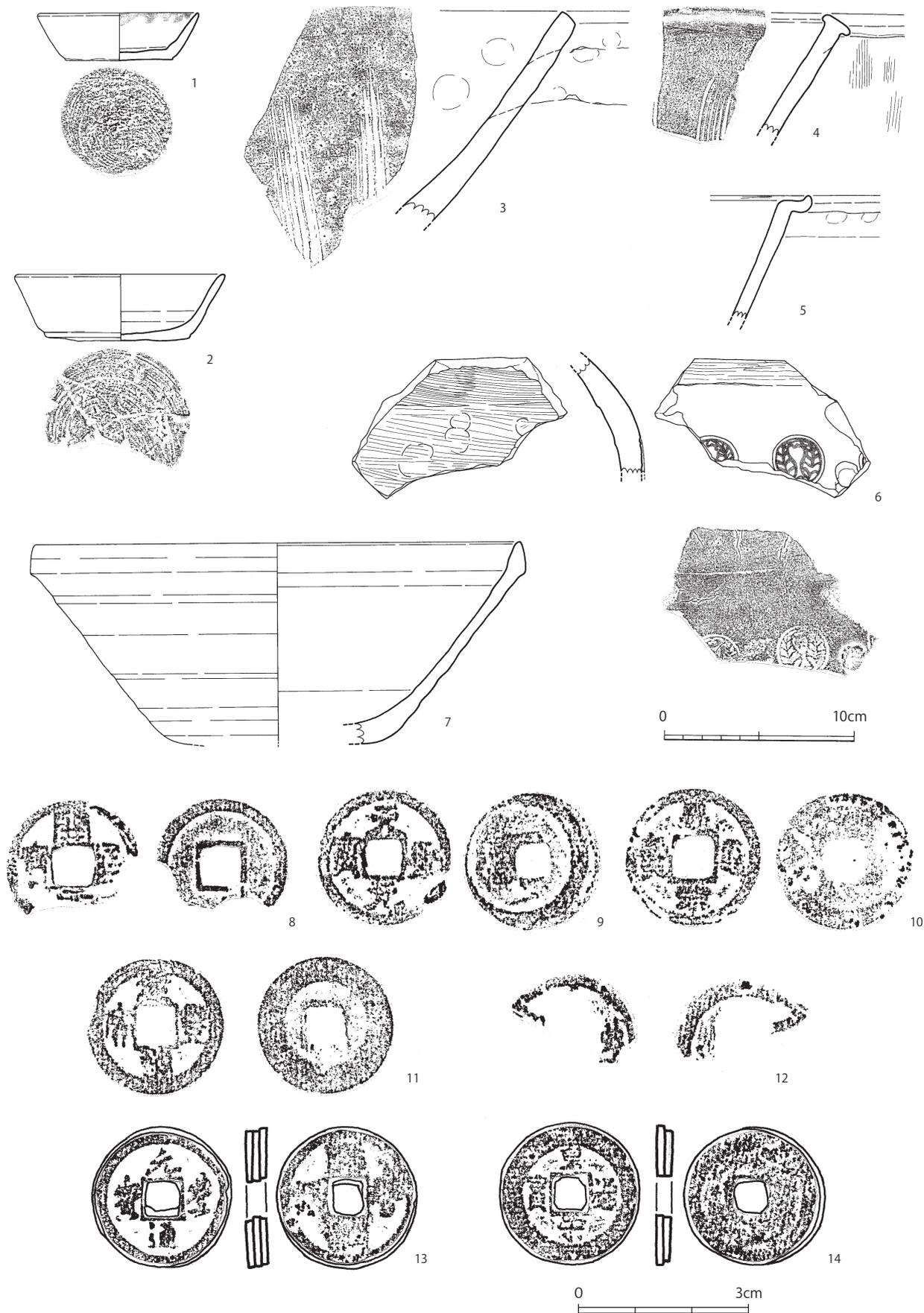
AA62～AC62区に位置する溝である。その規模は上面幅0.75m、長さ14.5m、深さ約0.4mである。この溝についても、AA62～AB62区の境界付近がくぼむようなプランになっており、平面形態がやや不自然であることから、本来の規模・形状を正確に把握できているかどうかは分からない。上述したように、周辺の遺構との切り合い関係は、10-SK036 → 10-SD040 → 10-SD180 → 10-SK029となる。出土遺物には、青磁、瓦片、銅銭などがある。遺構の年代を示唆する決定的なものはないが、切り合い関係などを考慮して、Ⅳ期（15世紀中頃～後半）に比定しておきたい。

10-SD180出土遺物 (第7-38図)

1は中国龍泉窯系青磁碗で、13世紀代の製品。2は中国龍泉窯系青磁盤（大皿）で、見込みに印花による花文と胴部内面に鐫文が認められる。13～14世紀代の製品。3・4は軒平瓦で、凹面にはいずれも布目痕が残る。5は銅銭で、銹出により、銭文は解読できない。



第7-38図 10-SD180出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/1)



第7-39図 10-SD045出土遺物実測図(1/3、1/1)

## 10-SD045 (第7-33図)

銅銭の集中  
出土

AA62～AD63区に位置する溝である。その規模は上面幅1.35 m、長さ32.2 m、深さ約0.5 mである。東側は削平を受け、消失している。14世紀前半の土坑（土器溜）10-SK031、14世紀前半の井戸10-SE459と切り合い関係をもち、これらの遺構を切って構築されている。埋土は4層に分層され、それぞれに炭化物を少量含む。埋土からは土器類が少量出土しており、加えてAC63区では銅銭が集中して出土する地点が認められた。出土遺物から、遺構の年代はⅢ期（14世紀末から15世紀前半）に比定される。

## 10-SD045出土遺物 (第7-39図)

1・2は土師質土器坏で、底部には糸切り痕と板状圧痕が認められる。1の口縁端部内面にはススの付着がある。3～6は瓦質土器の製品である。3・4は播鉢で、3の口縁端部の断面形が略長方形を呈するのに対し、4のそれは端部に肥厚面を作出する。6は火鉢または風炉で、外面に抱杏葉文(?)の刻印を押捺する。7は東播系須恵器の鉢である。8～14は銅銭である。2～3枚が鏽着するもの、および裏面に別個体の銅銭が付着していた痕跡が残るものがある。

## 10-SD223・10-SD227 (第7-33図)

銅銭の集中  
出土  
(10-S214)

Y62～AD63区に位置する溝である。その規模は上面幅1.15 m、長さ48.5 m、深さ約0.4 mである。東側は削平を受け、消失している。Z62区から西をSD227、Z62区からAB63区をSD223とし、発掘調査時は両者を同一遺構として調査を進めている。14世紀前半の土坑（土器溜）10-SK031や16世紀後半の土坑10-SK030と切り合い関係をもち、遺構の構築順序は10-SK031→10-SD223→10-SK030となる。埋土からは土器、瓦片などが出土したのに加えて、AC63区では銅銭が集中して出土する地点が認められた。これらの銅銭の集中部付近から出土した遺物は、10-S214として取り上げた。出土遺物や切り合い関係から、遺構の年代はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

## 10-SD223・10-SD227出土遺物 (第7-40図・第7-41図)

第7-40図1・2は土師質土器小皿で、1の底部外面には糸切り痕と板状圧痕、2の底部外面には糸切り痕のみが認められる。3は京都産土師器皿Sで、底部を欠損する。4は土師器の坏で、9世紀代に比定されることから、混入品であろう。5～8は土師質土器坏で、底部外面には糸切り痕のみ、もしくは糸切り痕と板状圧痕が認められる。9は瓦質土器鉢で、口縁端部外面に断面形が三角形を呈する突帯を敷設する。胴部内面にはハケ目状の調整が認められる。10・11は備前焼播鉢で、10は口縁部の形態から備前焼編年3期（14世紀後半）に比定される。12は軒平瓦、13・14は軒丸瓦、15は鬼瓦、第7-41図16は平瓦である。

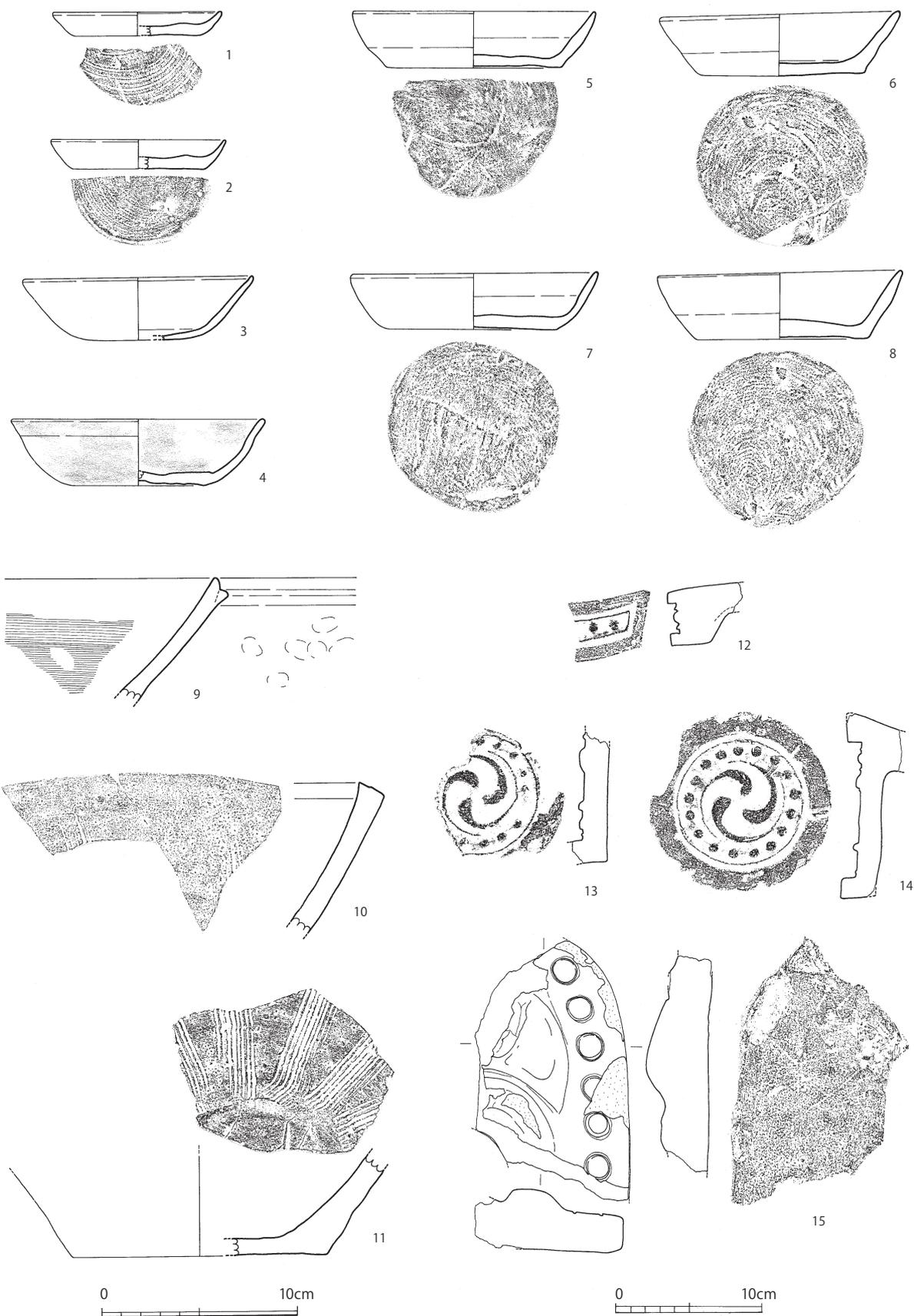
第7-41図17は10-SD227出土遺物として取り上げたもので、連珠文軒平瓦である。

18・19は10-S214出土遺物として取り上げたもので、18は管状土錘、19は土師質土器土鍋の口縁部である。

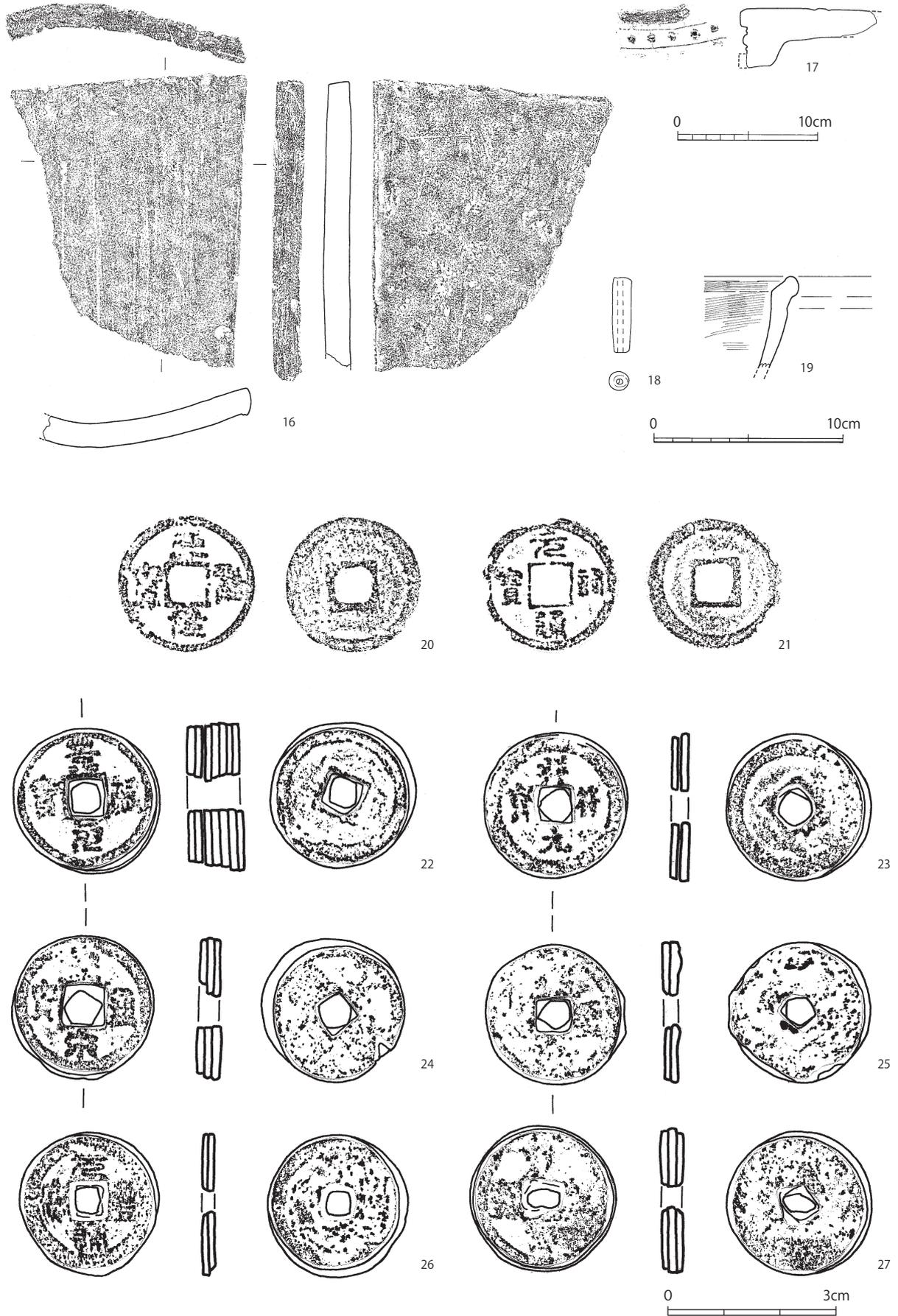
20～27は銅銭で、20・21は10-SD223の出土遺物、22～27は10-S214出土遺物として取り上げたものである。10-S214から出土したものは、銅銭2～7枚が鏽着している。

## 10-SD218・10-SD219 (第7-33図)

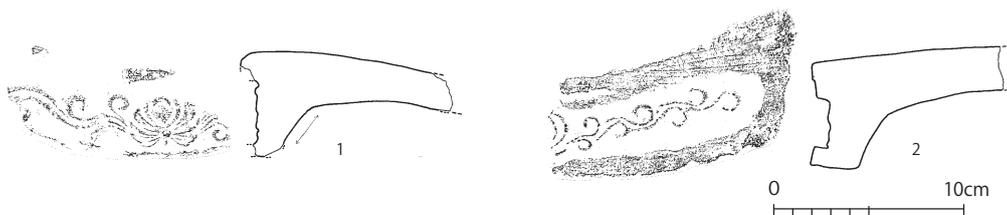
AA62区に位置する溝である。10-SD218は上面幅0.75 m、長さ2.9 m、深さ約0.24 m、10-SD219は上面幅1.1 m、長さ3.6 m、深さ約0.35 mである。両者とも北側の延長部は調査区外に伸びる。土層断面を検討すると、ふたつの溝の構築順序は10-SD218→10-SD219であることがわかる。出土遺物は少ないが、SD218からは瓦片などが少量出土した。出土遺物が僅少であるため、遺構の年代は不明である。



第7-40図 10-SD223出土遺物実測図①(1/3、1/4)



第7-41図 10-SD223出土遺物実測図② (1/4、1/1)



第7-42図 10-SD218出土遺物実測図(1/4)

10-SD218出土遺物(第7-42図)

1・2は軒平瓦の破片である。図示可能な遺物は、この2点に留まる。

2 土坑

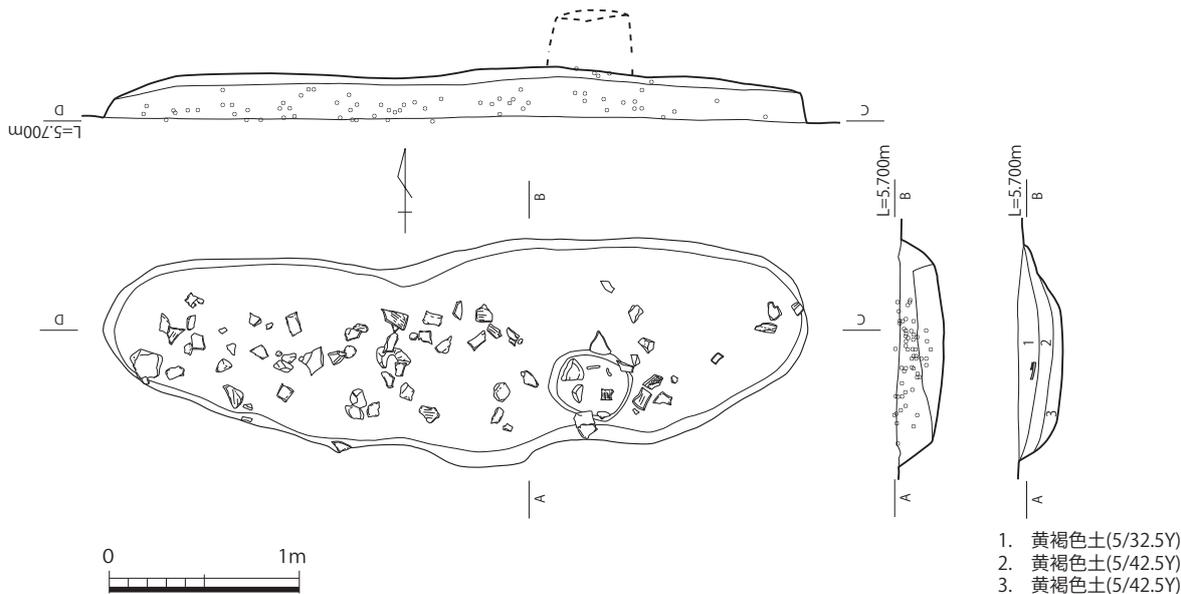
10-SK002(第7-43図)

P65～Q65区に位置する遺構で、その平面プランは不整形を呈する。その規模は東西3.7m、南北1.2m、深さ0.23mである。埋土は3層に分層され、いずれも暗褐色系の色調を呈する。また、上層には焼土粒が含まれる。埋土中からは土器片や陶磁器片が出土しており、これらは16世紀以前のものが多い。しかしながら、遺構が検出されたレベルが高いことや層位的な所見より、出土遺物は遺構の年代を反映していない可能性が高い。また、当該土坑は廃棄土坑である可能性もあるが、この地点付近から一定数が検出されている耕作痕跡と遺構の主軸が一致していることにも注意を払っておきたい。結論としては、当該土坑は耕作痕跡で、遺構の年代はⅦ期(16世紀末)以降と考える。

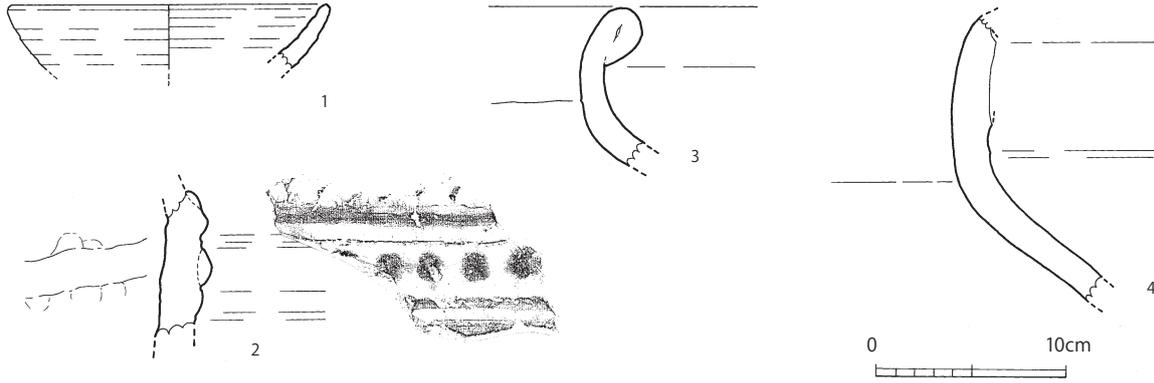
耕作痕跡

10-SK002出土遺物(第7-44図)

1は在地系の土師質土器皿で、底部を欠損する。胎土の色調は赤褐色を呈し、胴部内面にロクロ目が残る。いわゆるロクロ目土師器で、15世紀末から16世紀代の製品である。2は瓦質土器で、風炉または火鉢の胴部破片である。外面には珠文などの装飾があり、内面には指頭圧痕が残存する。15世紀代の製品と推定される。3・4は備前焼大甕の口縁部である。



第7-43図 10-SK002実測図(1/40)



第7-44図 10-SK002出土遺物実測図 (1/3)

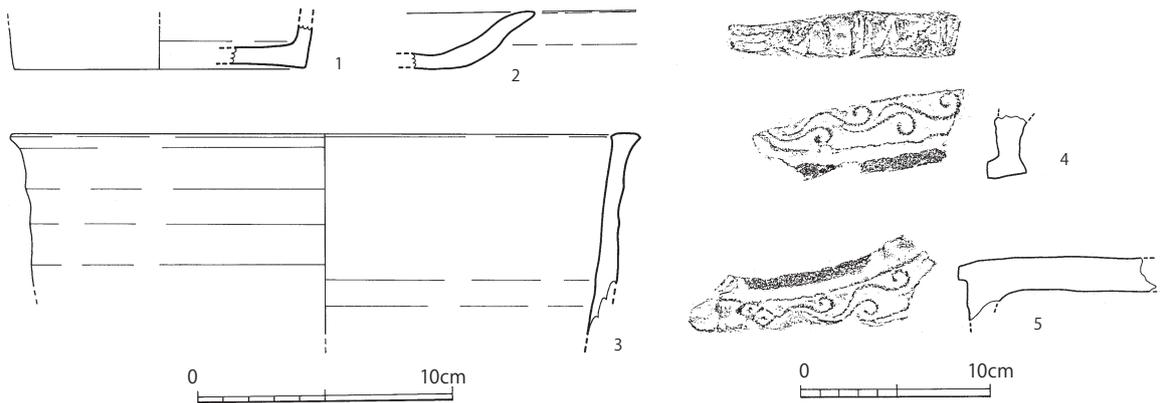
10-SK005

P65～Q65区に位置する遺構で、その平面プランは溝状を呈する。10-SK005として掘り下げた規模は東西8.0m、南北0.8～1.0m、深さ約0.3mである。記録として残されている写真などを見ると、出土遺物や礫がQ65区に偏在しており、明らかに不自然である。これについては遺構検出時に認識したプランにこだわり、無理矢理に掘り下げを進めた結果で、溝状のプランの遺構は本来深度が浅く、これより下層に存在している別の廃棄土坑の一部を掘り下げた結果と思われる。これらの遺物は10-SK005出土遺物として取り上げた。溝状のプランの遺構は、周辺の状況から考えて耕作痕跡と推定される。その時期はⅦ期(16世紀末)以降と考えられる。なお、P65～Q65区付近は遺跡の保護のため、これ以上の掘り下げを行っておらず、下層の遺構は保全されていることを付け加えておきたい。

耕作痕跡

10-SK005出土遺物 (第7-45図)

1は瓦質土器で、鉢または香炉の底部片であろう。2は京都系土師器の皿で、器壁が厚いのが特徴。3は口縁端部が肥厚する備前焼の鉢である。4・5は菱形唐草文軒平瓦で、4は顎貼付技法の製作痕跡と瓦当顎部と平瓦部の接着を強固にする工夫が観察できる資料である。



第7-45図 10-SK005出土遺物実測図 (1/3、1/4)

10-SK006・10-SK007 (第7-45図)

Q65区に位置する遺構で、いずれも土坑状の形態を呈する。10-SK006は東西1.0m、南北2.22m、深さ約0.2mである。10-SK007は東西0.6m、南北0.97m、深さ約0.12mである。両者とも埋土中から、礫や土器片・瓦片が少量出土しているが、図示可能な遺物は認められない。これらは廃棄土坑の可能性もあるが、この地点付近から一定数が検出されている耕作痕跡との共通性が強いことから、こ

これらの遺構も耕作痕跡の可能性が高いと判断した。遺構の時期は、Ⅶ期（16世紀末）以降と考える。

10-SK010a・10-SK010b（第7-47図）

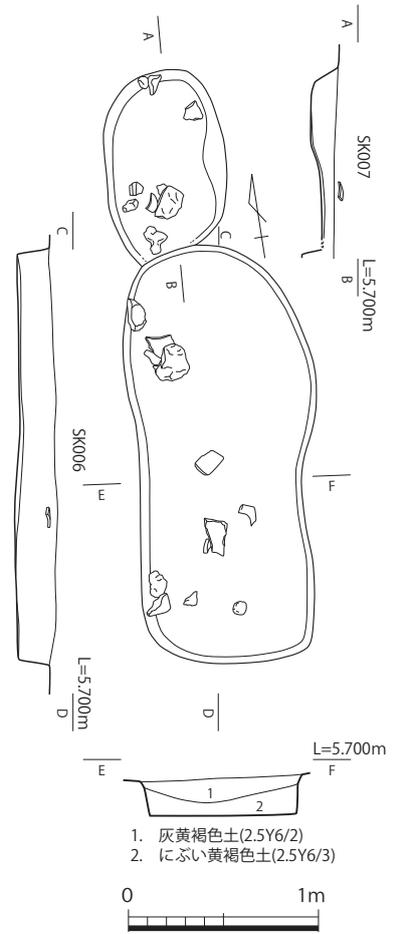
Q65区に位置する遺構で、いずれも土坑状の形態を呈する。10-SK010aは東西2.0m、南北1.95m、深さ0.5mである。10-SK010bは東西2.4m、南北1.5m、深さ約0.35mである。いずれの土坑からも拳大から頭大の礫が集中する部位があり、瓦片、土器片などが出土した。また、10-SK010からは軒丸瓦の大型破片も出土している。しかしながら、礫や遺物の出土状況がやや不自然な状況が認められ、これは遺構検出時に認識した遺構のプランのみを重視して掘り下げを進めた結果と思われる。従って、発掘調査の結果が遺構の実態を捉えているかどうか判断ができない。遺構の性格については廃棄土坑と判断し、遺構の時期についてはⅦ期（16世紀末）以降と考えておきたい。

10-SK010a・10-SK010b出土遺物（第7-47図）

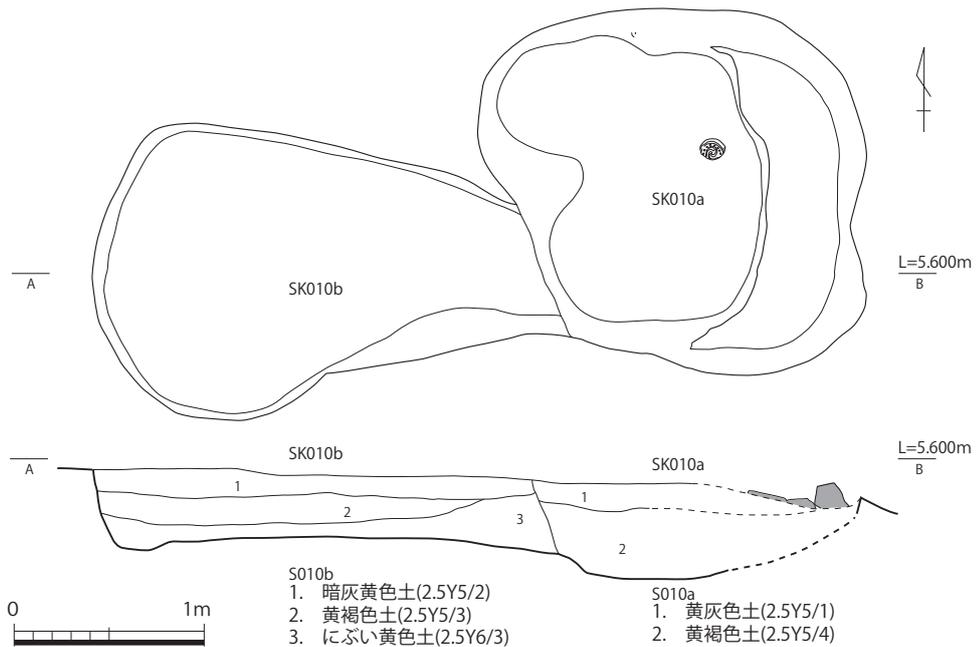
1～3は10-SK010aの出土遺物で、1・2は軒丸瓦、3は鬼瓦の破片である。

4～6は10-SK010bの出土遺物である。4は瓦質土器の埴で、豊後府内において、16世紀後半を主体に出土する在地系の景品である。5は備前焼播鉢で、内面に放射状の播目が認められる。6は平瓦で、凸面の一部に糸切り痕（コビキ痕）が残存している。

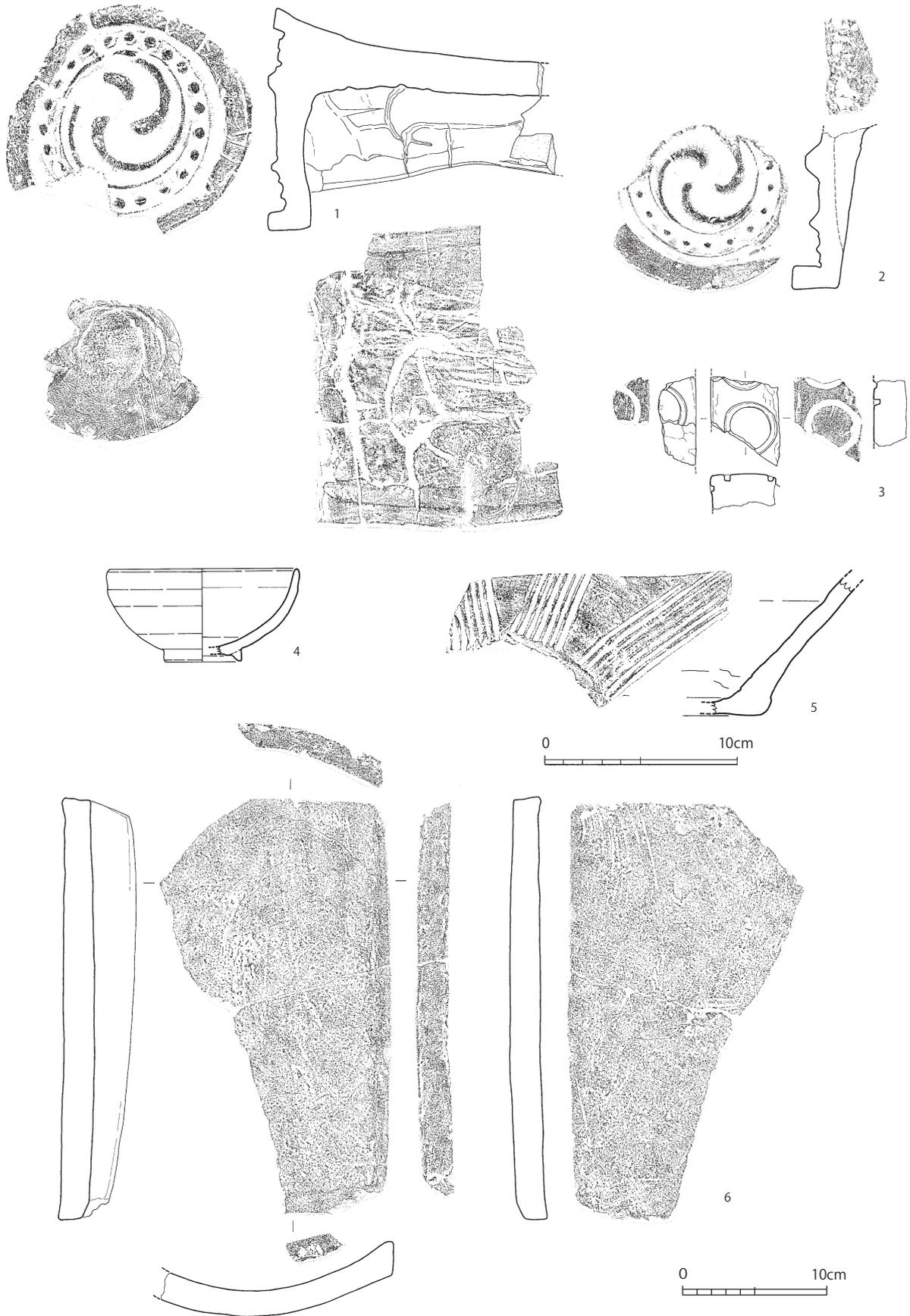
耕作痕跡



第7-46図 10-SK006・10-SD007実測図 (1/40)



第7-47図 10-SK010a・10-SK010b実測図 (1/40)



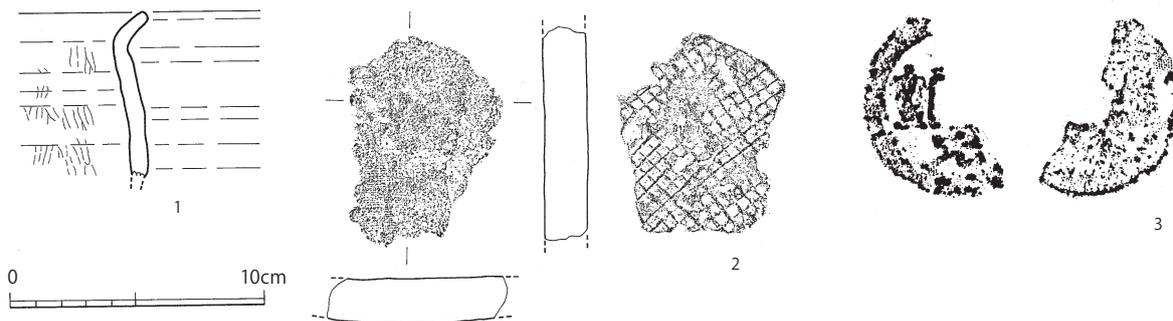
第7-48図 10-SK010a・10-SK010b出土遺物実測図(1/4、1/3)

10-SK014

Q66～R66区に位置する土坑で、遺構の平面プランは略楕円形を呈する。その規模は東西1.5m、南北1.0m、深さ0.3mである。埋土から土器片や瓦、銅銭が少量出土した。土器や瓦は8～9世紀代に比定されるが、銅銭の年代と合わないので、当該土坑は古代の遺構ではないことがわかる。遺構の時期を判断する材料に乏しく、時期は不明である。

10-SK014出土遺物（第7-49図）

1は土師器の甕で、胴部内面にハケ目調整の痕跡が残る。2は平瓦で、外面に格子目叩き、凹面に布目痕が認められる。1・2は8～9世紀代に比定されるもので、混入品である。3は銅銭で、銭種は不明であるが、「元」「寶」字が判読できる。



第7-49図 10-SK014出土遺物実測図(1/3、1/4、1/1)

10-SK017

耕作痕跡  
掘り過ぎ

Q65～Q66区に位置する遺構で、その平面プランは溝状を呈する。その規模は東西0.5m、南北4.70m、深さ約0.5mである。遺構の位置と平面形態からみて、当該遺構は耕作痕跡である可能性が高い。遺構の深さが気になるが、これについては耕作痕跡の本来の底面を認識できず、掘り過ぎている可能性が高い。埋土中から少量の遺物が出土しているが、遺構の時期を示すものではない。周辺状況から、遺構の時期はⅦ期（16世紀末）以降と考える。

10-SK017出土遺物（第7-50図）

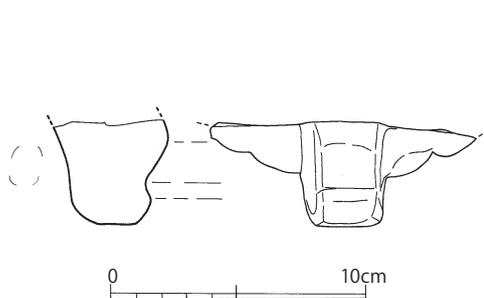
図示した遺物は瓦質土器火鉢の脚部である。図示可能な遺物は、この1点のみである。

10-SK024

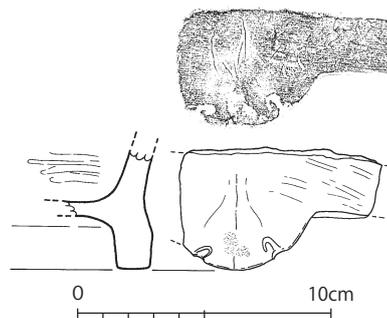
Q66～R66区に位置する遺構で、そのプランは不整形である。東西5.0m、南北4.0m、深さ0.2mを測るが、不整形な遺構が重複する地点であるため、これが本来の状況かどうか分からない。出土遺物は少なく、遺構の時期は不明である。

10-SK024出土遺物（第7-51図）

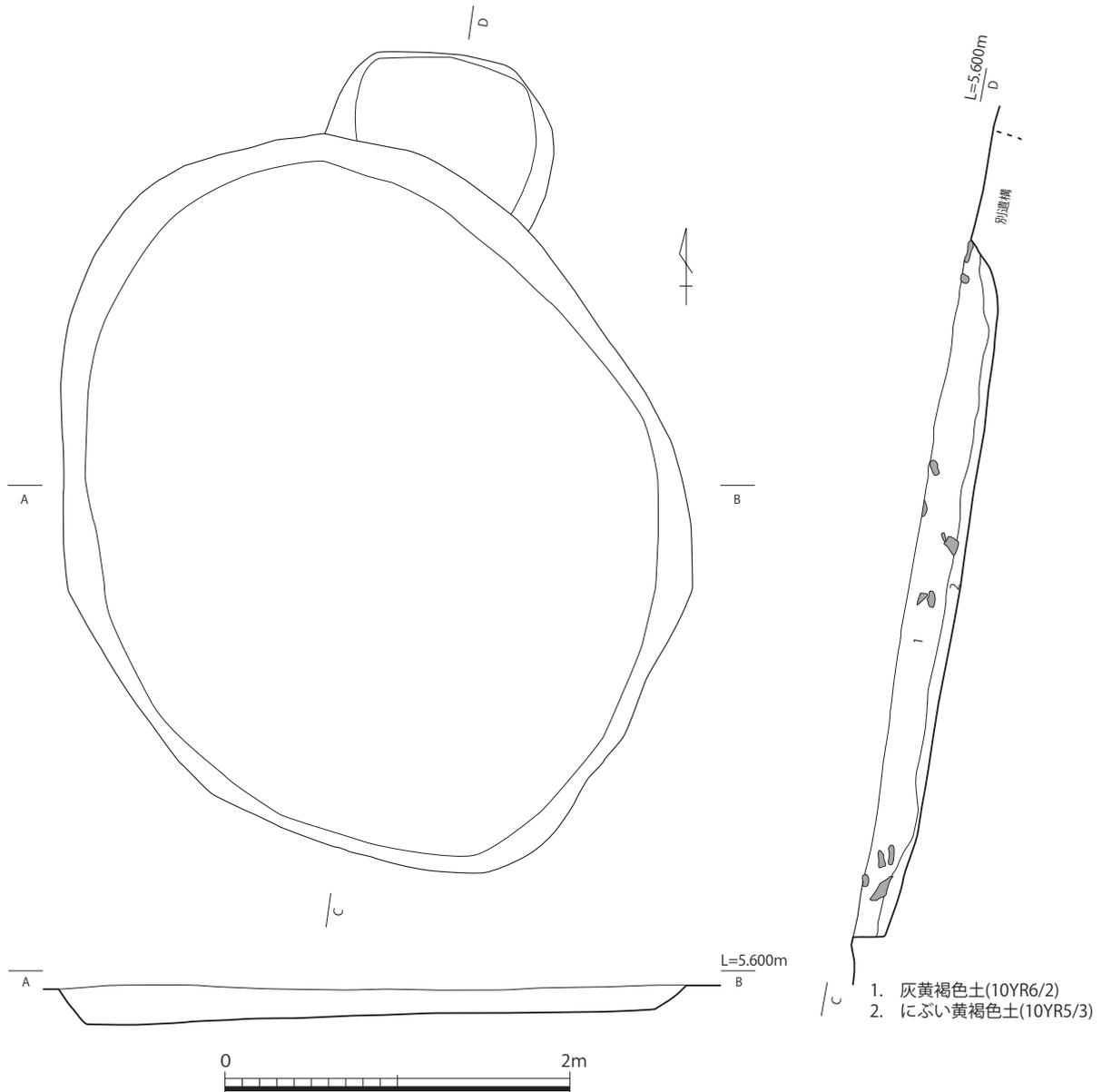
図示した遺物は瓦質土器火鉢の脚部である。外面に刻線による蕨手状の文様が認められる。



第7-50図 10-SK050出土遺物実測図(1/3)



第7-51図 10-SK051出土遺物実測図(1/3)



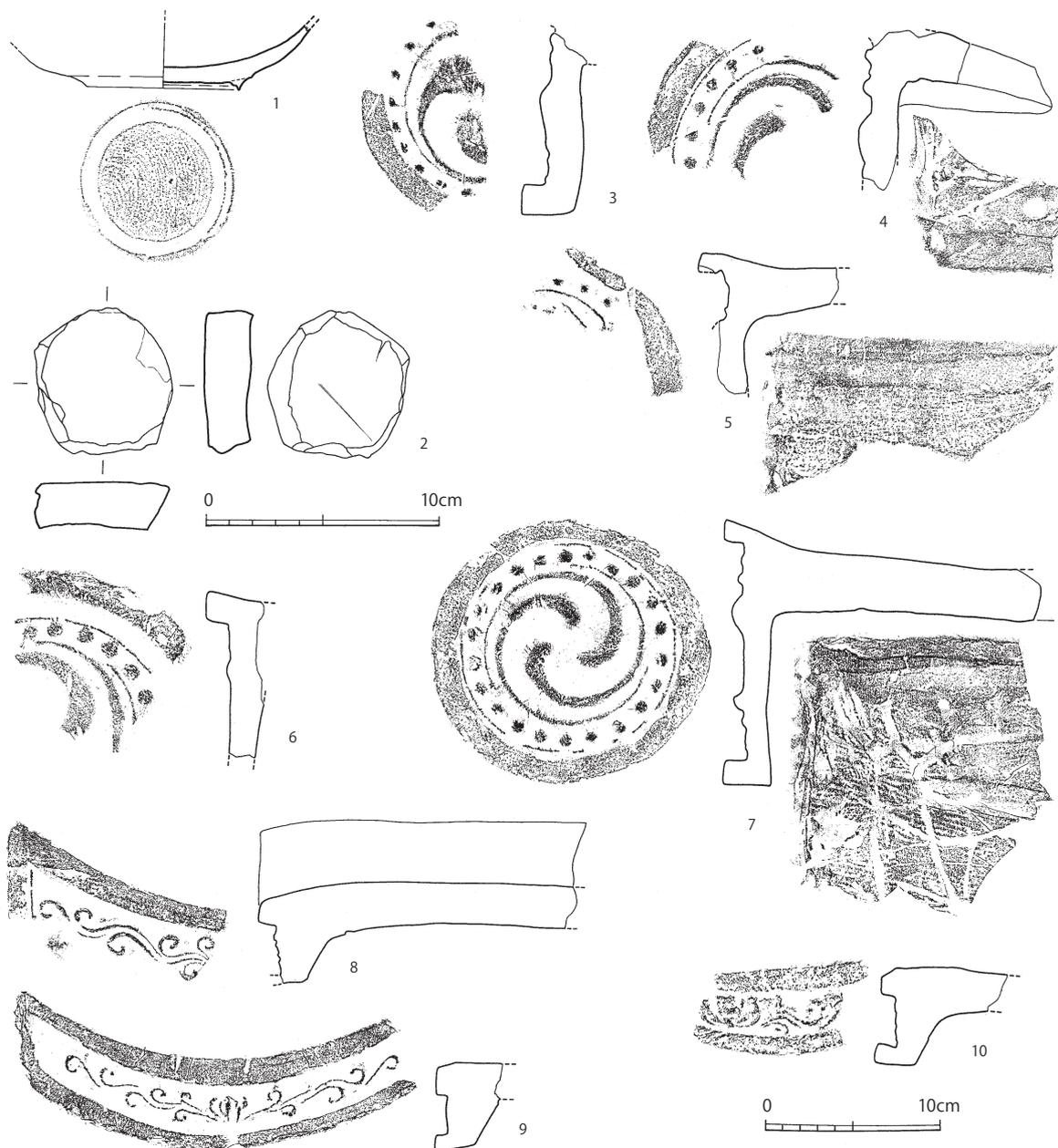
第7-52図 10-SK027実測図 (1/40)

10-SK027 (第7-52図)

U63区に位置する大型の土坑で、遺構の平面プランは略楕円形を呈する。その規模は東西3.6m、南北4.5m、深さ0.3mである。北側に時期不明の土坑1基があり、この土坑を切って構築されている。埋土は2層に分層され、上層に瓦片を主体とした遺物が多量に包含されていた。下層には遺物はほとんど含まれない。出土瓦には14世紀初頭から前半に比定される創建時期のものを多く含むが、製作年代が14世紀後半まで降るものも含まれている。出土遺物の年代観や切り合い関係などから、遺構の年代はⅡ期(14世紀中葉～後半)に比定される。

10-SK027出土遺物 (第7-53図)

1は瓦器または瓦質土器の塊である。口縁部を欠損し、胴部中位以下が残存する。底部には断面三角形の高台を有し、高台内には回転糸切り痕が認められる。在地産の瓦器塊であろうか。2は瓦片を略円形に再加工した製品。3～7は軒丸瓦、8～10は軒平瓦で、このうち7の軒丸瓦と8・9の軒平瓦は万寿寺創建時に使用されたものである。10の軒平瓦は14世紀後半以降に製作された資料である。



第7-53図 10-SK027出土遺物実測図(1/3、1/4)

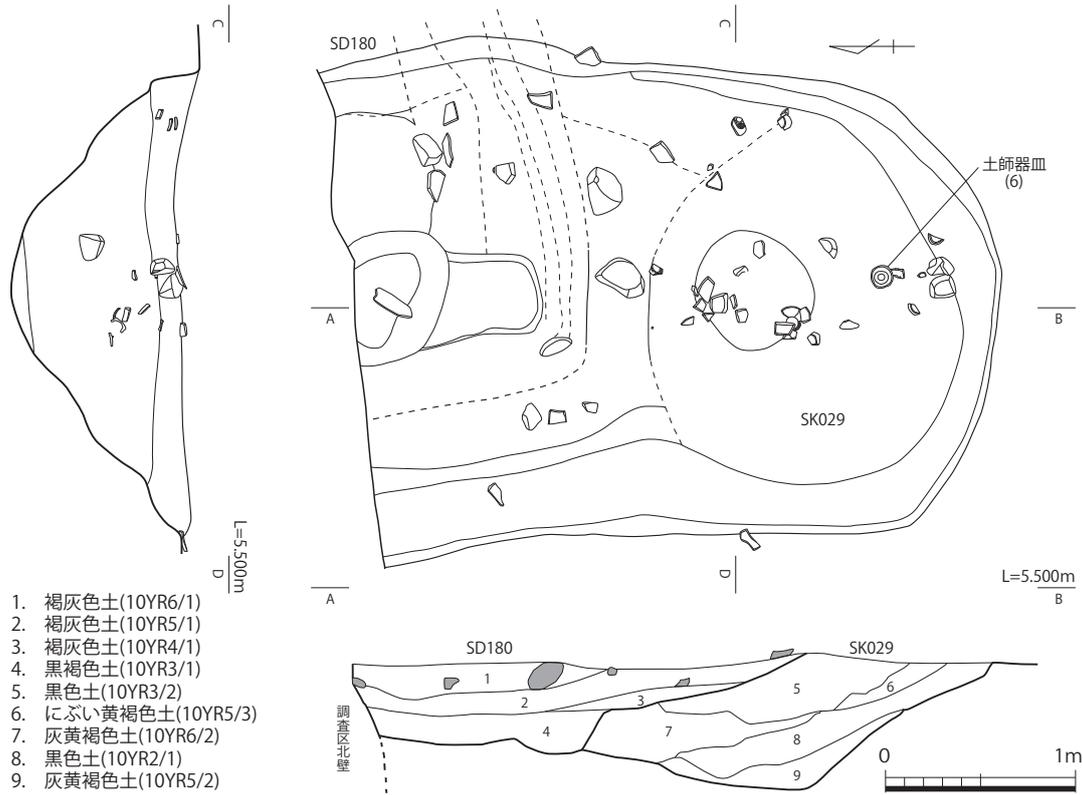
10-SK029 (第7-54図)

AA62区に位置する遺構で、その平面プランは不整形を呈する。その規模は東西2.45m、南北3.4m、深さ0.7mである。完掘状況を見ると、明らかに複数の遺構が切り合っており、出土遺物には中世(15世紀)と古代(9~10世紀)が混在している。遺構検出当初の検出ラインにこだわって、一気に掘り下げを行ってしまったが、取り上げた古代の遺物には緑釉陶器片や完形品の土師器皿などがあり、遺構を慎重に掘り進めていけば、当該時期の遺構を良好な状態で識別できた可能性もある。発掘調査時の所見では、中世と古代の遺物が混在していることから、遺構の時期はⅢ~Ⅳ期(14世紀末~15世紀)に比定しておきたい。

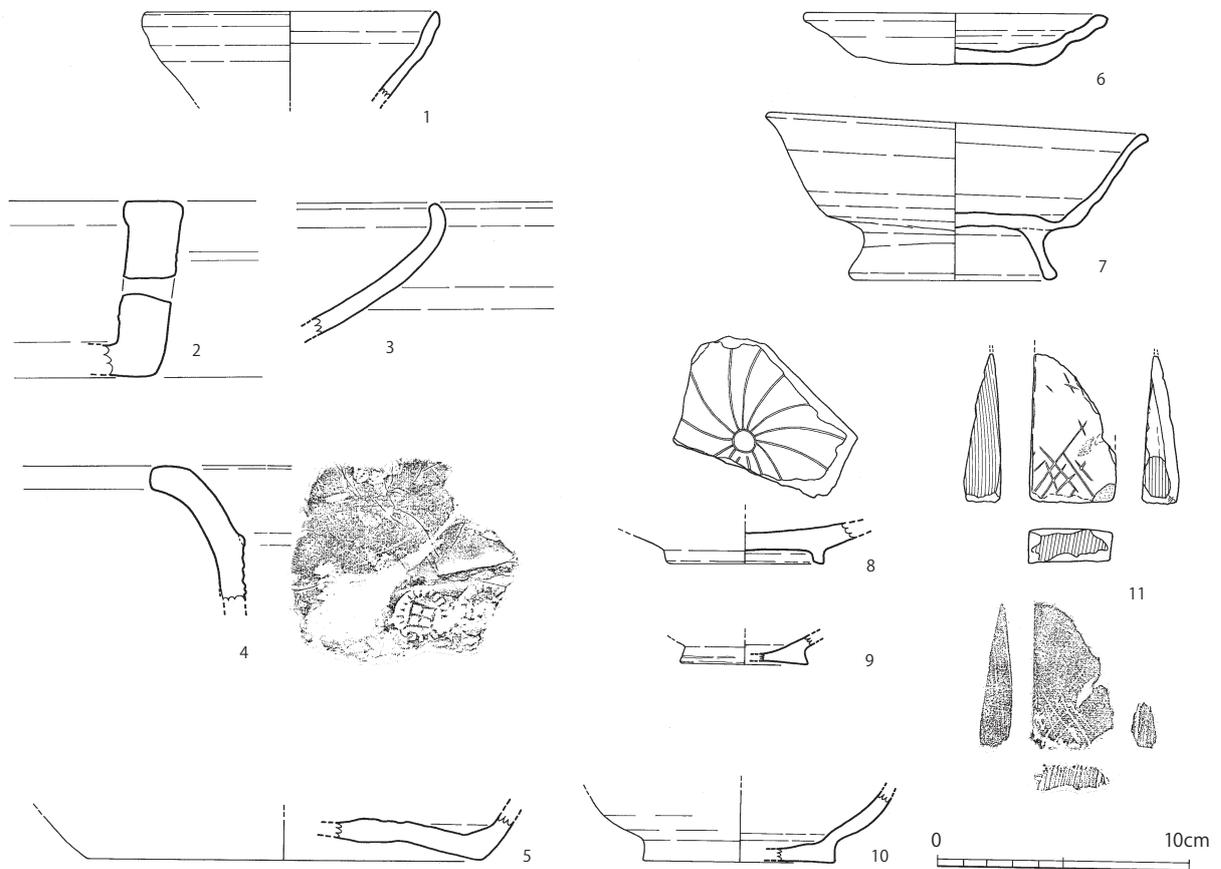
古代の遺構？

10-SK029出土遺物(第7-55図)

1は中国産天目碗で、底部を欠損する。2~4は瓦質土器である。2は火鉢で、体部に貫通孔を



第7-54図 10-SK029実測図 (1/40)

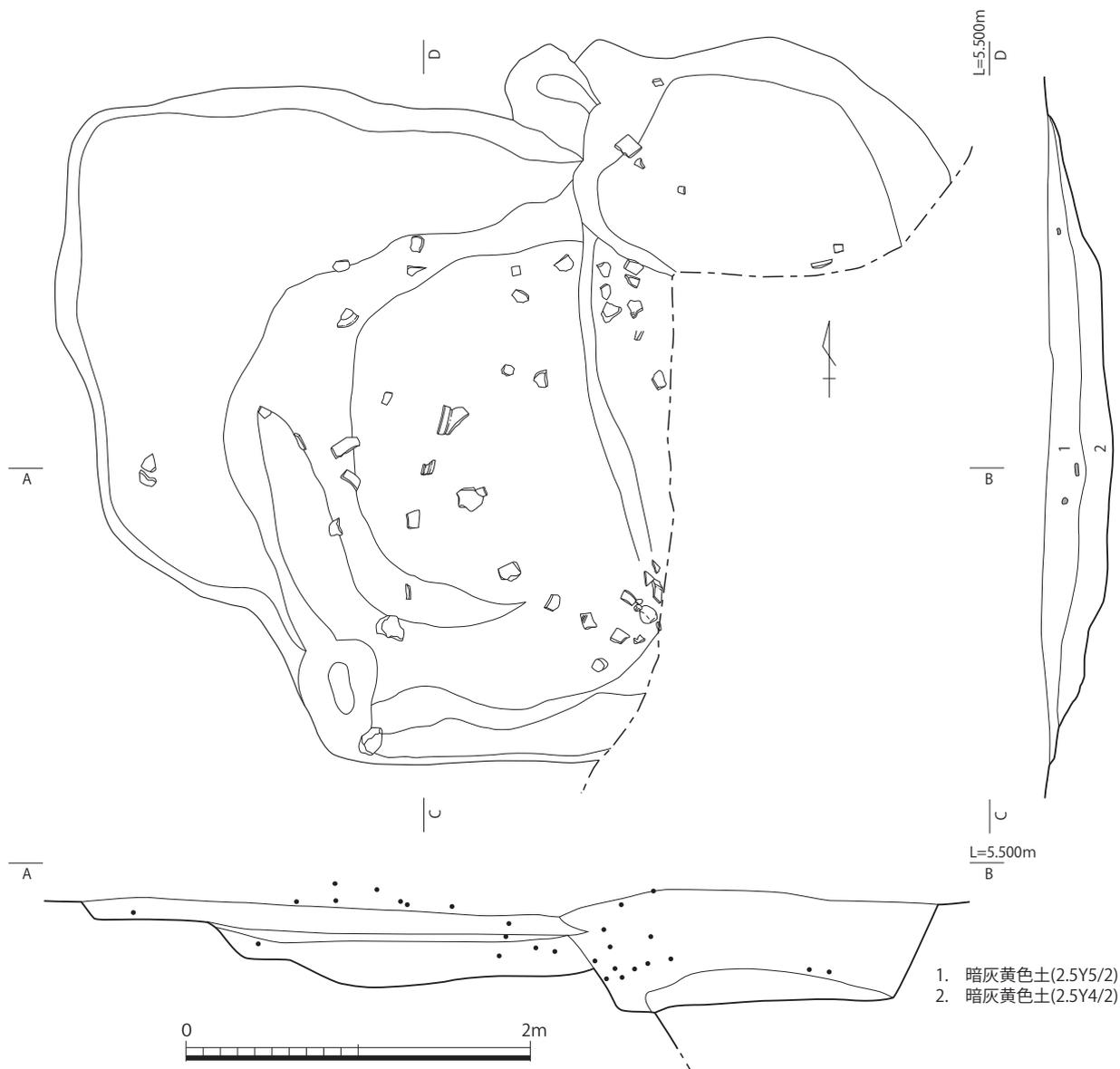


第7-55図 10-SK029出土遺物実測図 (1/3)

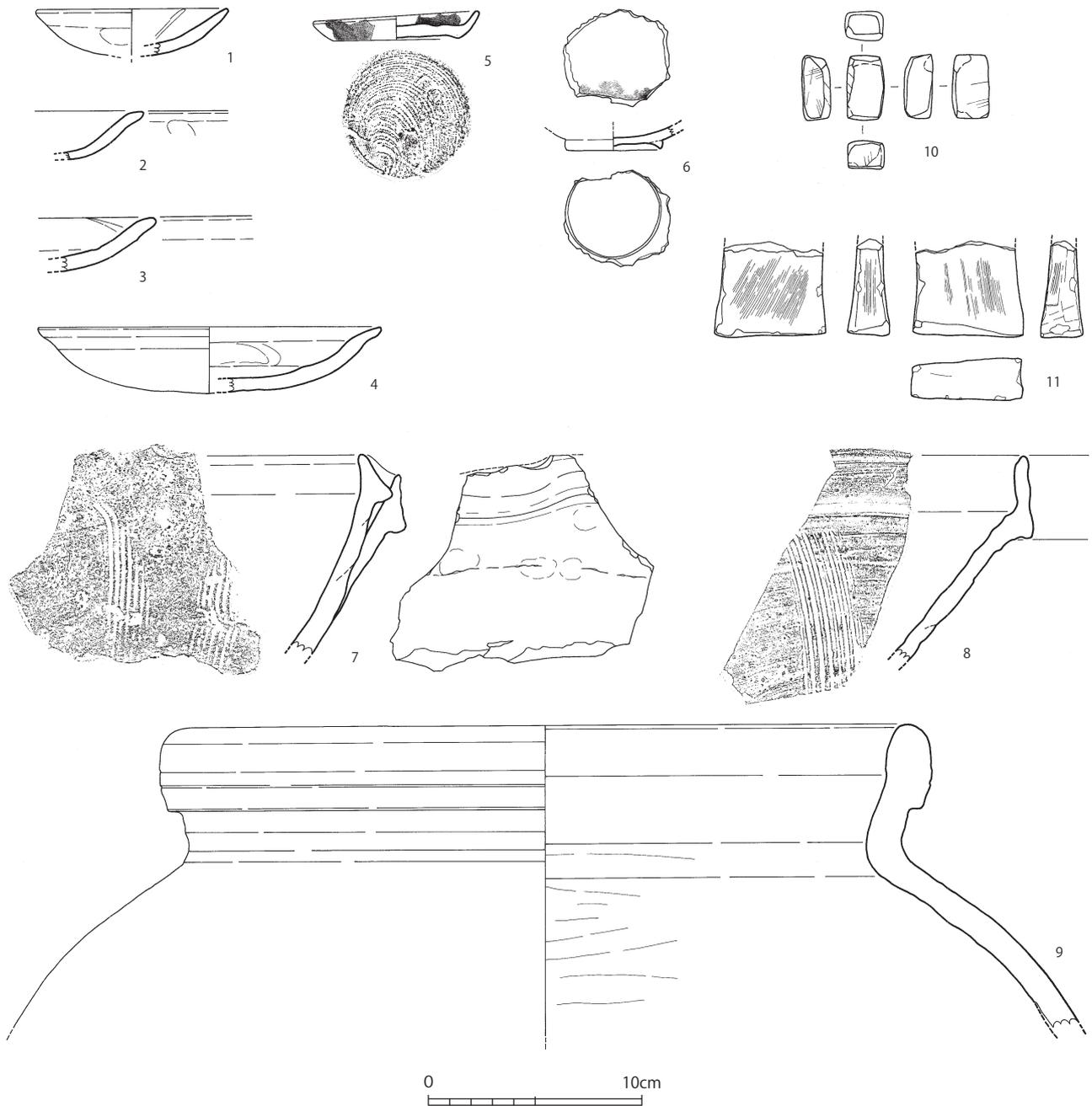
設けている。3は鉢の口縁部である。4は風炉または火鉢の口縁部で、外面に特徴的な「田」の字状文様の刻印を連続して押捺している。5は中国産陶器壺の底部で、混入品の可能性も考えられる。6～10は9～10世紀に比定される資料で、混入品と考えておきたい。6・7は土師器で、6は皿で完形品、7は高台付きの壺である。8・9は緑釉陶器の皿で、8の内面には刻花による文様が認められる。10は土師器壺の底部である。11は砥石で、裏面に格子目状の刻線が認められる。

10-SK030 (第7-56図)

AC63区に位置する土坑で、遺構の平面プランは不整形である。その規模は東西3.6m、南北3.86m、深さ0.4mを測り、東側は段丘を形成する地形により削平されている。完掘状態をみると、数基の土坑が重複していたことがわかる。遺物は中央の土坑に集中しているようだが、複数の土坑のものを一括して取り上げており、製作年代の異なるものが、少量混入しているようだ。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物より、遺構の年代はVI期(16世紀後半)に比定される。



第7-56図 10-SK030実測図(1/40)



第7-57図 10-SK030出土遺物実測図(1/3)

10-SK030出土遺物(第7-57図)

1～4は京都系土師器の皿で、器壁がやや薄いため、16世紀中頃から後半に比定される資料であろう。5は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。口縁部から胴部の内外面にはススが付着している。16世紀以前の所産で、混入品と思われる製品である。6は在地産の瓦質土器碗で、高台内に墨書文字が認められる。文字は4～5文字が書かれているようであるが、判読不明である。7・8は備前焼播鉢で、7は中世5期(15世紀後半～末)、8は中世6期(16世紀前半)に比定される資料である。9は備前焼大甕で、16世紀代の製品である。10・11は砥石で、10は小型の仕上げ砥で完形品、11は上部を欠損している。

墨書文字のある瓦質土器碗の底部

10-SK031 (第7-58図)

AA62～AA63区に位置する遺構で、その規模は東西2.2m、南北9.2m、深さ0.1mを測る。その平面プランは溝状であるが、遺構の深度が浅いため、溝というよりは窪みの状態を呈している。15世紀後半の溝10-SD040、15世紀前半の溝10-SD045、14世紀後半の溝10-SD223と切り合い関係を有し、これらのすべての溝から切られている。埋土上面から埋土中位にかけて大量の土器片が出土しており、破片が集中した「土器溜め」の様相を呈している。出土した土器は小破片が大半となるが、ほぼ完形に復元されるような大型破片も少なからず存在する。また、土器片のほかに、炭化物や白色の玉砂利が集中する部位も認められた。このような土器の出土状態は、ある意味異様な感じを覚え、この遺構の近隣で土師質土器を大量に使用した祭祀が行われたことを示唆している。出土遺物や切り合い関係から、遺構の年代はI期(14世紀前半)に比定される。

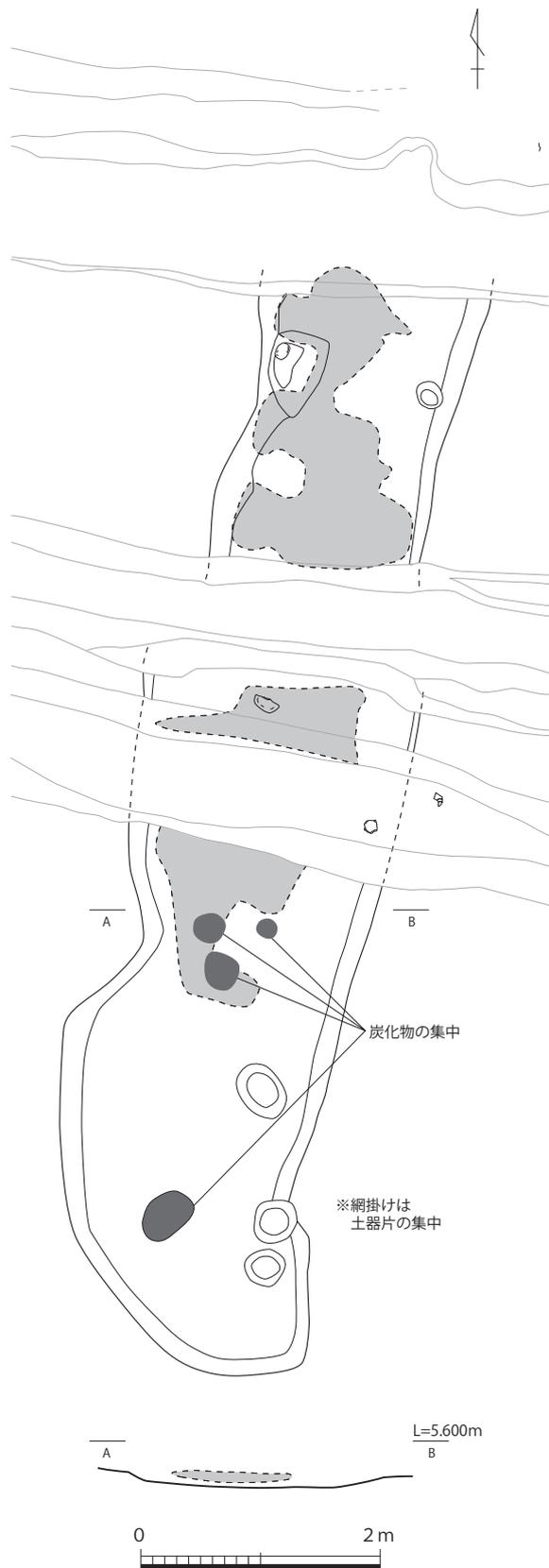
10-SK031出土遺物 (第7-59図～第7-63図)

1～26は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕、もしくは糸切り痕のみが認められる。27は口縁部のみの破片であるが、京都からの搬入品と推定される資料で、京都産土師器皿Sに分類される製品である。28～66は土師質土器坏で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕、もしくは糸切り痕のみが認められる。また、28・33・39・57・62にはススの付着が認められる。

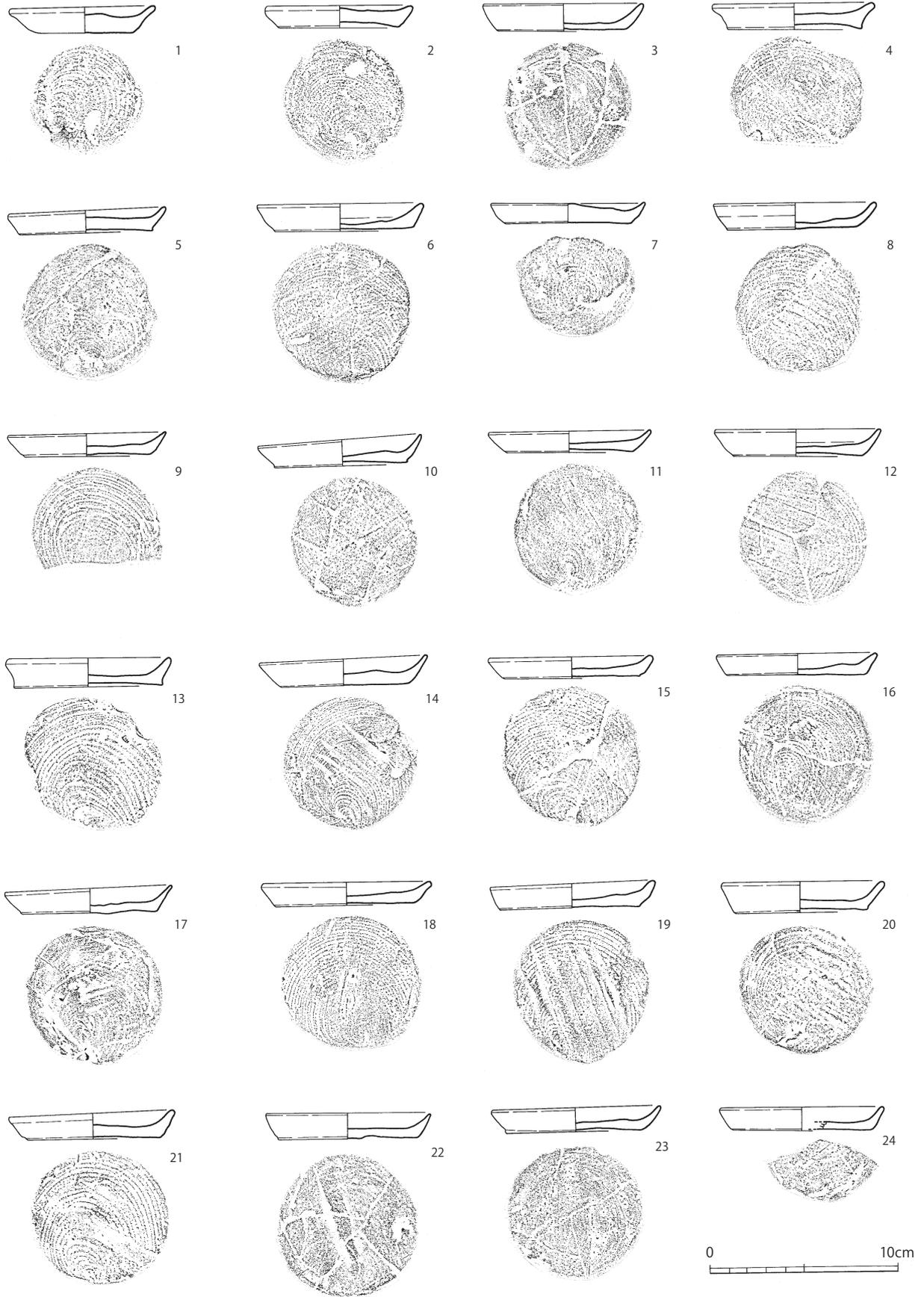
67は中国産の白磁小皿で、口縁端部は口剥げになる。

68～70は砂岩質の石材を使用した砥石である。70の体部には溝が設けられており、玉類などの研磨に使用された製品であろう。

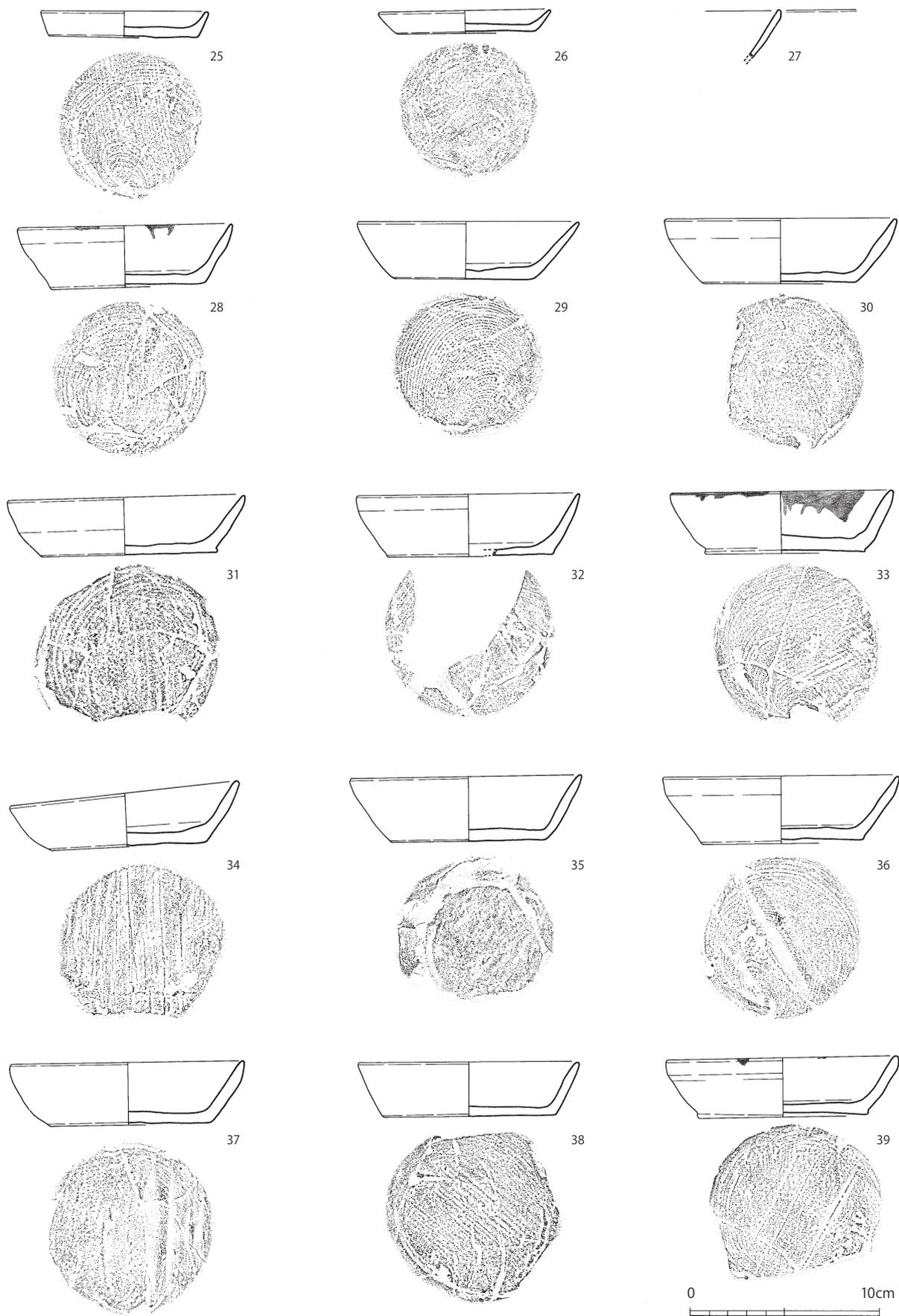
大量の  
土器片  
土器溜め



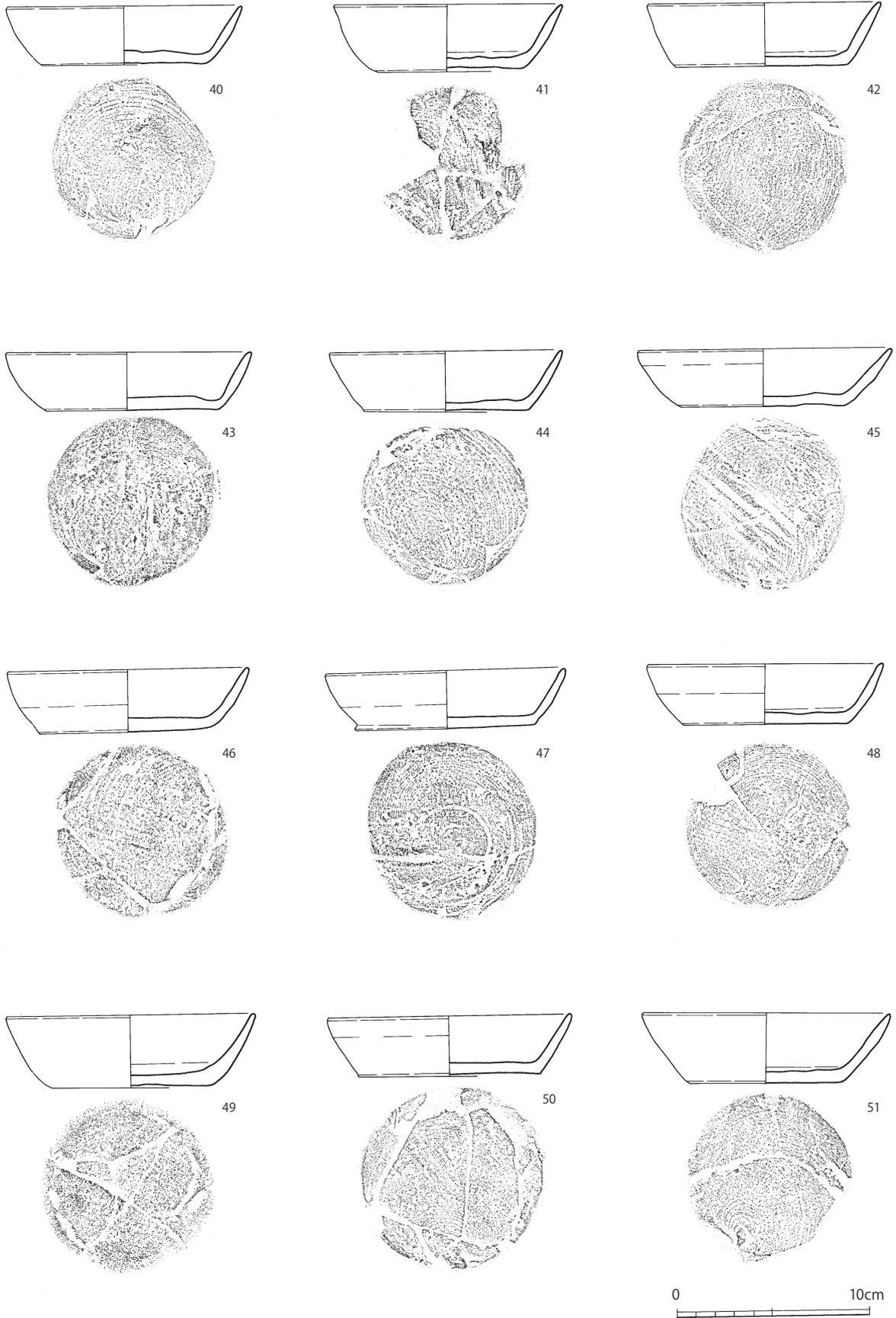
第7-58図 10-SK031実測図(1/60)



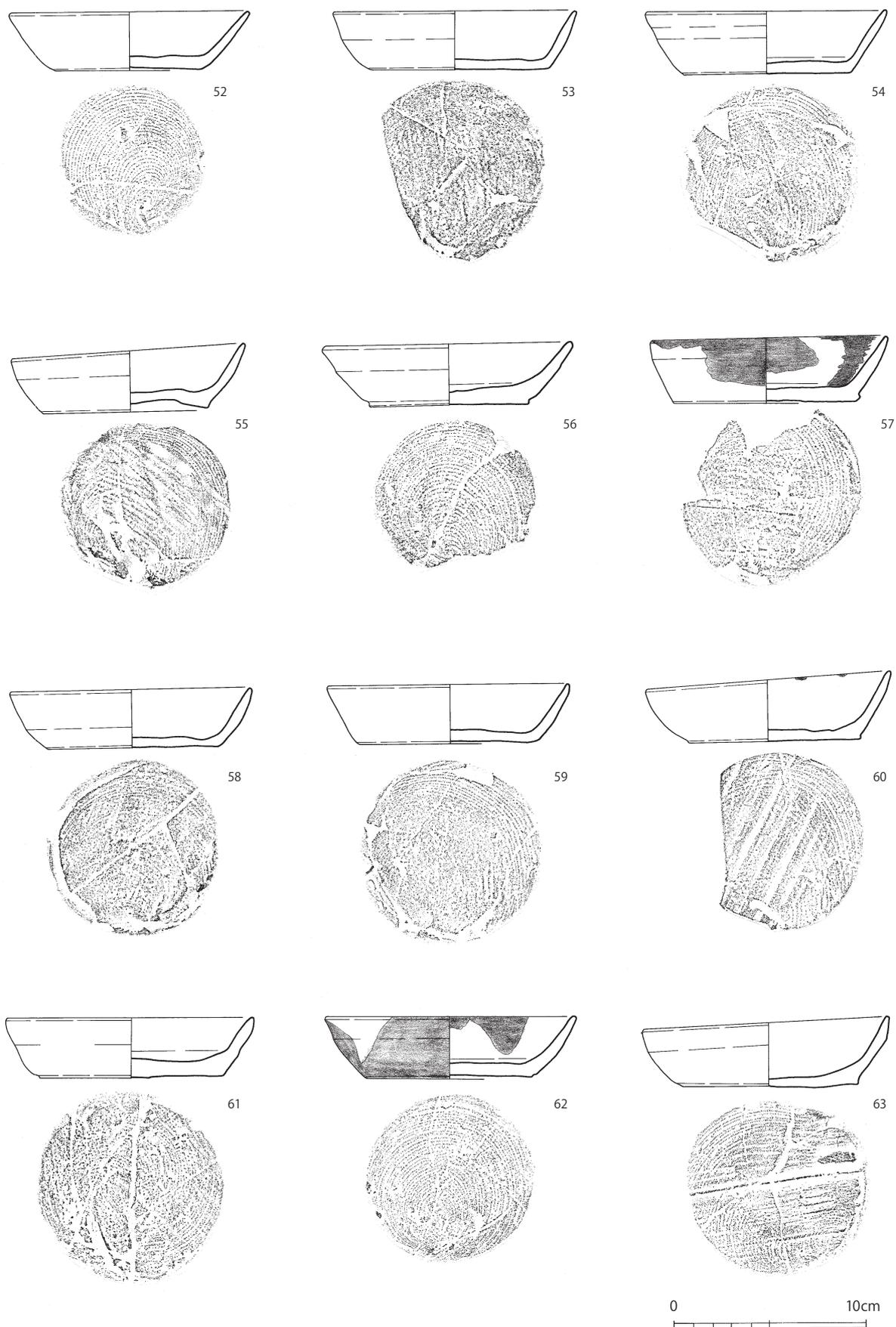
第7-59図 10-SK031出土遺物実測図① (1/3)



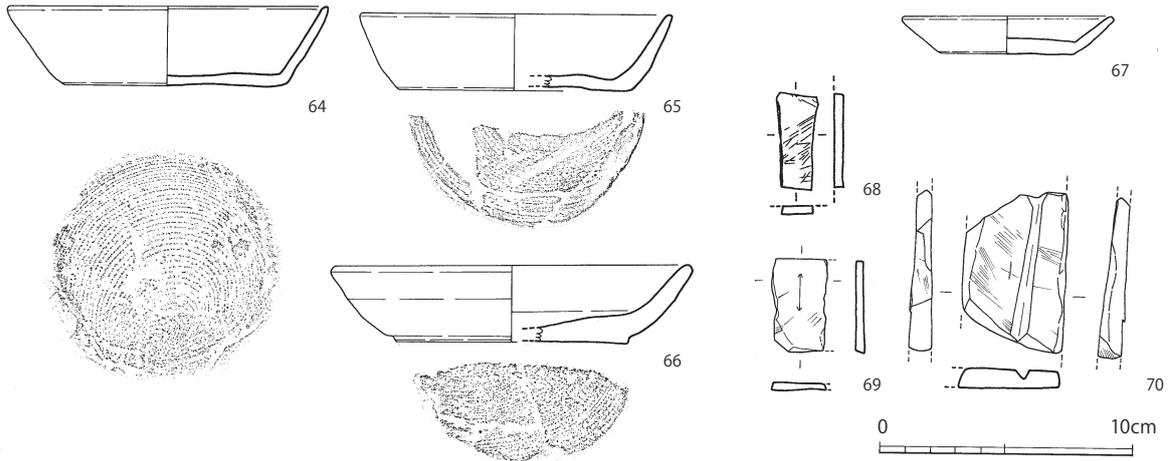
第7-60図 10-SK031出土遺物実測図② (1/3)



第7-61図 10-SK031出土遺物実測図③ (1/3)



第7-62図 10-SK031出土遺物実測図④ (1/3)



第7-63図 10-SK031出土遺物実測図⑤ (1/3)

10-SK034 (第7-64図)

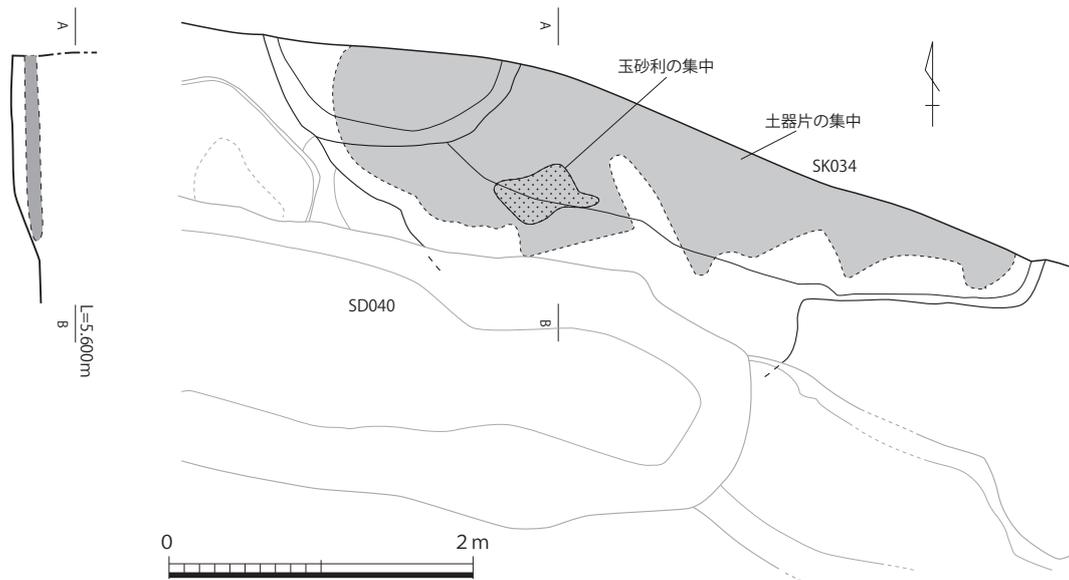
AC62区に位置する遺構で、その規模は東西5.4m、南北1.1m、深さ0.1mである。遺構の北側は、調査区外のため未調査である。15世紀後半の溝10-SD040のほか、時期不明の土坑と切り合い関係を有する。溝10-SD040との構築順序は、10-SK034 → 10-SD040となる。10-SK034の深度は浅く、明確な掘り込みプランは確認できない。遺構は窪み状のものに過ぎないが、埋土には多量の土器片が集中し、いわゆる「土器溜め」の様相を呈していた。出土遺物には土器片が主体となるが、完形に復元される大型破片も存在する。また、埋土の一部には玉砂利が集中している部位も認められた。これらの遺物の出土状況から、この遺構の周辺で大量の土器を使用する祭祀が行われたと考えられる。出土遺物から、遺構の年代はI期(14世紀前半)に比定される。

土器溜め  
玉砂利の  
集中

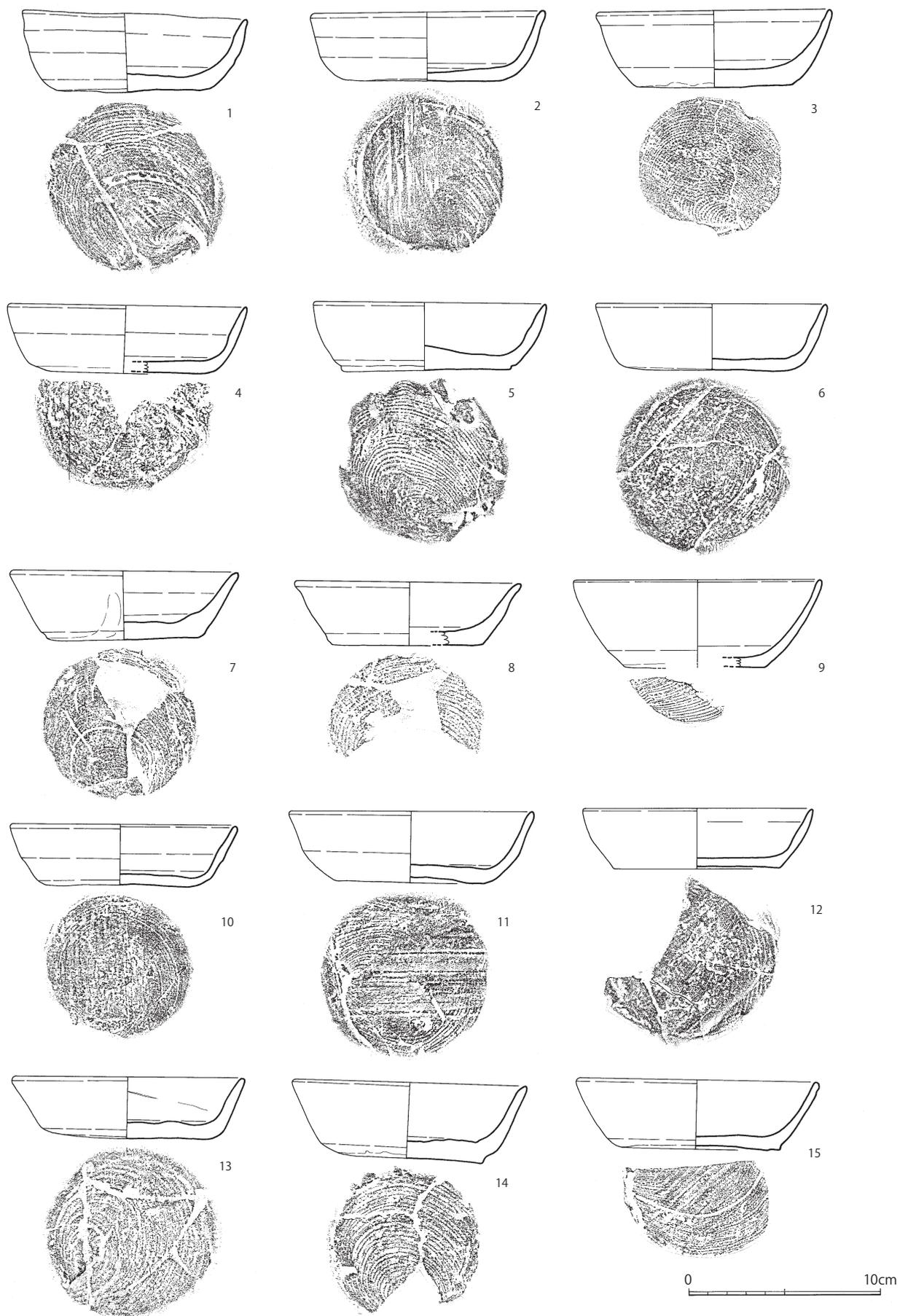
10-SK034出土遺物 (第7-65図～第7-67図)

1～25は土師質土器坏で、在地系の製品と推定されるもの。26～28は京都からの搬入品で、京都産土師器皿Sに分類される資料である。29～39は土師質土器小皿で、38は口縁部を意図的に打ち欠いている。また、39には底部内面に渦巻き状のロクロ目が顕著に認められ、底部中央に貫通孔を設けている。40は器種不明の土師質土器の底部で、脚台部が残存する。41は備前焼播鉢で、中世2期bから中世3期b(14世紀前半～後半)の製品である。

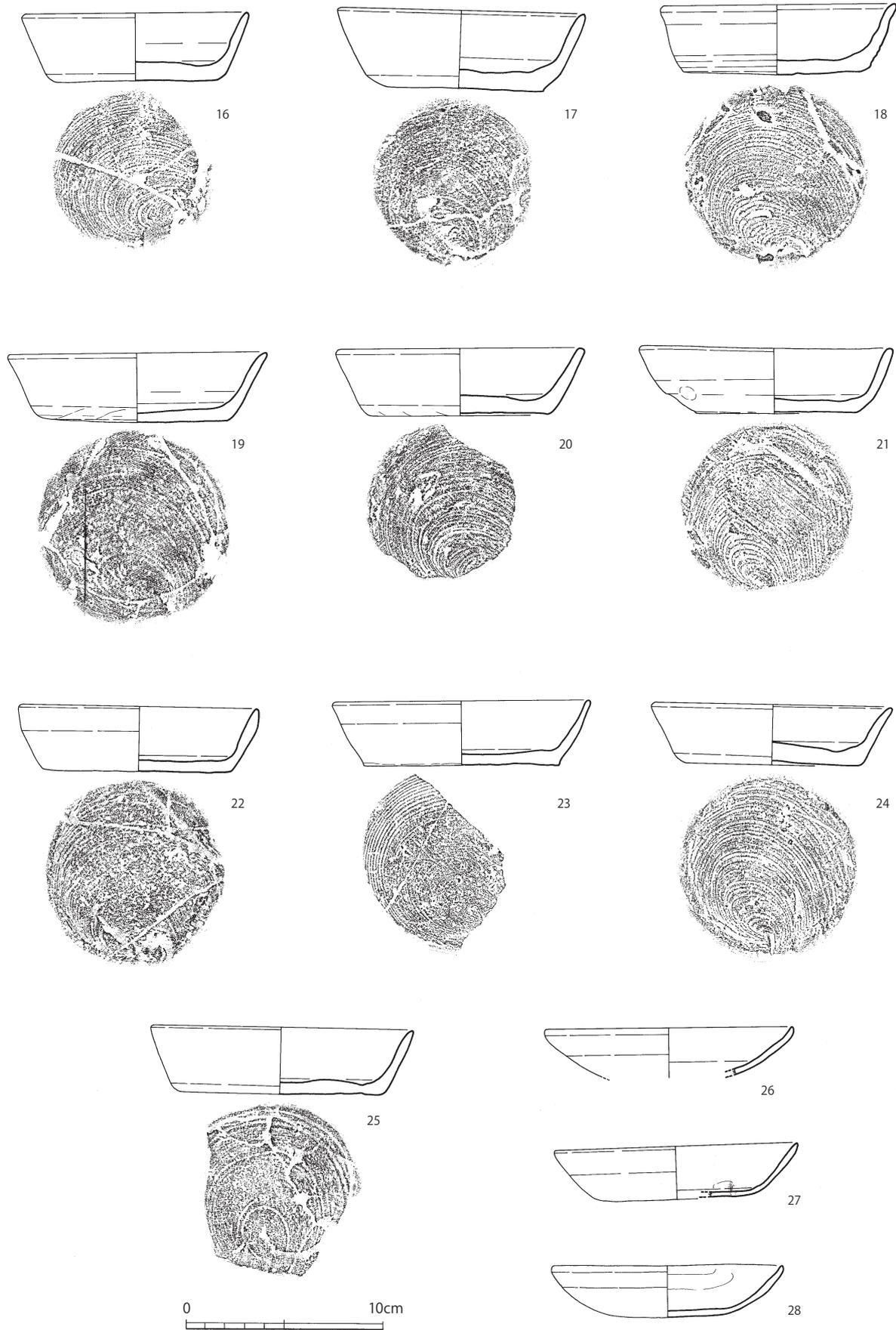
内面に渦  
巻き状の  
ロクロ目  
がある  
土師質土  
器小皿



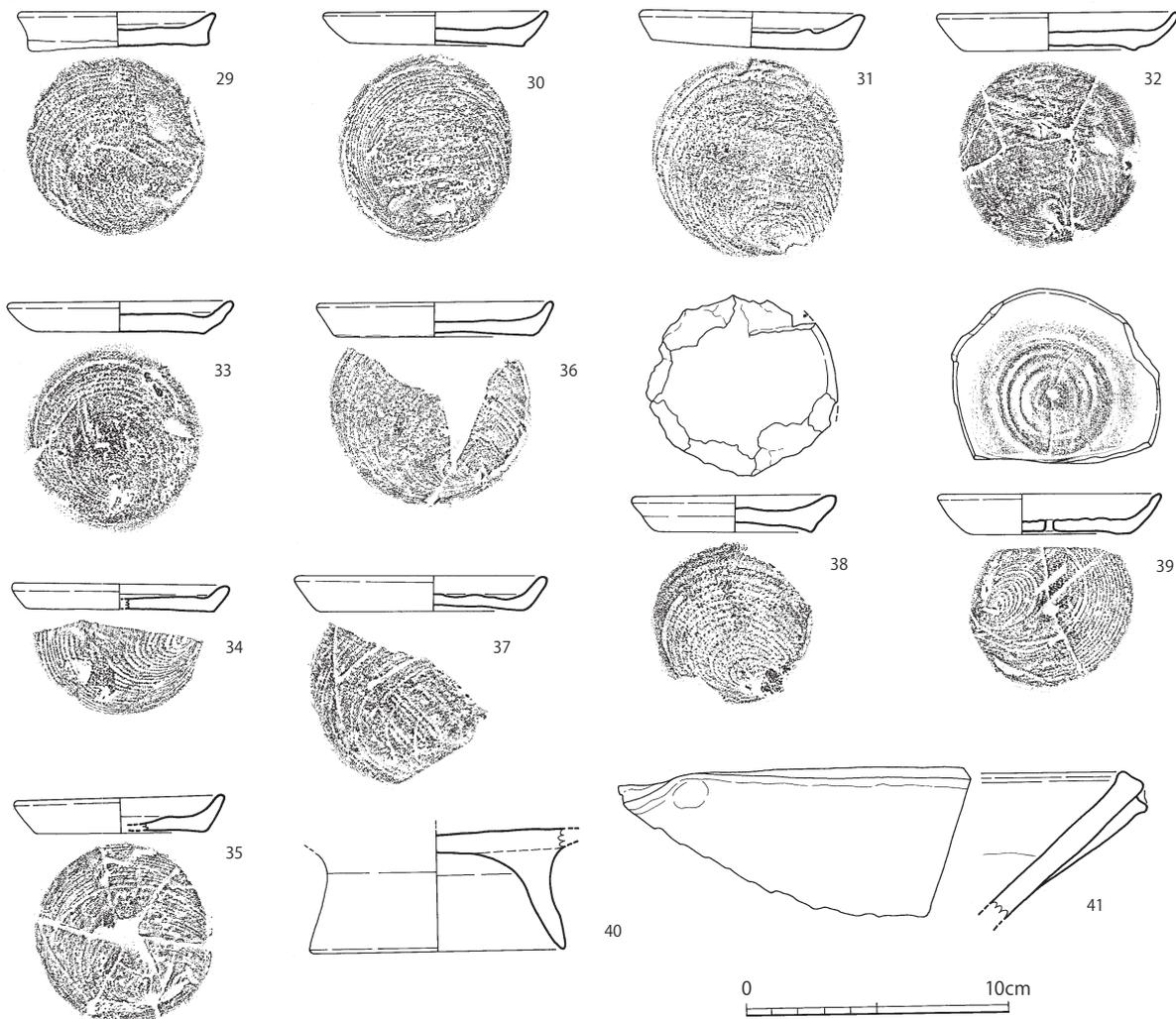
第7-64図 10-SK034実測図 (1/50)



第7-65図 10-SK034出土遺物実測図① (1/3)



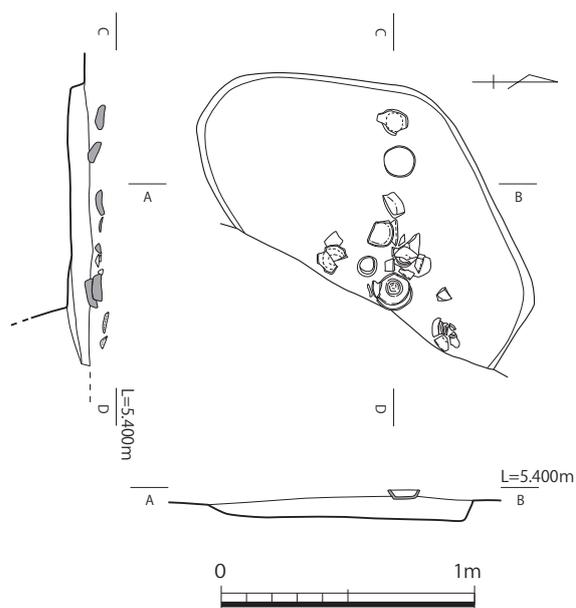
第7-66図 10-SK034出土遺物実測図② (1/3)



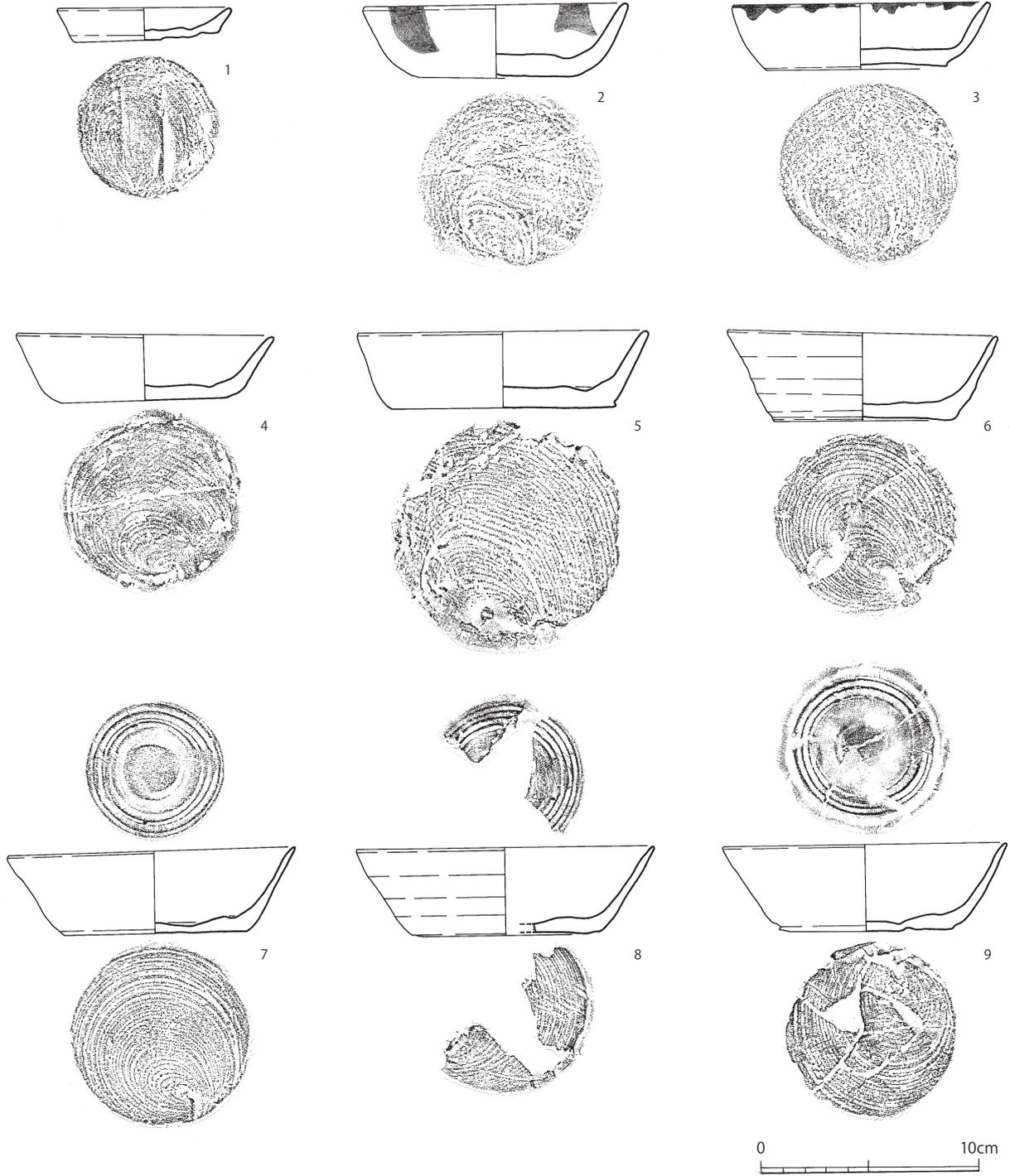
第7-67図 10-SK034出土遺物実測図③ (1/3)

10-SK036 (第7-68図)

AC62区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は長軸1.5m、短軸0.85m、深さ0.08mである。遺構の南側は、15世紀後半の溝10-SD045の構築によって破壊されている。遺構深度が非常に浅いため、上面はかなり削平を受けているものと推定される。検出上面付近から土師質土器が集中して出土したほか、白色・黒色・褐色を呈する小礫(玉砂利)が少量出土した。底面付近には遺物はほとんど出土しない。土師質土器は類例が少ないものであり、詳細な年代を判定するのは難しいが、切り合い関係なども考慮して、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～後半)に比定しておきたい。



第7-68図 10-SK036実測図 (1/30)



第7-69図 10-SK036出土遺物実測図 (1/3)

10-SK036出土遺物 (第7-69図)

1は土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕と板状圧痕が認められる。2～9は土師質土器杯で、底部外面には糸切り痕と板状圧痕、もしくは糸切り痕のみがある。2と3の口縁端部内外面にはススが付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。また、7～9の底部と胴部の境界付近の内面には渦巻き状のロクロ目が顕著に認められる。底部内面中央部のロクロ目は、意図的にナデ消されているようだ。豊後府内においては、類例の少ない土師質土器杯の資料である。

渦巻き状  
のロクロ  
目

10-SK037 (第7-70図)

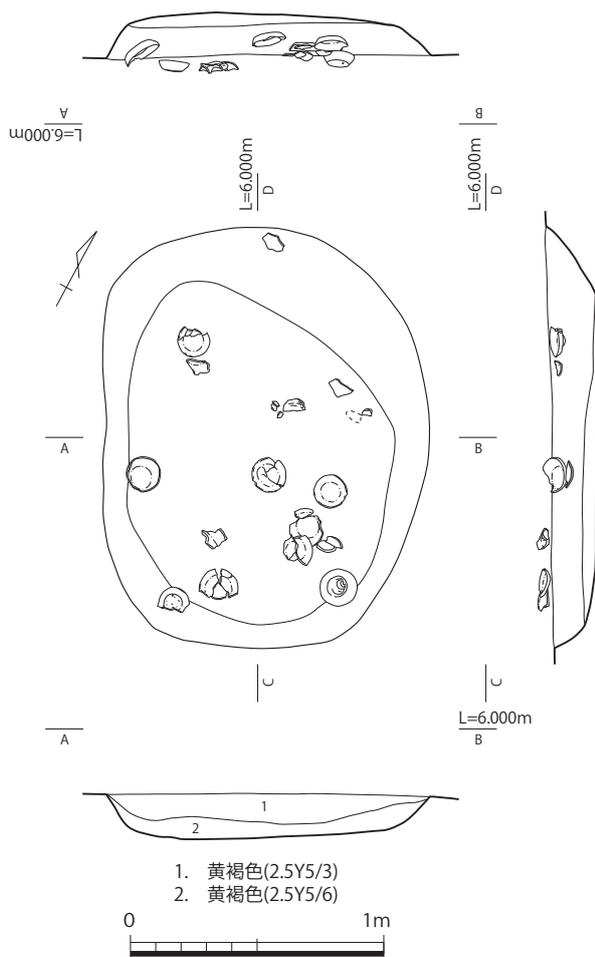
T61～T62区に位置する土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西1.25m、南北1.69m、深さ0.18mである。埋土は2層に分層され、それぞれに炭化物が少量含まれている。埋土の中位から上位にかけて、土師質土器の坏や小皿、有溝丸形土錘などがまとまって出土した。これらは完形品または完形近くに復元される大型破片で、良好な一括資料である。出土遺物から、遺構の年代はI期(14世紀前半)に比定される。

良好な  
一括資料

10-SK037出土遺物 (第7-71図)

1・2は土師質土器小皿で、底部外面には糸切り痕のみが認められる。3は有溝丸形土錘で、この形態の土錘が14世紀前半に製作されたことを示す良好な資料のひとつである。4～12は土師質土器坏で、体部に丸味をもつ資料が多い。底部外面はほとんどが糸切り痕のみが残る資料であるが、10のみ糸切り痕と板状圧痕が認められる。

有溝丸形  
土錘



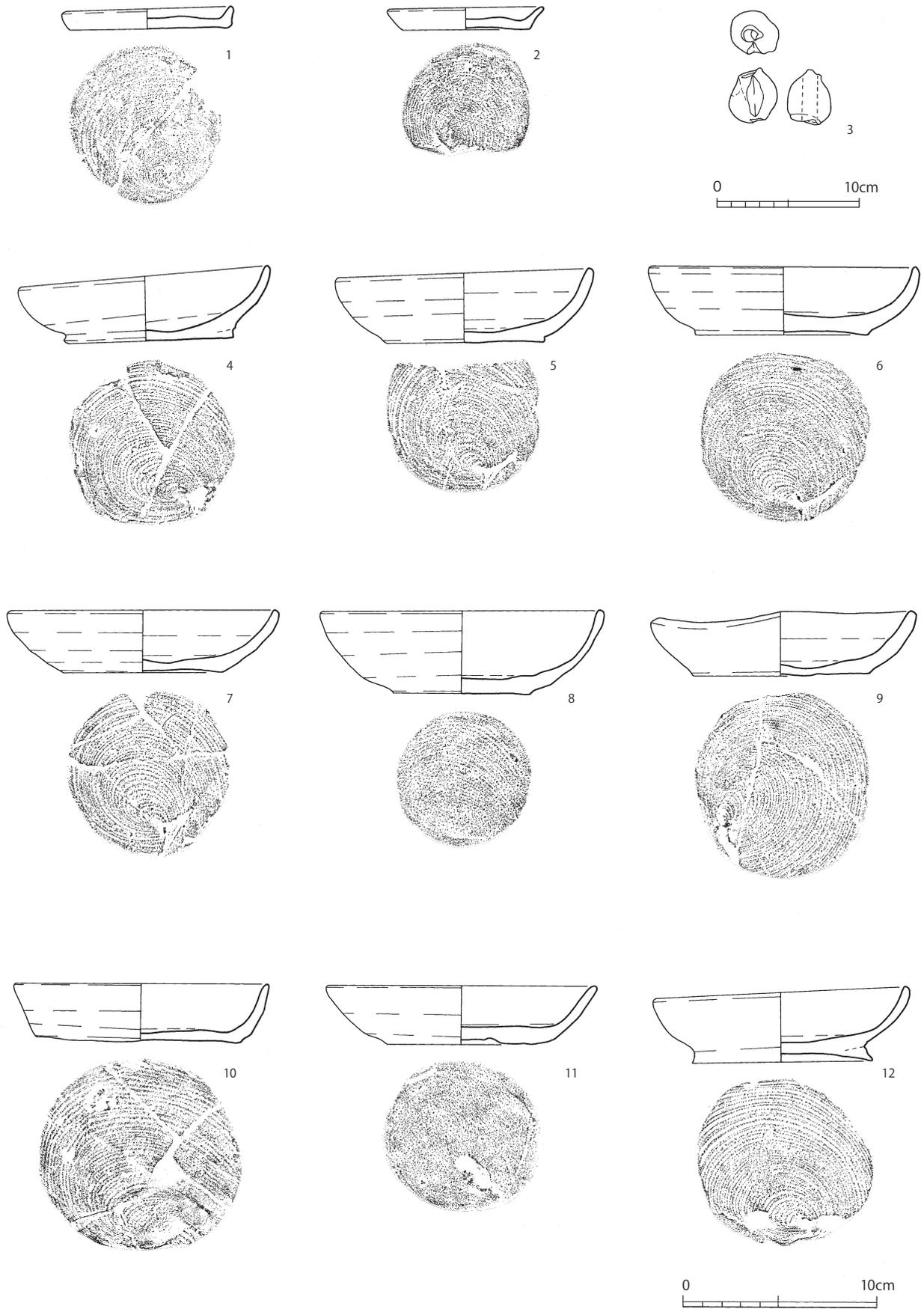
第7-70図 10-SK037実測図(1/30)

10-SK038・10-SK049(第7-72図)

いずれもW64区に位置する土坑である。

10-SK038の平面プランは不整形で、その規模は東西2.7m、南北3.8m、深さ0.8mである。遺構の平面形態や土層から、明らかに複数の遺構が重複していることがわかる。遺構の北西寄りに礫や遺物が特に集中しており、当該地点の出土遺物は一括性が高く、京都系土師器皿や鳥衾瓦、鬼瓦の破片も含まれる。また、南西側にも少数の遺物がまとまって出土した地点があり、この部位からは、底部に墨書がある京都系土師器皿が出土している。また、出土地点を特定できなかったが、埋土からの出土遺物の中に、1590年代以降に出現する瀬戸美濃産折縁ソギ皿の小片がある。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物の年代観から、遺構の年代はVI～VII期(16世紀後半～末)に比定される。

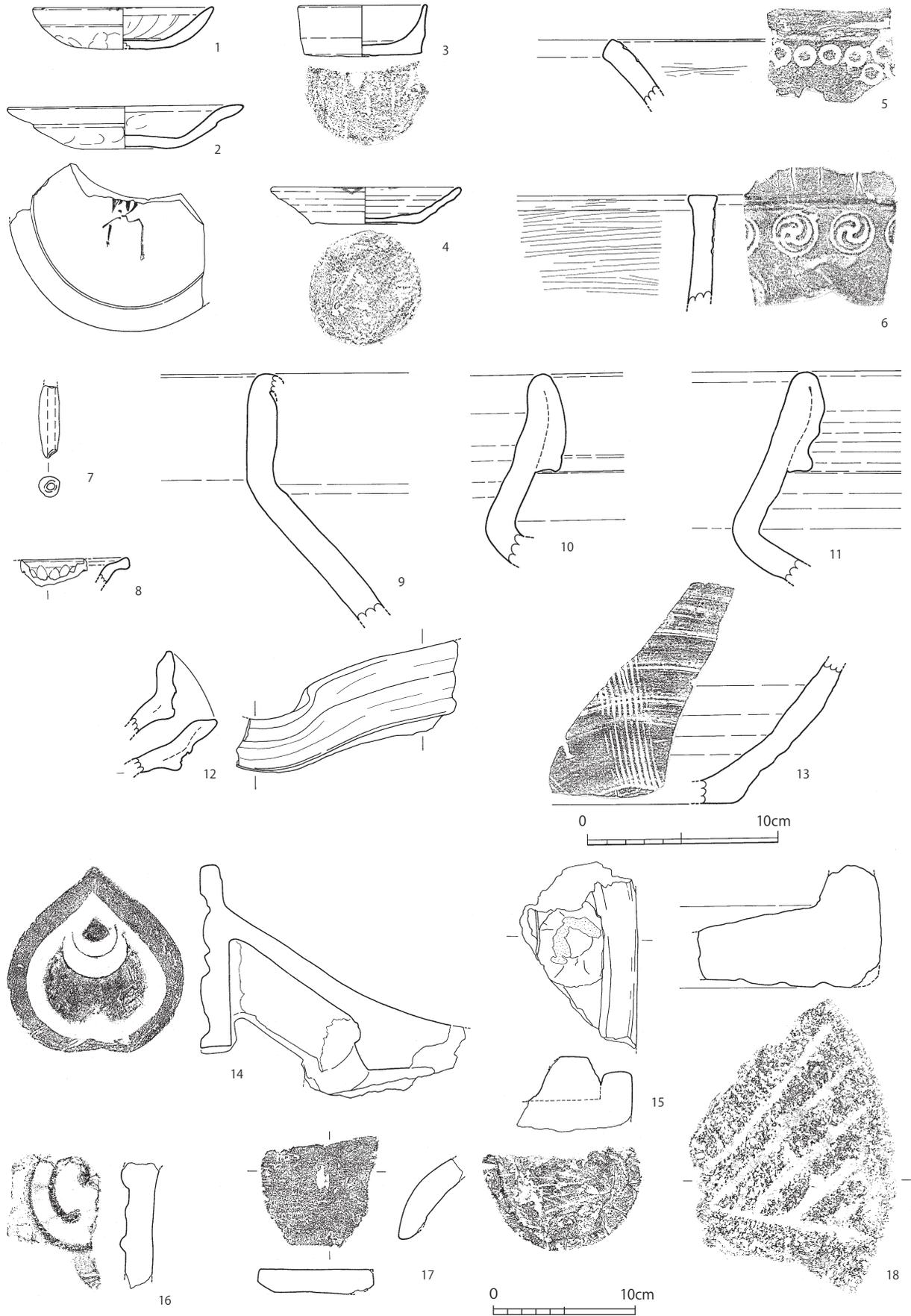
10-SK049の平面プランは略楕円形で、その規模は東西2.6m、南北2.1m、深さ0.4mである。南側を16世紀後半から末の土坑10-SK038、北側を16世紀後半の土坑10-SK051によって切られている。埋土から礫が少量出土したほか、京都系土師器などの土器片や土製品、銅銭などが出土した。この土坑の性格も廃棄土坑である。出土遺物の年代観や斬り合い関係から、遺構の年代はVI期(16世紀後半)に比定される。



第7-71図 10-SK037出土遺物実測図 (1/3)



第7-72図 10-SK049・10-SK038・10-SK048実測図 (1/40)



第7-73図 10-SK038出土遺物実測図(1/3、1/4)

10-SK038出土遺物 (第7-73図)

1・2は京都系土師器の皿である。いずれも器壁が厚い資料であるが、特に2については、口縁部に強いナデを施すことによって外反させるなど、時期的に新しい様相を示す。また、底部には人名と思われる墨書があり、「□門」と判読できる。3は土師質土器小皿で、口縁部が直線的に立ち上がる形態を呈し、底部外面には糸切り痕が認められる。4は在地系の土師質土器皿で、胴部内外面にロクロ目を残す資料である。口縁端部外面の一部にススの付着が認められる。5・6は瓦質土器火鉢または風炉で、5は口縁部外面に円形竹管による円形文、6は巴文の刻印を押捺する。7は管状土錘で、上端部を欠損する。8は瀬戸美濃産陶器の折縁ソギ皿の口縁部小片である。1590年代頃の製品である。9～13は備前焼で、9～11は大甕の口縁部、12・13は播鉢である。この中で最も新しい様相を呈するものは、口縁部外面に凹線を施している11で、近世1期(16世紀後半～末)に比定される。14は鳥衾瓦で、瓦当文様は宝珠文である。被熱しているためか、全体の色調は淡褐色を呈する。15は鬼瓦、16は軒丸瓦、17は面戸瓦で、いずれも破片である。18は石臼の上臼の破片である。

墨書のある  
京都系  
土師器皿

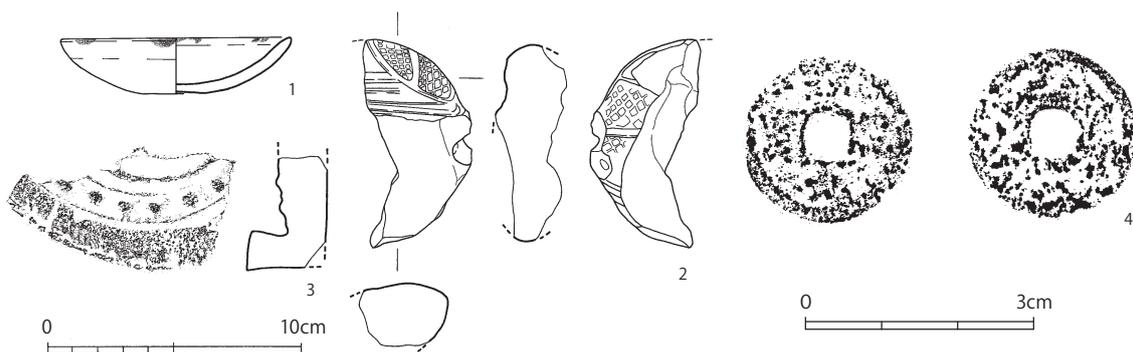
折縁ソギ皿  
(1590年代)

鳥衾瓦

10-SK049出土遺物 (第7-74図・第7-75図)

第7-74図1は京都系土師器の皿で、口縁端部の内外面にはススの付着が認められる。2は用途不明の土製品で、型押しによって整形されている。3は軒丸瓦の破片である。第7-75図4は銅銭で、銹出により銭文は判読できない。

用途不明  
土製品



第7-74図 10-SK049出土遺物実測図① (1/3)

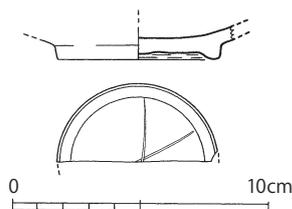
第7-75図 10-SK049出土遺物実測図② (1/1)

10-SK048 (第7-72図)

W64区に位置する遺構で、北側には10-SK049、西南側には10-SK038が位置している。周辺の遺構の重複や攪乱が激しく、遺構の形態や規模、切り合い関係などを明らかにすることはできなかった。礫や土器・陶器片などが少量出土しており、本来は廃棄土坑であったと考えられる遺構である。出土遺物には備前焼の甕や緑釉陶器皿などがあるが、遺構の詳細な年代を判定できるものはない。したがって、遺構の時期は不明である。

10-SK048出土遺物 (第7-76図)

図示した遺物は、緑釉陶器皿の底部である。9～10世紀代に比定される資料で、中世の遺物ではないので混入品であろう。底部外面には「X」字状の刻線が認められる。



第7-76図 10-SK048出土遺物実測図 (1/3)